
あなたと永遠の時を

九条 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたと永遠の時を

【Nコード】

N2741Q

【作者名】

九条 樹

【あらすじ】

【どうして鮎川くんを好きになっちゃったんだろう。

鮎川くんじゃなければこんな辛い思いをしなくてすんだのに。

ゆきちゃん、鮎川くん、ごめんね。】

Wヒロインを中心に男女が織り成す純な恋愛物語。

回想録という形で複雑な四角関係だが、まだ大人になりきれない皆が純粋な恋心を持つ高校時代のエピソードを語り。その後大学進学から結婚。そして物語中の現在の時間である結婚後との絡みを一連の流れで、愛、友情、楽しみ、苦しみ、嫉妬、裏切り、誤解など愛

するが故の人間の苦楽を書いた長編恋愛物語です。

第1話 プロローグ

俺は地下鉄の駅を降り、地下道を歩いて百貨店へ向かう。

百貨店に特に用があるわけではないが15年ぶりに生まれた町に戻ってきたついでに忘れられないあの場所を見たいと思ったから少し遠回りをしたのだ。

15年ぶりにこの町に戻ってきたのは同窓会の葉書をもらったからである。どうやって俺の住所を調べたのか分からないが俺のところに招待状が着たので少し迷ったが出席することにした。あれから15年も経っていることだし・・・

百貨店の地下から1階に上がりそして正面玄関から外に出る。

時間は昼の12時を少し過ぎたところで天気もよく空の青が眩しい。そういえば腹が減ったな。何か食べたいがこの時間この辺りはどこも人がいっぱいではなければ食事に取りつけそうにない。

そんなことを考えながら百貨店前の交差点に目をやる。

ここだったよな、あの事故があったのは。

事故があった時にここにいたわけではないが後でこの場所で事故があったと聞いたのだ。

「あれから15年か」

思わず独り言が出てしまった。

あの後色々あっていたたまれなくなった俺は高校の卒業を待たずに引越してしまうことになったのだ。

そんなことを考えながら特に何かを見るでもなく交差点の向こう側をぼーっと見つめながら百貨店の前で信号が変わるのをまっている。

交差点を渡ったところから商店街が続いてその商店街の入り口の隣はビジネスホテルだ。

ビジネスホテルの駐車場から一台の車が出てきた。

車にあまり興味の無い俺はその車がなんという名前の車か見当もつかないが一応車の免許は持っているのでその車体を見れば軽自動車だということくらいは分かる。

なんとなくその車を見ていると運転席に座っている男の顔が俺の知ってる顔のような気がする。

15年振りなのであまり自信は無いがあれは確かに・・・

しかし助手席に座っている女性を見て確信が持てた。女性も俺の知っている顔だ。

あの二人がホテルから？まさか？

などと考えながら見ていると軽自動車はホテルのガードマンに誘導されて駐車場から歩道を横切り車道に出る。

その時トラックが後ろから物凄い！と言うほどではないがそこそこのスピードで突っ込んできた。

ガードマンは歩道を歩く人たちにしか気を配っていないようでトラックの存在は気付いていそうだったがそのまま車道へ誘導してしまったように見える。

軽自動車の二人も笑顔で顔を見合わせているようでトラックの存在に気づいていないようだ。

トラックの運転手を見ると完全に余所見をしている。馬鹿な！

危ない！そう思った瞬間まるで目の前に雷でも落ちたかと思うような激しい金属音が辺り一面を支配した。その雷音の放たれたであろう位置を皆が一斉に見るのが周りを見なくても分かった。

俺は既に走りながら交差点を渡ろうとしていた。交差点を駆けながら現場の状況を見てみると、後ろからぶつかられた軽自動車は歩道にガードレール代わりのように作られた植え込みを突っ切りすぐ隣にあった地下鉄の出入り口になっている階段を落ちていった。

俺は慌てて地下鉄の入り口へ向かう。

辺りは騒然となり野次馬が次々と地下鉄の入り口を固める。

俺は交差点の反対側にいたので入り口に着いた時には既に何重にも人の壁ができてしまっていた。

しかしあの車に乗っているのは間違いなく俺の同級生だ、この野次馬達に遠慮なんてしてられない。

俺は無遠慮に人を掻き分け最前列へ向かう。

入り口から見ると車は階段の途中にある踊り場に作られたガラス扉を突き破ったところだとまっていた。

そこでハタと気付いた。救急車を呼ばなくては。

携帯を取り出し119番に掛けようとして手を止める。よく見ると多くの人達が既に救急車や警察に電話しているようだ。

電話をするのをやめて急いで階段を下り、車へ向かう。だが車の前半分がガラス扉を破つての向こう側にあるのでどうにかしたくても何も手が出せない。下手に触って車がさらに下に落ちて困る。中の二人はよく見えないがシートに座ったまま全く動いていない。

俺以外にも数人この踊り場近くまで下りて来ているが誰も手を出せないでいる。

その中の一人が誰にともなくこの事故は不幸中の幸いだと言う。何の事を言ってるのか分からなかったがその人の次ぎの話で理解できた。

今は昼時で人通りの多い時間帯だがこの入り口は丁度工事中だったらしく誰も居なかった。

現場の人達も昼食を摂るためにこの場を離れていた為他の人を巻き込む事はなかったということだった。確かにそうかもしれない、普通ならこの階段にも何人も人が居ただろう。そうすればもっと被害者が増ええていたことだろう。

そうこうしているとパトカーのサイレンと救急車のサイレンが聞こえてきた。

救急車よりも先にパトカーが現場に着いたようで警察官二人が階段

を下りてきた。

一人の警官がガラス扉越しに車の中の人間に大声で声を掛けている。もう一人の警察官は俺達に向かつて事故を目撃したのか聞いてきた。俺はぶつかる瞬間を目撃したということとその軽自動車に乗っている二人が知人である事を告げた。

「そうですか、お知り合いですか。あなたのお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

「私ですか、私は葵彰弘です。その二人とは高校時代の同級生です」

第2話 高校時代の思い出

今日は主人が朝早くから接待ゴルフに出かけている。

ゴルフの予定は数日前から決まっていたので私も友達とランチの約束をしていたのだった。

だけど今朝になってその友達が急用が出来たと言ってキャンセルしてきたのだ。

その友達とは高校時代からの同級生で18年の付き合いになる私の一番の親友だ。

仕方が無いので以前からしたいと思いながらずっと放置していた洋服タンスの移動を試みる。

9月になったとはいえまだまだ暑い日が続くなか一人でタンスの移動はかなり大変である。

汗だくになりながらなんとか動かすが中に物が入ったままではあまり動かない。

面倒だけどやはり横着せず中の物を一旦出すしかないようだ。

タンスの一番下の引き出しを開けるとそこには高校時代のアルバムがあった。

結婚した当初はよく二人で見返したものだがここ数年は全く見る事がなくなっていた。

時計を見るとまだ午前11時、主人は夕食も済ませてくると言っていたので時間は十分ある。

慌てる必要も無いと思いタンスの移動中だがアルバムを開く。

アルバムを見て昔を思い出す……

高校3年の夏……

放課後の校門横の駐輪場での出来事。

「桜花ちゃん、俺と付き合ってください」

「葵くん？突然どうしたの？」

「俺、桜花ちゃんの事が好きなんだ」

「あ、ありがとう・・・でも」

その後の言葉が続かない

「桜花ちゃん、俺のことどう思う？好き？」

「私は・・・」

「俺のこと嫌い？」

「そんなわけないよ。嫌いだなんて、そんなこと・・・ない」
途切れ途切れにしか言葉が出ない。

「じゃあ好き？」

「私は・・・私は葵くんのことずっと大切な友達と思ってた、これ
からもそう・・・」

「そっか、やっぱり桜花ちゃんは大輔の事が好きなんだね」

「ええ？」

「いいよ、分かったたし。でも俺も桜花ちゃんの事好きだったから
この気持ちだけは伝えたくて」

「葵くん、ごめんね」

「謝らないで、惨めになるから」

「ごめん」

「また謝ってる」

「うん、ご・・・」

また謝りかけて止める。

でも申し訳なくて謝るしかできなかった。

「いいよ、俺ふられても桜花ちゃんの事好きだから、絶対に諦めな
い！」

一途な葵くんの想いが余計に辛い。

何を言えば良いのかわからない。葵くんも黙ったままだ。

葵くんとの間に重苦しい空気が漂う。

私はまるで時が止まってしまったように固まってしまったまま次ぎ

の言葉が出ない。

この重い空気に耐えられず息が詰まってしまいそうだ。

「おーい！桜」

背後からゆきちゃんの声が聞こえる。振り向くとそこに親友のゆきちゃんが駆け寄ってくる。

「あっ！ゆきちゃん」

ゆきちゃんが来てくれたお陰で一気に時間が流れ出し内心ホッとす
る。

「なんだ、優希か！邪魔すんなよ！」

「なんだとは何だよ！」

「それで何が邪魔だって？」

「なんでもない！じゃあ俺は行くから、桜花ちゃんまたね」

「うん」

「早くあっち行け！」

「うるせー！」

「ふん！」

ゆきちゃんと葵くんはいつも口喧嘩をしている。

だけど本気で怒ってるわけじゃなくこんなやり取りは2人にとって
みれば挨拶みたいなものだと思う。

今は葵くんが気まずくて退散した感じだけど。

などと考えているとゆきちゃんが突然とんでもない事を言って来た。

「桜どうしたの？あいつに告白でもされた？」

「ええ？どうしてそれを？」

いきなりやってきてどうしてそんな事が分かったんだろう？

「やっぱり。あいつが桜の事が好きなのはずっと前から分かってた
からね」

「そうなんだ、私全然知らなかった」

「桜は鈍感だからな」

私はゆきちゃんによく鈍感だと言われる。

「ええ？そんなこと無いよ」

「いいや桜は鈍感だ」

「そんなことないと思う」

「じゃあもう1つ良い事おしえてあげようか？」

何を教えてくれるんだろう。内心ドキドキしながら聞き返す

「何を教えてくれるの？」

「桜が好きな人をあててあげよう」

「ええ？」

私の好きな人ってまさか・・・

「鮎川大輔の事が好きでしょ？」

「どうしてそれを？さつき葵くんにも言われた」

鮎川くんの事を好きなのは当たってはいるけど誰にも話した事は無い。

1番の親友のゆきちゃんにだって恥ずかしくて言い出せなかったのにどうして2人とも知っているんだろう？

「鈍感な桜は自分がどれほど大輔のこと気にして見てるか気づいてないんだよね？」

ついさつき葵くんに言われ今またゆきちゃんにも言い当てられさすがに言い返す言葉が無い。

やっぱり鈍感なんだろうか。そんなことを考えているとなぜか泣きそうになってきた。

悲しいわけでもないし言い当てられて怒ってるわけでもない。でも何故か泣きそうになる。

そんな私の反応に驚いたのだろう、ゆきちゃんが慌てて謝ってきた。

「あはは、そんな顔しないで、ごめん、ごめん。もう言わないから」

「もうゆきちゃんなんて知らない」

怒ってるわけじゃないけどなんとそんな言葉がでてきた。

「ごめん。桜、怒らないで」

ゆきちゃんが焦っているのが分かってなんだか可笑しくなってくる。

「ふふ、怒ってないよ」

「でも私ってやっぱり鈍感なんだね」

「まあその話しはもういいじゃない」

そう言っただけで、まだ何か言いたそうにも見えた。

「うん。そうね。その話はもうおしまい」

何か言いたそうなのが少し気になるけど今日は疲れたのでこのままこの話を終わらせる事にした。

「じゃ、ゆきちゃん帰りましょうか」

そう言って私とゆきちゃんは互い自転車に乗り校門を出て家路についた。

第3話 【文化祭】準備1

葵くんに告白されてから約一ヶ月が過ぎたころ。

その後葵くんとの関係が気まづくなるかと思っていたけど葵くんがものすごく普通に接してきてくれたので私もあの日のことは何もなかったかのような感じで接することができていた。

10月に入り各クラスともに文化祭の準備にとりかかっていた。

「えーとそれでは10月20・21日の文化祭の催し物を喫茶店に決定します」

学級委員長の広瀬^{ひろせ}瑠子ちゃんが教壇に立ち、放課後のホームルームでみんな話合っ^はって決めた事項を伝えている。

「それでは続いて役割分担を決めたいと思います」

「どんな役割が必要か皆さんの意見を聞きたいと思います」

それぞれ思い思いに意見が出る。

そして皆の意見でいくつかの仕事に分担された。

「時間も遅くなりましたので、どの仕事がいいか皆さん明日までに友達などと相談してある程度希望を決めておいてください」

「それでは今日はこれまでにします。また明日の放課後に続きをします」

委員長がそう言うと一緒に教室内がざわざわしだし早速友達同士で相談する人達がいたて私もゆきちゃんと相談する。

「桜どうする？」

「うーん、何がいいかな？ゆきちゃんは何かしたいのある？」

「そうだな、買い物係なんてどう？学校も抜け出してサボれるしいいんじゃない？」

「サボるの？それはダメよ」

「分かってるよ、サボるのは冗談だよ、桜は真面目だからね」

「ゆきちゃんが不真面目なんじゃないの？」

「うつ・・・ちゃんと買い物に行くよ」

「うん。当たり前だけどね」

ちよつと男勝りで勝気なゆきちゃんだけど私が言えばちゃんと聞いてくれるから好きだ。

「じゃあ桜は買い物係でもいい？」

「うん。でも買い物係は文化祭初日の午前中喫茶店に出ないとダメだよ？」

「まゝ仕方ない、買い物は楽だからね、それにどうせ初日の午前中だけでしょ？あとは自由だしいいじゃない」

「そうだね、その後ゆっくり見てまわれるから途中で何かするより逆にいいかもね」

「うん」

少し離れたところで葵くんと鮎川くんが話しをしている。鮎川くん達は何をするのか少し気になる。

と思っているとゆきちゃんがいきなり葵くんに声をかける。

「なんだよ彰弘あきひろ！こつちをチラチラ見て。桜のことがそんなに気になるのか？」

ゆきちゃんが葵くんとんでもない事をいいだした。

「はあ？いきなりなに訳の分からないこと言ってるんだよ」

「あはは、焦ってる焦ってる」

「うるせえ」

葵くんより私が焦る。とにかくゆきちゃんを止めなければ。

「ゆきちゃん！そんなこと言っちゃあダメだよ」

「あはは。ごめん、ごめん」

私は鮎川くんが気になつてそつちの方を見る。すると鮎川くんもこつちを見ていて思わず目が合ってしまう。私は照れくさくなつて慌てて目をそらし葵くんの方を見て話しかける。

「葵くんは何をするの？」

「今、大輔と相談してただけで買い物係にしようって話がまとまったところなんだよ」

びっくりしたように鮎川くんが小声で葵くんになにかを話してる。慌てたような鮎川くんの態度が気になるけどこの距離では何を言ってるのか分からない。

でも鮎川くん達と一緒にというのは嬉しい。

「そうなんだ、じゃあ私達と一緒にね。私達も今、買い物係にしようって話してたの」

「そうなんだよ、偶然だけど一緒だね、一緒に買い物係しようよ」
「何が偶然だよ。私達の話に聞き耳を立ててたくせに」

またゆきちゃんが葵くんをからかう。でもここはゆきちゃんの発言は無視して話をすすめよう。

「うん、そうだね。一緒にしましょ」

「ゆきちゃんもいいよね？」

「桜がそれでいいならいいよ」

私が無視したからかな？なんだか少し不機嫌そうに見えるけど・

でもとりあえずみんなと一緒にできるのは嬉しい。

「じゃあ皆で一緒に買い物係りしましょう」

私がそう言うのと葵くんは笑顔で応えてくれた。

「うん、そうしよう。決定だね。大輔もそれでいいだろ？」

「ああ、いいよ」

「桜、そろそろ帰ろうか」

「う、うん」

まだ話の途中なのにいきなりどうしたんだろう？

ゆきちゃんが立ち上がって歩きだしたので私も慌ててついていく。

「じゃあ葵くん、鮎川くん、また明日ね」

それだけ言って教室を出た。

ゆきちゃんの話し方、やっぱり少し怒っているような感じがする。私何か気に障ることを言ったのかしら？少し気になったけどなん

となく聞きにくくて結局何も聞けずにそのまま一緒に帰った。

第3話 【文化祭】準備1（後書き）

登場人物が増えてきて、同じ人物でも人によって名前の呼び方が違うので

少し混乱してしまいそうですよね。

なので次回は簡単な人物紹介をしたいと思います。

第4話 【文化祭】準備2 / 人物紹介（前書き）

まだ登場していない人もいますがとりあえず簡単な人物紹介をいれておきます。

第4話 【文化祭】準備2 / 人物紹介

登場人物

咲原桜花 （さきはら・おうか）

・この物語のヒロイン、この桜花を中心に物語りは進んでいく。
ましたゆうき
・真下優希とは親友で優希のことをゆうきではなく【ゆきちゃん】と呼ぶ

・葵章弘に告白されるもその想いには応えられない

・鮎川大輔に片思い中

真下優希 （ました・ゆうき）

・もう一人のヒロイン

・咲原桜花とは高校1年の時に出会ってからずっと親友

・主人公のことは桜花の桜だけをとって【桜】と呼んでいる

・葵章弘とは口喧嘩が絶えない

咲原愛花 （さきはら・あいか）

・咲原桜花の妹

・まだ物語の中にはでてきていない

・真下優希のことは【優希先輩】と言って慕っている

葵彰弘 （あおい・あきひろ）

・咲原桜花に告白するも断られるが諦めきれない

・鮎川大輔とは親友

・真下優希とは口喧嘩が絶えない

鮎川大輔 （あゆかわ・だいすけ）

・桜花が想いを寄せる人物

- ・ 鮎川自身の想いは今の所不明
- ・ 桜花のことは「咲原」、優希のことは「真下」と呼ぶ

咲原花奈美 （さきはら・かなみ）

- ・ 桜花の母

咲原耕太 （さきはら・こうた）

- ・ 桜花の父

真下美代子 （ました・みよこ）

- ・ 優希の母

真下義明 （ました・よしあき）

- ・ 優希の父

広瀬蛍子 （ひろせ・けいこ）

- ・ 学級委員長

岡田輝夫 （おかだ・てるお）

- ・ 桜花達の担任教師

相星学園高等学校 （そうせいがかくえん）

- ・ 桜花達に通う学校名

- - - - -
- - - - -
- - - - -

【視点／真下優希】

文化祭まであと一週間・・・

放課後、どのクラスの人も皆居残って文化祭の用意をしている

買い物係は結局私達4人に決まり、予想通り楽な仕事だった。

休憩をかねて自分で買いに行きたがるものが多く仕事が多量になかったのだ。

そういう意味では予想以上に楽だと言っているかもしれない。

そんななか手の空いた桜は積極的に他の班の仕事を手伝っていた。

今日は看板作りを一生懸命手伝っている、彰弘もここぞとばかりに桜花と一緒に看板作りを手伝っている。

大輔も時折手伝っているが、彰弘に邪魔者扱いされて手持ち無沙汰な状態だ。

彰弘自身が桜花と一緒に居たいのはもちろんのこと桜が好きな大輔をあまり近づけたくないからだろう。

桜は自分から積極的に仕事を手伝っていて偉いけど彰弘はただ桜の傍にいたいだけだしさらに大輔をあからさまに遠ざけたりして桜の気持ちを考えたらあの行動はただのバカだな。

そんなことを考えながら私も暇を持て余していた。

何もすることがなくなるとなく窓の外を眺めていた。

そんな時、学級委員長の広瀬瑠子が声をかけてくる。

「真下さん、鮎川君、買い物をお願いします」

久しぶりの仕事だ、けどどうして私と大輔なんだ？

「委員長、買い物はいいいけどどうして大輔となんだ？桜と行ってくるよ」

「だめよ、咲原さんと葵くんは今一生懸命看板を作るのを手伝ってくれているのだから」

それを聞いた彰弘が横からちゃちゃを入れる

「そつだ！委員長の言うとおりだ。俺たちは一生懸命やってるんだ

からお前ら二人で行ってこいよ」

「うるさい！」

桜と一緒に居たいから邪魔者の二人は買い出しに行つてこい！
という態度があからさまにでている。なんだか腹が立つ。

そこで委員長が追い討ちをかける

「買い物係は4人だけど真下さんと鮎川君だけが暇そうにしている
じゃない」

確かに仕事がなくばーっとしていたので言い返す言葉がない。
「ゆきちゃん、この看板に塗る絵の具がもう殆どないの、申し訳ないけど鮎川くんと一緒に行つて買つてきてもらつていい？」

桜もどうせなら彰弘と二人で行つて来てとお願いすれば大輔と二人になれるのに。

あつ、そうかさすがに大輔と二人きりだと緊張しすぎて無理か。

考えてみれば大輔に聞きたいこともあるし丁度いいかもな、ちょっと出かけよう。

「桜に頼まれたら断れないな。じゃあちよつと言つてくるよ」

「うん。お願い。ゆきちゃんありがとう」

「別に礼を言われることじゃないけどな」

して当たり前の仕事をしたただけで面と向かつてお礼を言われると照れるじゃないか。

「じゃ大輔、行こうか」

そう言つて、大輔の返事も待たずに教室を出る。

第5話 【文化祭】買い物にて1

大輔と自転車で学校近くの商店街にある文房具屋まで来ていた。

私は大輔に聞いておきたいというか、確認したい事があった。

絵の具を物色しながらさりげなく言う

「大輔、ちょっと質問なんだけどいいかな？」

「うん？なに？いいよ」

「桜のことと思う？」

大輔が驚いたような顔をしている。当然だろう・・・

「な、なんだよ急に。どうして突然咲原の話しがでてるんだよ」

「彰弘が桜のこと好きで告白したの知ってるだろ？」

私はかまわず話を続けた。

「ああ、それは知ってる。彰弘から聞いたよ」

「ふーん、彰弘から聞いたんだ」

「うん、告白して断られたけど全然諦めてないから応援して欲しい
って」

彰弘のやつ桜が大輔のこと好きなのを知っていて大輔に応援しろと
は・・・

「で？大輔は彰弘のこと応援するの？」

「う、うん・・・分からないけど、頼まれたから・・・」

桜が彰弘に告白された後、桜が好きなのは大輔だろ？と桜に言った。
・・・

あの時もう1つ気付いていたことがあってそれは桜には言いたくな
かった事・・・

それはきつと大輔も桜の事が好きだってことだ。

でもそれは私の思い過ごしかもしれない、そう願いたい。だからそ
の確認をどうしてもしておきたい。

「友達に頼まれたら自分が好きな人の恋愛を応援するの？」

少しキツイ聞き方をしてみた。

大輔が、今度は先ほどよりも数段ビクリしたような顔をする。

「え？な、何を言ってるんだよ、真下おかしいぞ？」

その態度を見てやっぱり大輔は桜のことが好きなんだな、と思ってしまう。

「だから大輔自身が桜のことを好きなのにどうして彰弘の応援をしたり、遠慮したりするの？友達だから？」

「ち、違うよ」

「何が違うの？桜のこと好きじゃないの？」

「どっちでもいいだろ。どうして真下にそんなこと言わないといけないんだよ、関係ないだろ」

やっぱり恥ずかしいのか本当の事を言いたがらない。

しかしその慌てぶり、好きだと言っているようなものだ。

けどとはつきりと大輔の口から聞きたかった。本当は聞きたくないけど・・・

このままだとラチがあかないだろうと思い、ちよつと誘導しようと考えてる。

「ふ〜ん、別にいいけど。じゃあ桜のこと好きじゃないんだね？桜にそう言っておいてあげるよ」

「ちよつと待つて、なんでそうなるんだよ。そうは言ってないだろ」

「じゃあやっぱり好きなんでしょ？」

「うっ・・・」

「別に隠さなくてもいいじゃない、大輔の態度を見れば分かることだし」

「ええ？そうなのか？俺ってそんな態度とってる？」

「思いつきり・・・」

「そうかな？そんなはずないと思うけど」

「気を付けてるつもりでもなかなか自分では気づかないもんだよ」

「そうか・・・態度に出てたのか」

大輔の答えにしてやったりと思わずにやっとしてしまう。

「ふふ、やっぱり桜のこと好きなんじゃない」

大輔がしまった！というような顔をする。

「騙したな」

「何も騙してないよ。ちょっと確認したかったただだよ、大輔が桜のことが好きだってことをね」

観念したように大輔が話す。

「もう隠しても仕方ないな、そうだよ俺は咲原のことが好きだよ」
自分から聞き始めたことだけど、大輔にはつきりと桜が好きだと言われると気持ちが沈む。

「じゃ彰弘に遠慮する事ないのに」

私は心にもない事を言ってしまう。

「でも彰弘も咲原のことがすごく好きみたいだから、俺もどうしたらいいか分かんないんだよ」

「そうか・・・そうだよね」

その後私も大輔も言葉が続かない。

なんとなく気まずい雰囲気のまま買い物を始める。

第6話 【文化祭】買い物にて2

買い物をしてながら色々と考えてしまう。

きつと彰弘も大輔が桜の事を好きなのはうすうす気づいてるはずだ。

気づいていてわざと応援を頼んだり大輔の前であからさまに桜にアタックしているのだろう。

そうする事によって大輔が遠慮する性格だと分かっているからだ。ずるいと言えはづるいが彰弘も桜に対して必死なんだろうな。

今ここで私が桜も大輔のことが好きだと教えてやって、二人を応援してやれば間違いなく桜と大輔はくつつくだろう。

桜は私の一番の親友だけど・・・

だけど二人仲を取り持つような事だけはできない。したくない。

だからこそあの日、桜が大輔を好きだと言い当てた日。知ってはいたけど桜にあえて大輔の気持ちを教えてあげなかった。

鈍感な桜は誰かが言わないと大輔の気持ちに気づくことはないだろう。

大輔も鈍感だから桜が好きだったことに気がつかないだろうし。

誰も何も言わなければ鈍感で臆病な桜と彰弘に遠慮して自分の想いを押し殺してる大輔の間はいつまでも縮まらないだろう。

そして私はそれを望んでいる。だから今まで全てを黙ったままで桜と接している。

私も彰弘と一緒に、あいつのことをずるいとは言えないな。そう思うと自嘲気味に笑ってしまう。

「何笑ってるんだ？」

不意に大輔に話しかけられて飛び上がってしまいそうに驚いてしまいい変な声がでてしまう。

「ふへっ！」

「なんだ？その「ふへっ」って」

大輔に変な声の真似をされて恥ずかしくなる。

「そんな変な声だしてない」

照れ隠しに語気を強めて言う。

「悪い、別にからかつてるわけじゃないぞ」

「うん」

「それはそうと・・・」

そう言って大輔が言葉を切る。何か言おうとしてる。なんだろう？

「さつきは俺が好きな子を教えたんだから今度は真下が教えるよ」

予想外の質問に動揺してしまう。

「な、なんで私がそんなこと教えないといけないんだよ」

「だから、さつき俺が教えたんだから今度は真下の番だろ？」

「そんな順番なんて無いし、だいたい私は好きな人なんていないよ」

「嘘つけ、好きな人がいないなんて回答するいぞ」

「ずるいつて言われてもいないものはいないんだから仕方ないだろ」

大輔が私の目を覗きこむようにじっと見つめる。

私はその視線に耐え切れず目を伏せる。

「あつ、目をそらした。やっぱり嘘ついてる」

「ち、違う。嘘だから目を逸らしたわけじゃない。何小学生みたいなこと言ってるんだよ」

あんなに見つめられたら恥ずかしいだろう。と言いたかったけどそれを言うのも恥ずかしい。

「だいたいさつきは大輔が好きな子を教えてくれたんじゃないかって私が言い当てたんだろう」

「そういえばそうだったな。じゃ俺が言い当てればいいのか」

「無理無理。大輔に言い当てられる訳無い」

「俺には無理か？」

「絶対無理。だって大輔は鈍感だもん」

「鈍感だから無理って、その言い方はやっぱり好きなやつがいるんじゃないか」

私は心の中で（しまった）と舌打ちする。

「よし、じゃ当ててやろう」

内心ドキドキしながら大輔の言葉を待つ。

「真下の好きなやつって大野か？」

「へ？」

また変な声が出てしまった。

「おっ！その反応・・・当たったか？」

あまりにも脈絡の無い名前が出てきてびっくりした。

「全然違う。だいたい大野って誰よ？」

「誰って・・・同じクラスの男子だけど・・・」

「そんな人いたっけ？全然記憶に無いけど？」

「分かった！吉村か？」

「だから誰よ、その吉村って」

「吉村も同じクラスの男子だけど？」

「そうなの？でもそんな影の薄い人なんて記憶に無いんですけど？」

やっぱりダメだ大輔じゃ私の好きな人は言い当てられないしこんなところで私が好きな人を告白したら大変な事になるぞ。

「分かった。他のクラスのやつか？」

全然分かって無いし・・・

「もういいよ。大輔には永遠に分からないし分かってもらおうとも思っていない」

「そもそも私は好きな人がいないって言ってるんだからもうそれでいいじゃない」

「うーん。何か引つかかる言い方だな」

大輔はそう言っただけでしばらく考えるような素振りをして「分かった」

だ・か・ら・大輔の分かったは全然分かってませんから。と心の中

で突っ込みながら聞き返す。

「何が分かったの？」

「もう諦める。真下は好きなやつがいない。それで納得しておくよ」
「そうだね。それで納得しておいて」

「でも俺が咲原のこと好きだってことは誰にも言っちなよ！咲原にもだぞ、絶対に言っちなよ」

さっきのやり取りで楽しい雰囲気になっていたのに大輔の言葉で一気に気分が沈む。

私だってこんな事実誰にも言いたくない。ましてや桜になんて・・・

「分かってるよ、誰にも言わないよ、もちろん桜にもな」

きつと彰弘も大輔の気持ちを知ってるよ。と言おうかと迷ったけどそれを言ってしまうと大輔がかわいそうかと思って止めた。

それからはお互い無言のまま買い物を済ませて学校に帰った。

第7話 【文化祭】衝撃の告白

【視点／咲原桜花】

ゆきちゃんと鮎川くんが買い物に行つてしばらく経つた。

葵くんがなんだかそわそわしている・・・

「桜花ちゃんちよつと話があるんだけどいいかな？」

「なんだろう？なんだか思いつめたような表情だけど。」

「うん、いいよ」

「じゃあちよつと来て」

屋上へと続く階段の踊り場。ここなら滅多に人は来ない、こんなところに連れ出していったいなんの話だろう？

「葵くんどうしたの？なんだか思いつめた表情だね」

「うん、とっても言いにくいんだけど・・・」

「なに？」

「凄く気になるいい方だ。」

「実は、優希のことなんだけど」

「ゆきちゃんがどうかしたの？」

「うん、実は、優希も桜花ちゃんと同じように大輔が好きみたいなんだ」

「・・・」

声が出なかった。

私は何を言われるのかと身構えていたがまさかゆきちゃんの話が出ると思つていなかった。

ましてやゆきちゃんが鮎川くんを好きだなんて・・・

「それと、これは俺の勘なんだけど大輔も優希のことが好きだと思
う」

「・・・」

また言葉が出ない。

少し間をおいてやつと話し出す。

「葵くんはどうしてそれを？」

「大輔がなんとなくそんな風な事を言ってたことがあったから」

「鮎川くんが？」

「うん、優希の事を気に入ってるみたいなのを言って、優希も俺に気があるみたいだ。って言ってた」

不意に目の前が霞む。気が付くと自然と涙が出ていた。

鮎川くん、ゆきちゃんのことを好きだったんだ。

それよりも衝撃的なのはゆきちゃんの想いだ。まさかゆきちゃんが鮎川くんの事を好きだなんて・・・

「そうなんだ・・・鮎川くんが言ってたんだ、じゃあ間違いないね、すごい涙声になってる・・・」

「うん、桜花ちゃんに言うのは酷だとは思ってたけど、でも桜花ちゃんが大輔を好きなの知ってるから・・・だから辛いだろうけど言っておけた方がいいと思って」

「言ってくれてありがとう。ゆきちゃんと鮎川くんがお互いに好き同士ならよかった、知らないままだとゆきちゃんに迷惑かけるところだった」

「と言うことは桜花ちゃん大輔のこと諦めるの？」

私は息を整え涙をこらえて話そうとする

「諦めるもなにも二人がお互いを想ってるのなら私の入る余地なんてないよ、それにゆきちゃんは凄くいい子だから・・・鮎川くんが好きになるのも当然だよ」

なんとか泣かずに話せた。

「そんなことないよ、桜花ちゃんの方が優希なんかよりずっとステキだよ」

その優しい言葉にまた涙が溢れる。

「ありがとう・・・」

「大輔はどうして優希なんかがいいんだろう？桜花ちゃんの方が絶対によいの」

「そんなことないよ、ゆきちゃんの方がいいに決まってるよ。私なんて・・・」

涙が止まらなくなってきた。

奇麗事を言っではみたものの鮎川くんを好きな気持ちは変わらない。だから涙が止まらないんだ。

「桜花ちゃん、俺、桜花ちゃんのこと今でも大好きだ。大輔は優希のことが好きなんだし、俺と付き合ってよ。俺じゃあダメかな？桜花ちゃんのさっきの言い方だと二人の邪魔をするのは嫌なんでしょ？」

確かに二人の邪魔はしなくなかった。

ゆきちゃんは私の大切な友達だし鮎川くんがゆきちゃんを好きないじょうその大切な友達の恋の邪魔をしたくはない。

「うん。邪魔はしたくない」

「じゃあ俺と付き合ってよ。俺、桜花ちゃんのこと大切にするよ」

「ごめん。今は何も考えられない、少し一人になりたいの。せつかく大事なことを話してくれたのにごめんね。私先に帰るね」

私は大急ぎで教室に戻る。早くしないと二人が買物から帰ってくるからだ。

こんな状態でゆきちゃんに会うなんて出来ない。

皆に泣いているのを気づかれないように教室の後ろのドアからそっと入り、髪で顔を隠し鞆を取る。

そして急いで教室を出ようと飛び出した。

「きやつ」

「あつ」

慌てて飛び出したところで誰かとぶつかった・・・
見るとゆきちゃんだ。

私は大慌てで

「ごめん、先に帰るね」

と一言残し走って階段を駆け下りた。

今は二人の顔を見る事なんてできない。

後ろでゆきちゃんが私を呼びとめる声がするけど私はそのまま聞こえないふりをして走って学校を出た。

第8話 【文化祭】桜の妹、愛花

私にぶつかっていった桜が制止も聞かずに学校を飛び出して行った。

どうしたんだろう？桜の様子がおかしかった。なんだか泣いていたようにも見えたし…

彰弘に聞こうと思うって捜すが見当たらない。委員長やクラスの皆に聞いてみたけど誰も知らないみたいだ。しばらく大輔と捜してみたらやっぱり見当たらない。

とりあえず桜が心配なので私は桜の家に様子を見に行くことにした

「大輔、私は桜が心配だから今から桜の家に寄って行くよ」

「俺はもう少し彰弘を探してみる」

「うん、そうして。彰弘がいないからもしかしたら二人の間に何かあったのかもしれないしね」

「わかった」

「じゃあ私は帰るね」

大急ぎで桜の家に行く。

「ピンポン、ピンポン」

桜はちゃんと帰ってきてるんだろうか？少し不安だ。

と、その時誰かが玄関口に出てきた気配がする。桜かな？

「はい、どちら様ですか？」

違った。これは妹の愛花ちゃんの声だ。

「愛花ちゃん？私、優希です」

「あつ！優希先輩、こんにちは」

私だと分かって満面の笑みで出迎えてくれる。

「こんにちは」

しかし私は桜が心配で挨拶もそこそこ桜の事を聞く

「桜帰ってる？」

「うん」

なんだろ？愛ちゃんがうつむきかげんに目を伏せる

「どうしたの？桜が帰ってるならちよつと呼んできてほしいんだけど。いいかな？」

「それがお姉ちゃん、なんだか凄いいつめた顔で帰ってきて、今日は誰にも会いたくないって言って部屋にこもっているんです」

「ごめん、一応ちよつと声かけてみてくれる？」

「はい、ちよつと待っててくださいね」

そう言っただけ階段を駆け上がって行った

しばらくして愛花ちゃんが戻ってきた。

「やっぱりお姉ちゃん、今は誰にも会いたくないって言ってます」

「そうなんだ、どうしてなんだろ？愛花ちゃん何か知ってる？」

「ううん、何も…私もお姉ちゃんの様子がおかしいからちよつと心配で、何度か部屋のドア越しに話しかけてるんだけど何も言ってくれないんです」

「そうなんだ…」

「優希先輩も何も知らないんですか？」

「うん、3〜40分程別行動をしてたんだけどその間に何かあったみたいで…私も全くわかんないんだ」

「でもあんまり心配ないと思います。お姉ちゃんて些細な事でも直ぐに落ち込むタイプですから」

愛ちゃんは心配していると言う割には満面の笑みだ。

「そんなことより、優希先輩文化祭の日喫茶店でウエイトレスするんですよね？お姉ちゃんに聞きました」

「うん」

話しを変えられてしまう。

私は桜の様子をもうちよつと聞きたいのだけど…

「初日の午前中ですよ？行ってもいいですか？」

「もちろん。愛花ちゃんなら大歓迎だよ、友達と一緒にきてね」

愛花ちゃんは今更にすっかり桜のことなど忘れたように楽しそうに

文化祭の話をする。

私は桜が心配でそれどころじゃないんだけど、満面の笑みで話す愛花ちゃんの話しを途中でできないので話しに付き合う。

その後愛花ちゃんの話しが小一時間続きやっと開放される。

「あつ、優希先輩ごめんなさい。私ったらずっと引き止めてしまつて」

「いいよ」

心の中で苦笑いをする。

「じゃあ私はそろそろ帰るね。桜の事何か分かったら教えてね」

「はい。ちゃんと伝えます」

「うん、ありがとう。じゃあね」

そう言って結局何も分からないまま桜の家を後にする。

第9話 【文化祭】こめんねゆきちゃん

夕食の時間・・・

私は食べたくなかったのだけど、お母さんに食事をするように強く言われてしぶしぶ部屋から出て食卓についた。

部屋を出る前に鏡を見たが、ずいぶん泣いたために鼻は赤く、目も腫れぼったくていかにも泣いてましたというような顔だった。一言もしゃべらず黙ってうつむき加減で食事を始めたが、どうしてもゆきちゃんの事が気になったので愛花に先ほどの様子を聞く。

「さつき、ゆきちゃんきたでしょ？」

「うん、お姉ちゃんの様子がおかしいから心配だって言ってた」

「それで愛花はなんて答えたの？」

「んー、何にも」

「何にもってなによ」

「何って言われても…お姉ちゃん何も言ってくれないから何もわからないんだもん。答えようがないよ」

たしかに愛花の言う通りだ。黙って部屋にこもってたのだから…でも今はゆきちゃんにどんな顔をして会えばいいか分からないから玄関まで行けなかった。

「でも一時間くらい話してなかった？」

「話してたよ。文化祭の日優希先輩に会いに行くの」

「そんなの迷惑でしょ！やめなさい」

「どうして？優希先輩来てねって言ってたもん」

「それは社交辞令でしょ！ゆきちゃんは優しいから気を使ってくれているのよ」

「そんなことないよ。優希先輩は本当にきてねって言ってたもん」
言うことを聞かない妹にだんだんとイライラしてくる。

「それよりお姉ちゃんこそ、そんな優しい人が心配して家まで来て

くれてるのに追いつくなんて、酷いんじゃないの？」

「うるさいわね！」

追いついたわけじゃない、会えなかったただけなのに妹の愛花には分かってもらえない。さらにイライラが募る。

私達二人の様子を見かねたのかお母さんが少し怒り気に…

「二人とも止めなさい！桜花も何があつたか知らないけど優希ちゃんはいいい子なんだから、心配かけちゃあダメよ！愛花もお姉ちゃんに口答えばかりしないの！」

私はまた涙がでそうになる。持っていた箸を叩き付けるように置き、ガタツつと大きな音を立てながら椅子から立ち上がり、涙がこぼれてしまう前に大急ぎで自分の部屋に駆け上がる。まだ殆ど手をつけてない食事をそのままにして。

部屋に入って鍵を閉める。

そして枕で顔を覆い声もれない様にして思いつき泣く。

みんな何も分かってない！愛花もお母さんも…

ゆきちゃんがいい人なのは私が一番よく知ってる。みんなに言われなくてもそんなこと分かってる。

分かってる…分かってるからこそ余計に悲しいんだよ。ゆきちゃんがいい人だから余計に辛いんだよ。ゆきちゃんを押しつけて鮎川くんを想い続けるなんて…

でも、好きな。鮎川くんのことを大好きなこの気持ちも抑えきれない。この想いをどうしたらいいのかわからない。

いつそゆきちゃんが嫌な人なら気も楽だけど、ゆきちゃんはいつも私のことを一番気にかけてくれて、とっても優しく、とってもいい人なんだもん。

私の一番の親友で自慢の友達。なんでも相談にのってくれていつでも私を助けてくれた。そんなゆきちゃんのこと大好きなんだもん。

ゆきちゃんとはこれから先もずっと親友でいたい、でもどうすれ

ばいのか分からない。今はただ泣くだけで答えが見つからない…

どうして鮎川くんを好きになっちゃったんだろう。

鮎川くんじゃなければこんな辛い思いをしなくてすんだのに。

ゆきちゃん、鮎川くん、ごめんね。

ごめんね。

第10話 【文化祭】彰弘の嘘

始業のHRが始まる前に大輔に話しかける。

「大輔、昨日彰弘つかまつた？」

「いや、探したけど見つからなかった。咲原はどうだった？」

「昨日桜の家に行ったけど会えなかった。妹の話ではなんだか凄く落ち込んでるみたい」

「そうか。そういえば今日は咲原と一緒に来なかったのか？」

「今朝もいつもどおり桜の家によったんだけど、妹が出てきて今日は体調が悪いから学校を休むって言ってた」

「なるほど、学校を休むくらいだから何かあったに違いないな」

「私もすごく心配。桜は家にいるみたいだけど会ってくれないから事情が聞けないの、あとは彰弘に聞くしかないね」

そう言って私は教室内を見回し章弘を捜す。

「彰弘もまだ来てないみたいだね、もしかして休みかな？」

「彰弘まで休んだら咲原の事が全くわからないな」

そうこうしているうちに先生がやってきた。

HRが始まる。私達は話を打ち切って席に着く。

放課後・・・

結局彰弘も来なかったので委員長に許しをもらい、買い物係を除してもらい大輔と一緒に彰弘の家に行くことにした。

委員長もただならぬ雰囲気を感じたのかあっさりと許してくれた。代わりは委員長自らがしてくれるそうだ。

早速自転車で彰弘の家まで行く。

大輔がチャイムを鳴らす。しばらくして彰弘が出てきた。

彰弘は大輔だけが来たのだと思っていたらしく私の顔を見てビツクリしていた。

私は大輔を押しつけて桜のことを聞く。

「彰弘、昨日桜と何があったの？」

彰弘が険しい顔をしながら何か言おうとするが言い切れないように口をつぐむ、すると大輔が、

「どうしたんだ？ 咲原と何かあったんだろ？ はっきり言えよ」

いつもは人に物を言うときは気を使うタイプの大輔がキツイ言い方をしたので少しびっくりした。そして続いて私も口をはさむ。

「桜が今日学校を休んだんだよ。桜が学校を休むなんてよほどのことがあったに違いない。彰弘なら何があったか知ってるでしょ？」

彰弘はうつむいたまま今にも泣きだしそうな顔をしている

「どうしたんだよ、黙ってたら分からないだろう」

また大輔が彰弘を問い詰める。やっぱり桜の事が心配なんだろうな……やや感傷的になってしまいが今はそんなことより彰弘から事情を聞くのが先決だ。

「彰弘、何とか言えよ」

彰弘が意を決したように何か言おうとしてる

「二人とも、ごめん」

「何がごめんだ？」

ほぼ同時に私と大輔が問う。しかしそれだけ言々とまた口をつぐんだ。

「桜に何かしたの？ 桜が私に何も相談してくれないなんて今までになかったことよ。何があったの？ もしかして何か酷いことをしたの？」

彰弘が慌てたように

「何もしてない、何かをしたんじゃない、少し話をしただけ……」
語尾が消え入りそうで最後は何を言っているのか聞き取れないほどだ。

「咲原と何を話したんだ？」

「ごめん、俺、嘘を言ってしまったて……」

「何を言ったんだ？ はっきり言えよ」

珍しく大輔が感情をあらわに彰弘に詰め寄る。それに圧倒され、

萎縮してしまつて余計に話せないようだ。私は少し大輔を落ち着かせて改めて彰弘に聞きなおす

「要するに昨日私達が居ない間に桜と何か話したんだね？そしてその時桜が傷つくような嘘をついたってことだね？」

意識的に優しく、そしてゆっくり話しかけると彰弘は頷いた。

「何を話たの？どんな嘘を？怒らないから言ってみて、桜が心配だから」

あくまでも優しく問いかける、そうするとやっと重い口をひらきだした。

「昨日お前達が居なくなつたのを見計らつて桜花ちゃんを連れ出して二人で話をしたんだ」

「うん。それで何を話したの？」

「大輔と優希が好き同士だつて言つた。だから大輔は諦めて俺と付き合つて欲しいって言つた」

全身の血液が温度を増しながら一気に頭に向かって流れるのがはつきりと感じられる。

「バカー！！！」

私は思わず怒鳴つていた。怒らないと約束していたけど、そんなことは一瞬で頭から吹っ飛んでいた。

第11話 【文化祭】私の気持ち

「どうしてそんな嘘をつくのよ!」

私は大声で怒鳴る。

「桜花ちゃんが好きだから、どうしても付き合いたかったから」

彰弘は目を合わせないようにうつむいて答えるが私はわなわなと怒りが込み上げてくる。

ふと横を見ると大輔がキョトンとした顔をしている。何かを考えているようだが、私はかまわず彰弘に怒りをぶつける。

「好きだったら何を言ってもいいの?」

「だからゴメンって…」

怒っている私に大輔が待ったをかける。

「ちょっと待ってくれ、話が分からないんだ」

話の腰を折られて睨みつけるように大輔を見る。

「なんなのよ?何がわからないのよ」

「俺が優希を好きで、優希が俺を好きって嘘をついたんだろ?」

「ええ、そうよ。今の話を聞いてなかったの?」

今度は大輔にくっつかかる。

「ちょっと待て、俺に怒るなちゃんと聞いてたよ。だけど疑問なんだ」

「なによ、まどろっこしいわね」

私はまだまだ彰弘に文句を言いたいのにな大輔はのんびりしている、さつきまで桜を心配して怒っていたはずなのに。

「だから、どうして俺と優希が好き同士だって嘘をついたら咲原がそんなに悲しむんだ?それにどうして俺が優希を好きだと咲原と彰弘がつき合う話になるんだ?」

そこで私はハツとした。そうだった、大輔だけは桜が大輔を好きだって事を知らなかったんだ。急速に怒りが冷めていく。なんて答えようか思案するが突然のことに考えがまとまらない。

「ああ、それは…」

なんて言えはいいんだろう。私が答えられないとみて大輔はその疑問を彰弘に問う。

「彰弘、どうということなんだ？俺にはもうひとつ話が見えないんだけど」

「ああ…」

彰弘にしてみても桜が大輔を好きだと大輔自身に言うのは嫌だろう。彰弘の返事の後にはさつきまでの騒々しい雰囲気と打って変わり3人の間に静かな空気が流れる。

私は大輔にどう説明すれば良いか考える…

大輔は桜の事が好きだ。そして桜も大輔の事が好きだ。その事実を隠そうとこの場しのぎの嘘をついても何もならない。いや、ここで嘘をつくという事は桜を裏切る事になる、と思った私は全てを話す決心をする。

「大輔、よく聞いてほしい」

「なんだ？」

「実は、桜は大輔の事が好きなのよ」

「なんだって？咲原が俺のこと好きだって？」

大輔はかなり驚いたようだ。

彰弘の顔を見るとどうしてバラすんだ？というような顔をしている。しかし私はかまわず話を続ける。

「そうよ、桜は大輔のことが好きなのよ、さつき彰弘が「私と大輔は好き同士だから大輔の事は諦めて…」って言ったでしょ？その言葉からも分かるでしょ？」

「そうだったかな？俺の事は諦めるってところは聞き逃したかも…」
肝心な所を聞いていなかったのね…ばか。

でも、だからと言って嘘はつけない。

「大輔も桜の事が好きだよね？」

大輔が私の目をしっかり見ながら頷く。その力強い頷き方が私を切なくさせる。

「そうだよ。だから桜と大輔は互いに好き同士なのよ」

「みんな知ってたのか？」

「ええ、私も彰弘も知ってたよ」

「そうなのか、俺だけが知らなかったんだ」

大輔の問いに私が頷いたところで彰弘が話し始める。

「大輔すまない。俺、桜花ちゃんに酷い嘘をついてしまつて、でも俺どうしても桜花ちゃんのことを好きで、でもお前達は好き同士だったからか焦つてしまつて、桜花ちゃんには本当にひどい事をしてしまつたと反省してる」

相当うなだれて本当に自分の行動を反省しているようだ。

「桜花ちゃんだけじゃなくて大輔にも酷い事言つたな。大輔が桜花ちゃんを好きなのを知つていて応援してくれつて…」

彰弘は今にも泣きだしそうだ。

私も泣きたいよ。桜の気持ちを大輔に暴露してしまう羽目になるし、もうなんだか怒りもどこかへいつてしまった。

とりあえず彰弘に助け舟をだしてあげることにする。本来なら許されない嘘をついたんだけど、これで桜の事は完全に諦めないといけないし（もともと失恋してたけど）、逆に大輔は互いの気持ちが確認できて良い結果になったわけだし。彰弘の気持ちも理解できないでもない。私だつて……いや、今それは考えないでおこう。

「と、いうわけで彰弘も反省してるし、大輔も桜と好き同士だと分かつたし、もう彰弘のことはいいよね？」

大輔は答えない。また静かな時間が流れる。

大輔は今何を思っているんだろう。彰弘の事怒ってるのか、それとも桜の気持ちを知つて喜んでるのだろうか…今度は彰弘のことより今後の大輔と桜のことで頭がいっぱいになってきた。

「それはいいけどチョット待つて」

やっと口を開いたけど、まだなにか腑に落ちない様子だ。でも彰弘の事は許したみたいないい方だな。

私は次の言葉を促すように大輔を見る

「真下には話したけど、どうして彰弘まで俺が咲原を好きだって知っているんだ？」

「そりやお前の態度を見てたら分かるよ」
間髪いれずに彰弘が答えた。

「そ、そうなのか？」

「大輔も桜花ちゃんも鈍感だからな、分かってなかったのは当事者のお前達だけだよ」

「そうだったんだ」

私はもうさっさと話を終らせて早く桜に会いに行きたかった。いつまでもこんな所に居ても楽しい事なんて1つもない。

そんなことより、桜のふさぎこんでる理由も分かったし早く事実を話して安心させてやりたかった。

だけど…どうやって？

私と大輔が好き同士だって話は嘘だったと言っるのは簡単だけど、あの桜が信じてくれるかな？桜の性格だと自分を気遣って私が嘘を言ってると思うんじゃないだろうか？

それなら大輔の本当の気持ちを言うべきなのかな？でもそれは…大輔との約束もあるし…

私としては約束がなくても言わなくて済むなら言いたくない…

大輔はどうするつもりなんだろ？

「大輔どうするの？桜が大輔の事好きだって分かったんだから告白する？」

「え、わ、分からないよ」

「どうして？お互い好き同士なんだから告白すればうまくいくはずだよ」

「こんなこと言いたくないのに…」

「うん。でも」

そう言っただ輔が彰弘の顔を見ている。やっぱり彰弘のことが気になるんだな。なんだか少しホッとした気分になる。

「どうするかは自分で決めればいいよ、とりあえず私は約束通り大

輔の気持ちは桜に言わないでおくから、言っなら自分の口から言うてね」

「ああ、そうする」

約束と言うのは口実だ、私自身言いたくない気持ちがやっぱり心の隅にまだ残ってる。こんなことを考えてるなんて私って嫌な女だな。

桜は私がこんな事を考えるような人間だとはこれっぽっちも思っていないはず。それを思うと余計に落ち込む、私ってほんと最低。

「私は桜が心配だからこれから桜の家に行くよ」

嘘じゃない、桜が心配なのは本当だ。本当に凄く心配だ。早く行ってあげたい。早く彰弘の言ったことは嘘だと伝えて楽にさせてあげたい。だって桜は私の一番の親友だから。

彰弘はずっとうつむいて黙ってたまだ。

「二度とあんな嘘をつかないでね。あんな嘘をついても桜の気持ちが離れていくだけなんだから」

「うん、分かってる。もう二度と嘘なんてつかない、二人ともごめん」

「じゃあ私は急ぐから」

そう言って私は彰弘の家から大急ぎで桜の家に向かった。

そして向かいながら考える。

大輔の気持ちを言わないとは言ったけど、これだけ4人の関係がこじれてしまった今となっではもう桜と大輔をくつつけるしかないのかもしれない…

桜になんて言えばいいのか頭の中を整理する、ふと気付くと目に涙がたまっている。今にもこぼれそうな涙を少し上を向いて堪える。二人が付き合っとな私はやっぱり悲しいのかな？自問自答する。

そんなことない！私と桜は親友だ。そして二人は愛し合っているんだ。私は関係ない！

堪え切れなくて溢れ出た涙を振り払いながら二人が付き合うのが一番いいのだと強く自分に言い聞かせる。彰弘が嘘をついたせいじゃ

ない、元々二人は好き同士だったんだ。いずれ付き合うことになる運命だったんだ。

運命？そんなに重たいもののかな？高校生が好き同士で付き合ったからと言ってそれが永遠とは限らない。すぐに別れちゃうかもしれないし運命なんて言葉が適当なのかな？

だめ、私ったらまた変な事考えてる。変な希望を持ってしまいそうな卑しい思考を脳内から吐き飛ばすように頭を左右に激しく降る。そして念仏のように二人は好き同士、私が二人の間に入る余地なんて初めからなかった。と頭の中で繰り返す。

私は初めからただの友達なのよ。そしてこれから…

そんなことを考えながら重い足を動かし自転車を走らせる。桜の家に向かって。

第12話 【文化祭】決心

桜の家の前で大きく深呼吸をする。平日は毎日のように押すチャイム、普段は意識する事のないボタン。今はそのボタンを押そうとする指が震える。

今度は先ほどよりゆっくり深く息を吸い込む。そして胸いっぱい
に吸い込んだ空気をゆっくり吐き出し息を整える。

意を決して押したチャイムからはいつもと変わらない音が出る。
少しして妹の愛花ちゃんの声がする。

「愛花ちゃん、こんにちは」

「優希先輩。今日はどうしたんですか？お姉ちゃん？」

「桜に会いたいんだけどお願いできる」

「それが、今ちよつとお母さんと買い物に出かけてるんです。もう
少ししたら帰ってくると思うのであがつて待ってますか？」

「居ないのならいいよ。私が来たことだけ伝えておいて」

心配だなんて偉そうなことを言いながら、心の中では桜が居なく
てほつとしている。

桜になんて言えばいいのかまだ考えがまとまっていないのもある。
けど…言わなくてはならない事実を今は回避できた事にほつとして
の自分がいるのが分かる。

相変わらず嫌な女だ。

「わかりました、ちゃんと伝えておきますね」

「お願いね。それと明日、明後日は土日で学校が休みだから月曜日の
朝にまた来るので一緒に学校に行こうって言うておいてね」

「はい」

「それじゃあお願いね」

そう言うて桜の家をあとする。

一日でも早く桜に彰弘のことは嘘だと言ってあげないといけ

ないのに。

素直に全てを話せばいいのに、色々考えてる私って最低だ。自己嫌悪に陥りながら暗い気持ちで家に向かって自転車を走らせる。

本当に何も言わなくていいの？月曜日まで？そんなに長い時間桜を苦しめていいの？

もう全てが分かっているのに黙ったまま？それでも友達？自問自答を繰り返す。

やっぱりダメ。

私は慌てて桜の家に戻ってもう一度チャイムを押す。

「優希先輩、どうしたんですか？」

「言い忘れていたんだけど、もう一つ伝えて欲しいことがあったの」「なんですか？」

「彰弘が言ったことは全て嘘だから、桜は何も気にしないでいいから。詳しくは明日もう一度来るからその時に全て話すと伝えておいて欲しいの」

「ごめんなさい。明日からおばあちゃんの家にお泊りに行くので皆いないんです」

「そうなんだ」

私はどうすればいいのか少し考える。

「じゃあとりあえず彰弘が言った事は全て嘘だったって事だけ伝えておいて。詳しい話は月曜日の朝むかえに来るからその時に話すって言うておいて」

「わかりました。ちゃんと伝えておきます」

「くれぐれもお願ひね」

「任せておいてください」

相変わらず愛花ちゃんは軽い。その軽さがやや心配だ。

「愛花ちゃん頼りにしてるよ」

満面の笑みでブイサインをする愛花ちゃんに一抹の不安を抱えながら桜の家をあとする。

桜を待つて全てを話すという選択肢もあった。

あったというよりもそうするべきだったと思う。だけど今はこれで精一杯だ。

でも月曜日には絶対全て話そう。桜とはずっと親友でいたいから。

第13話 【文化祭】嘘？

私が買い物から帰ってくると愛花が待ってましたとばかりに話しかけてくる。

「お姉ちゃんお帰り」

なにかあったのだろうか？慌ててるようだ。

「さっき優希先輩が来たよ」

「え？ゆきちゃんか？」

学校を休んだからゆきちゃんが心配して来てくれたんだ。

それは素直に嬉しい。でも今はまだ会う勇気が無い。

「なんかね、彰弘さんって言ったかな？その人が嘘をついてたんだって、だからお姉ちゃんは何も気にしないでいいんだって」

「嘘？葵くんが嘘をついてたって？」

「葵くんじゃないよ、彰弘さん」

愛花は葵ちゃんと彰弘さんが同一人物とは分からないから変な回答が返ってくる。

「葵彰弘なの！」

「あつ、そっか、お姉ちゃん何かあったの？大丈夫？」

私がいつもと様子が違うので心配してくれているのだろう。

いつもは生意気な妹だけどこんな言葉を聞くとすごく可愛く思う。でもそれより葵くんが嘘をついたってどういうこと？

「それで？他に何か言ってた？」

「優希先輩が明日もう一度来て詳しく話すって言ったんだけど、明日はおばあちゃん家に行くから誰もいないって言った」

「どうして？」

「どうしてって、お姉ちゃんもおばあちゃん家に行くでしょ？」

「う、うん」

「お姉ちゃん何を焦ってるの？そんなに気になるんなら電話でもしたら？」

「そ、そうね」

そう力なく答えて自分の部屋に入る。

すごく気になるけど電話をする勇気なんてない。

でも葵くんの嘘ってなんだろう？昨日のあの話が全部嘘ってこと？

ゆきちゃんと鮎川くんがお互いに好きだって話が嘘だったってこと？

葵くんがそんな嘘をつく？友達を傷付けるようなことを言うのかな？

それにゆきちゃんの全てを話すってどういうことなんだろう？

今すぐ電話して聞きたいけど、聞くのが怖い。

結局何もしないまま土曜日の朝を迎える。

土曜日から一泊しておばあちゃんの家で過ごし、日曜は夕食を済ませてから帰ってきた。

おばあちゃんの家ですつとみんなのことを考えていた。今もまだ考えている、でも私なりに1つの結論に達した。

葵くんが私に言った話。やっぱりあれが全て嘘だとは思えない。

だってあんな嘘をついてもすぐに嘘だと分かるし、皆を傷つけるだけだもん。

それならゆきちゃんが気遣って、あれは嘘だから気にしないでいいよ、って言うってくれてるといふ風に考えた方が自然な感じがする。ゆきちゃんはいつも私のことを一番に気遣ってくれてるからきつとそうに違いない。

でももしゆきちゃんが本当に鮎川くんのが好きならその気持ちを偽らないで欲しい、私の気持ちはどうであれ自分の気持ちに正直にいて欲しい。

鮎川くんがゆきちゃんのことを好きならなおさら私のことなんて気にしないで欲しい。

私の考えが合っているのかどうか分からないけど、今はそんな気

持ちだ。

明日ゆきちゃんが全て話してくれるって言っているのだからその時に全てが分かると思う。

葵くんの話が嘘と言うのが本当なのかどうかも含めて全て聞こう。明日こそはゆきちゃんと会おう。そしてこの問題を早く解決しよう。もう迷いはない。

その時、玄関からチャイムの音が聞こえる。誰か来たようだ。時計を見ると9時を少し過ぎてる。こんな時間に誰だろう？

第14話 【文化祭】訪問者

部屋のドアを少し開けて玄関の方に聞き耳を立ててみる。間もなく愛花が勢いよく階段を駆け上る音が聞こえてくる。

ゆきちゃんが来たのかな？

「お姉ちゃん葵さんって人が来てるよ、どうしてもお姉ちゃんに会いたいんだって」

葵くん？葵くんがきたの？どうしたんだろう？もうゆきちゃんと会う決心もついたらし、葵くんも来たのなら会ってみよう、そう考えて階段を下りる。

「お姉ちゃんなんだか元気が出たみたいね」

愛花の言葉に笑みで応え玄関へ向かう。

「桜花ちゃんこんばんは」

葵くんはどこなく思いつめたような表情で挨拶をしてきた。

ある程度の決意を持って会って見たものの、そのこわばった顔を見た瞬間に緊張してしまった。

「どうしたの？突然」

「優希から聞いたと思うけど、俺がこの前桜花ちゃんに言ったことは嘘だったんだ」

ゆきちゃんの言った事は本当だったんだ。どうしてあんなひどい嘘を？

私はなんとも言えない腹立たしさと同時に悲しい気持ちになった。葵くんがあんな嘘をつく人だったなんて…… だけど葵くんが何故そんな嘘をついたのかを知りたくて平静を装いながら話す。

「そうなんだ、ゆきちゃんが言ってたことは本当だったのね」

「ごめん、どうしても謝りたくて」

「どうしてあんな嘘をついたの？あんな嘘をついても何もいいことなんてないよ、私もあれからずっと辛い思いをしたし、ゆきちゃんや鮎川くんにも迷惑なことだよ」

だんだんと感情的になつてくる。

「わかつてる、けどどうしても桜花ちゃんのが好きでその気持ちを抑えきれなくてあんな嘘をついてしまったんだ、でもすごく反省してるし皆には本当に悪かったと思つて。もう二度と嘘なんてつかないよ。本当にごめん」

葵くんの言っていることは分かる。けどそれだけでそんな嘘をつくなんて酷い。

葵くんの気持ちを考えると同情する部分もあるのは確かだ、私も鮎川くんがゆきちゃんを好きだと聞いた時はものすごく悲しかったから。

「もうあんな嘘をつかないでね」

「約束するよ」

葵くんも反省しているみたいだし、私としてもあの話が嘘でホツとした気持ちもあるのでこれ以上咎める気もなかった。

そもそも本当に反省して謝つてる人に対してきつく言うことが出来ない性格だつてことは自分でよく分かつている。

「それで優希は他に何か言つてた？大輔のこととか、自分自身のこととか」

「何も聞いてないよ、あの日家に来てくれたのだけど私が出かけていたので会えなくて、妹に葵くんの話が嘘だつたつてことだけ伝言して帰つたみたい」

「そうなんだ、おかしいな」

「何がおかしいの？」

「俺の嘘で桜花ちゃんが落ち込んでると分かつたたん、心配だからと言つて大慌てで桜花ちゃんの家に来たはずなのに、桜花ちゃんに会わずに伝言だけ頼んで帰るなんてなくおかしい気がする」

「ゆきちゃんは明日全てを話すからと言つ伝言も残していったよ」

「どうして明日なんだろ？電話でもいいし、もう一度会いに来てもいいから直ぐに伝えればいいのに」

葵くんは何か言いたそうだけど物言いが遠まわしではつきりとし

ない。

思い起こせば私自身ゆきちゃんが愛花に伝言を頼んで直ぐに帰ったことには少し疑問を感じたことを思い出す。

いつもならもうすぐ帰ってくるのが分かっていたら待っていてくれるのに。

あの時点では私自身会うのが辛かったから、会わなくて済んでよかったと思ったのであまり深く考えなかったけど、葵さんの言い回しに何か不安を感じる。

「葵くん、何が言いたいの？」

「大輔が優希を好きだって言うのは嘘で本当は桜花ちゃんのことを好きなんだ」

「え？」

私はゆきちゃんのことを色々と考えていた為に葵さんの話をちゃんと聞いてなかった。

いや、聞いていたつもりだった。だけど今、信じられない事を言われたような気がしてきつと聞き間違いだと考えた。

葵さんの言葉を思い返す。思い返すとやっぱり鮎川くんが私を好きだと言ったような気がする。

そう思うと突然心臓が圧迫され口から飛び出しそうになる。事実なら嬉しいことだけど突然の告白に胸が痛い。息も苦しくなってくる。

でも聞き間違いだと恥ずかしいのもう一度、今度は聞き逃さないように葵さんに問う。

「ごめん、今何て言ったの？はつきり聞いてなかった。もう一度言ってもらってもいいかな？」

第15話 【文化祭】何が本当？

話をちゃんと聞いていなかったのでもう一度聞きなোস。

「だから大輔が好きなのは桜花ちゃんだって言ったの。俺だってこんなこと言うのは辛いんだから何度も言わせないで」

「ごめん」

やはり聞き違いではなかった、鮎川くんが私のこと好きだと言った。

頬の辺りが熱を持ち急激に暑くなる。きっと顔が真っ赤になっているに違いない。恥ずかしい。

私は少しでも恥ずかしさを隠そうとするが、どう反応していいか分からず所在無くあたふたとしてしまう。

私の挙動不審な態度を見てだろう、葵くんがこらえきれないように笑い出す。

「俺ももう吹っ切れたし正直に話すよ、大輔はずっと前から桜花ちゃんのことが好きだったんだよ。そのことは優希もうすす感付いていたはずだ」

「桜花ちゃんが大輔を好きだったことも分かった。だから俺は焦ってあんな嘘をついてしまったんだ」

葵くんがまた鮎川くんの話をする、話の内容はあまり頭に入っていない。鮎川くんの名前が出るたびに血液の温度が確実に上がっていくようなそんな感覚でだんだん頭がボーっとしてくる。

「でも優希の気持ちは俺の言った通りだと思う、あの日桜花ちゃんに会いに来たのに会わずに帰ったのがどうも引掛かる」

また葵くんが何か話している、けどもう話を聞いていられない。胸が痛くて口からたくさん酸素が入り込んでくるかと思えば酸欠になっていたり……とにかく息が苦しい。こんな状態じゃ恥ずかしさがどうとか言ってもらえない。少し落ち着くためにも早く部屋に戻りたい。

私が何度も大きな息を吸ったり吐いたりしているのを見て、何も聞いていないと気がついたのか葵くんが私の両肩を掴み力任せに揺する。

「桜花ちゃん聞いてる？優希の気持ち分かってるの？」

ゆきちゃんの名前を聞いて頭に上った血が下がるのがわかる。そこでやっと私は自分の体の変調から解放される。

そうだゆきちゃんだ、ゆきちゃんのことを忘れていた。

「な、なに？ゆきちゃんがどうしたの？」

「大輔の話で浮かれるのも分かるけどちゃんと聞いて」

そんな言い方をされるとまた恥ずかしくなる……

「う、うん。ごめん」

「優希はきつと大輔のことが好きだとおもっ。これは嘘じゃない。ただ俺が見た感じの話だから、本当ってわけでもない。」

その言葉に私は高い所から突き落とされたような気分になる。

先ほどまでの浮かれた気分が一気にかき消される。

ゆきちゃんの優しい顔が脳裏にうかび浮かれていた自分が恥ずかしくなる。そして浮かれていたことがゆきちゃんを傷つけてしまったような気になり更に落ち込む。

ゆきちゃんが鮎川くんのことを好き？

でもゆきちゃんは葵くんの話は全部嘘だと言ってたよね。そう考えることで浮かれてしまっていた自分になんとかいい訳をしようとする。

葵くんの話ではゆきちゃんと鮎川くんはお互い好き同士だっ言ってた、でもそれが嘘ってことはゆきちゃんが鮎川くんを好きって話も嘘ってことよね？そうよね？すぐる様な気持ちで葵くんに聞き返す。

「それは本当なの？本当にゆきちゃんは鮎川くんのこと好きなの？」

「本当かどうかは分からない、優希が言ったわけじゃないから、でも優希の行動を総合して考えると間違いないと思う」

私は鈍感だから気がつかなかったけど葵くんがそう思うならそう

なのかもしれない。

「優希が明日全てを話すと言っているのならそのことも話してくれると思うよ」

「うん……」

葵くんの言うとおり明日ゆきちゃんに会えば全てが分かるんだ。とりあえず今日はもう部屋でゆっくりしたい。

「葵くん、今日は正直に話してくれてありがとう、私はちょっと疲れたので部屋に戻るね」

「色々ごめん。明日また会おうね」

私は部屋を出たときとは全く逆の重い足取りで階段を登る。部屋に入った私は全身から力が抜けるのを感じながらベットに倒れこむ。ゆきちゃん……本当は鮎川くんのこと好きなの？ゆきちゃんは葵くんが嘘をついてるって言ったけど本当はどうなの？ゆきちゃんは私が鮎川くんの事を好きなのを知ってるから自分の気持ちを言えないだけじゃないの？どうなの？

ダメ……それが本当でどれが嘘か分からなくなってきた。

もう何も考えたくない。もうこのままでいい、何も要らない、何も望まない。だからこのまま時間だけ止まって欲しい。

時計を見ると12時になるうとしていた。いつもならそろそろ寝る時間だ。

でも寝るのが怖い。寝たら明日になっってしまうから。

明日になったらゆきちゃんが来てしまうから……

第16話 【文化祭】 どうして？

月曜日の朝、私は清しい気持ちで桜の家に向かう。

この二日間、色々考えた結果きっぱり全てを話す決心をした。大輔の気持ちは桜に言わないという約束は破ってしまうことになるけどその部分も話すことにした。

そう決心するとなんだか心が軽くなった。

桜の気持ちを知っていたのだから初めからそうするべきだった、何も悩むことはなかった。

桜の家のチャイムを鳴らすといつものように妹の愛花ちゃんが出てきた。

なにやら神妙な顔をしている。どうしたのだろうか？

「おはよう、どうしたの？ なんだか浮かない顔してるね」

「お姉ちゃんが、優希先輩がむかえに来るって言うてるのに先に行っちゃったの」

どうして？ 彰弘の話は嘘だって言ってたのにまだ私と会ってくれないの？ 意気揚々と家を出て清々しい気持ちで桜に会いに来たのに、愛花ちゃんの一言でその気持ちがかき消され暗い影に心が覆われてしまう。

それが表情にでたのだろうか、愛花ちゃんが心配そうに私の顔を覗き込み、気を使って話しかけてくる。

「お姉ちゃん昨日は元気だったのだけど葵彰弘って人が来てからまた元気がなくなったみたいなの」

「彰弘がきたの？」

「なんだか色々話してたみたい、長い時間話し込んでたよ」

何を話したんだろう？ 桜が私をおいて先に学校に行ってしまった事に関係あるのだろうか？

早く学校に行って桜に会いたい、だけどその前に彰弘に何を話したか聞いておきたい。そんな思いで大急ぎで学校に向かう。

第16話 【文化祭】どうして? (後書き)

今回は超短いです。次ぎはもう少し書きますね(・Θ・)(

第17話 【文化祭】ばか！

教室についてあたりを見回す。

時間が早いせいか教室には生徒がまばらで半数以上はまだ登校してきていない。

彰弘も大輔もまだ来ていないようだ。

桜も探す桜の姿も見えない、私より先に家を出ているのだからもう学校に着いているはずなのに……どこかで寄り道もしているのだろうか？

そんなことを考えながら誰か来るのを待っていると彰弘と大輔と一緒に教室に入ってきた。

私は桜のことが気になるのですぐさま彰弘に話しかける。

「昨日桜の家に行ったんでしょ？何を話したの？」

「特に何も話してないよ、ただ嘘をついたことを謝りに行ったただだよ」

彰弘は平静を装いながら話しているが、私の質問に対して彰弘が一瞬目を見開いたのを見逃さなかった。

「それだけ？他に何か話したんでしょ？何か隠してるでしょ」

「何も隠してないよ」

彰弘は私と目を合わさないように顔を俯けて話す。その態度がますます怪しい。

「どうして私と目を合わさないの？なにかやましい事があるんじゃないの？まさかまた何か変な嘘をついたんじゃないでしょうね？」

「う、嘘なんてついてないよ、ただ……」

「ただ、何？何を言ったの？」

「優希が大輔を好きだと言う話だけは間違っていないかもしれないと言った」

「え？」

ドキッとして思わず大輔の顔を見てしまう。

「だから、これは俺の勘だけど優希の気持ちだけは当たっていると思うって言ったんだ。でも優希から聞いたわけじゃないから、あくまでも俺の勘だけど、と言ったから嘘は言ってない」

激しい怒りがこみ上げると同時にみるみるうちに血が頭にのぼる。血液の激しい移動で目眩と共に目の前が霧に覆われるように白く煙つてくる。

「ばかー！」

噴出すように怒りの言葉が出た。自分でもびっくりするくらいの大声だ。その大声に委員長や教室に居た皆が一斉に私の方を見る。ざわついた教室が静まりかえる。

「私がいつ大輔を好きだと言ったの？そんなこと一言も言っていないでしょ！」

皆驚いたような顔をして私の話を聞いているが私はかまわず怒鳴り散らす。殴りかけたい衝動に駆られるもそれだけはかるうじて我慢する。

「だから俺の勘だって言ったんだよ」

またわけのわからないことを言う。

「彰弘の勘は外れてるのよ！その外れた勘を桜にはいかにも当たっているかのように言ったんでしょ」

「ごめん、そんなつもりじゃ……」

「じゃどんなつもり？だいたい謝ってすむ問題？」

話せば話すほど激しい怒りにとらわれ我を忘れて怒鳴り声をあげる。

その激しい怒声に教室にいる皆は誰一人として言葉を発せないで静まりかえったままだ。

「ごめん、本当にそんなつもりじゃなかったんだ。大輔の気持ちを桜花ちゃんに伝えたら凄く嬉しそうに浮かれて……それがちよつと悔しかったから思わず……」

「それじゃやつぱり悪気があるんじゃないの！それに大輔の事も言ったの？」

彰弘はしまったというような顔をして逃げ出そうとする。

「まって！まだ話は終ってないわよ！」

「ごめん、でも俺、今回はただ桜花ちゃんに謝りたかっただけなんだ」

そう言って走り去って行った。追いかけようとしたがあまりにも衝撃的な出来事に全身から力が抜けて体がうまく動かない。

私はへたり込むようにその場にある椅子に座った。

「真下、大丈夫か？」

大輔が心配して話しかけてくれるが返事をする元気もない。

それにしても彰弘はどうしてあんなに馬鹿なんだ？彰弘の馬鹿さ加減に眩暈がしてきた。

謝りたかったのなら普通に謝ればいいのに、ペラペラとあることないこと何でもかんでも話してしまって。

桜のことが好きなくせにどうして桜を悲しませるような事を平気で言えるのだろうか？

根本的に馬鹿だから仕方ないのだろうか？それでは済まされない。

せつかく桜と元通り仲良く話ができると思っていたのに、あの馬鹿のお陰で桜がまた傷ついてしまったんだから……

もうすぐ始業のHRが始まる時間になるうとしているのにまだ桜の姿が見えないのも気になる。

もしかするといつも通り家を出たけど学校は休むつもりなのだろうか。

そして彰弘はどこに逃げたんだろう？戻ってくる気配がない、このまま早退するのだろうか。

色々考えているうちに先生が来た。

先生が来た事によって静まり返っていた教室内はいつもの時間を取り戻す。

私ものろのろと力なく自分の席に戻る。

この続きは休み時間だ、それまでに考えをまとめておこう。

第18話 【文化祭】告白の決意

一時間目の授業を受けながら色々考える。

桜は今、精神的にかなり苦しい状態なはずだ。それを和らげる一番の方法は……

私にはこれしか思い浮かばない。

それは桜と大輔が付き合うってことだ。ただ付き合うことになるだけじゃなく、私が協力するという形にした方がいいと思う。桜は私が大輔のことを好きだと思ってるはずだから。

大輔自身桜のことが好きなんだし、告白しようか迷っていたくらいだから私がけしかければ告白する気になるだろう。

それにここ数日色々あって忘れていたけど、明日の文化祭初日、ようするに10月20日は桜の誕生日だ。それを理由にすれば告白もしやすいんじゃないかな？

一時間目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り始めると先生は教本を閉じてさっさと教室を出る、それを見届けてから大急ぎで大輔の席に向かう。

「大輔、話があるんだけどいいかな？」

「どうしたんだ？えらく慌ててるな」

「話とかお願いなんだけど、桜に告白してくれない？」

「な、ど、どうしたんだいきなり」

相当驚いているようだけど話を止めることなく続ける。

「朝の彰弘との話聞いてたでしょ？彰弘は桜に、私が大輔を好きだっと思って思い込ませてしまったみたいだから、それが的外れな勘だという事を分からせる為に告白してほしいの。なるべく早く」

「ちよつと待て、俺が告白すると真下が俺を好きじゃないってことになるのか？」

当然の疑問だ。

「そっじゃない。大切なのはここからよ」

「何だ？」

「桜に告白する時、この告白に至るまで私に色々と協力してもらったと言ってほしいの」

大輔は黙ってうなずく。

「それと同時に私に好きな人はいないってことも付け加えておいてほしいの」

「なるほど、真下の言いたいことはよくわかった」

私はあるがとうと言う代わりに笑顔をつくる。

「明日は咲原の誕生日だし丁度いい、明日告白しよう」

「知ってたんだ…… 突然だけど心の準備は大丈夫？」

「俺自身も告白しようかとずいぶん悩んでいたからな、でも……」

大輔はおもむろに腕を組み動かなくなった。何か考えているようだ。“でも”の続きが気になる。

しばらく沈黙が続いたが大輔が私の目をじっと見つめながら話し始める。

「自惚れるつもりはないけど、これだけ色々あるとやっぱり気になるのは確かだ。真下は本当に誰も好きな人がいないのか？」

まさか大輔がそんなことを言うとは思っていなかったので飛び上がってしまいそうになるがなんとか堪える。しかし心臓の鼓動が速くなってしまっているのはどうしようもない。

だけどここで大輔に怪しまれるとまた話がこじれてしまうので細心の注意を払い受け答えをする。

「朝から何度も言ってるでしょ？大輔もしつこいね。それともあんな彰弘の嘘を信じたの？」

声のトーンが変わると怪しまれると思い意識的にいつもと変わらない話し方をする。

大輔がまた何か考えているようだ……

少し間をおいて。

「どうやら本当みたいだな、分かった明日告白するよ、そして真下の事もちゃんと言っておく」

どうやら大輔を騙せたようだ。これでいいんだ……　これですべてうまくいく。

彰弘には残念な結果になるだろうけど仕方ない。私にとっても……とにかく今回これだけ話がこじれたのもあいつが馬鹿なせいなのだから。

「じゃ頼んだよ、明日の文化祭で午前中四人一緒に店に出るからその後二人になれるようにセッティングする。だから何があってもその時必ず告白してよ」

「真下がセッティングしてくれるのか？」

私は軽く頷き時計を見る、もう休憩時間があまりない。席を立ちながら最後の話をする。

「明日の事はそれでいいよね、それじゃ私は桜が心配だから早退して捜してみる。朝はちゃんと家を出てるのに学校に来ていないのが心配なの。それに明日学校に来てくれないと困るしね」

そう言って教室のドアに向かうと。

「ちょっと待つて、それなら俺も一緒に捜すよ」

気が急いているのでそんなやり取りをしながらも教室を出て早歩きで職員室に向かう。

「いいの？早退することになるよ」

「俺にとっても咲原は大切な人だからな、一緒に捜させてくれ」

大切な人……　聞きたくない言葉を浴びせられて思わず足を止めそうになる。

もう恋人気取りなのね……　お互い好き同士だって分かっているから自然とそうなるのかな。

私は自分に言い聞かせる。もう私には関係ない。私は好きな人はいない！だから何も気にならない。

そう、これから先もずっと誰も好きになんてならない。絶対に……

「おい！」

突然大声で呼ばれてびっくりする。

「俺の話を聞いているか？」

「ああ、ごめん。なんだって？」

「だから、咲原を捜すと言って当てはあるのか？それに職員室も通り越してるぞ」

そう言われて立ち止まる。みると確かに職員室を通り越していた。そして……

そうなのよ、捜すと言ってもどこを捜せばいいのかわからない。だけど教室でじつと授業を受けてなんていられない。とにかく捜しに行きたい。

第19話 【文化祭】どこにいるの？

担任の許可をもらい早退をし、学校を出てまずは駅周辺へ移動する。

駅前には新築のアミューズメントビルやホテル、百貨店など大きなビルが立ち並び、一步裏に入ると古い雑居ビルやら小さな飲食店などが軒を連ねる。昨今寂れている所が多いと言われている商店街だがここは未だに週末ともなれば多くの若者が行き来する場所になっている。

よってこの辺り一帯には喫茶店やゲームセンター、洋服屋からアクセサリーショップ、映画館までなんでもある。まさに繁華街だ。朝に家を出てから夕方まで時間をつぶすならこの辺りにいる一番可能性が高いだろうと話し合いこの辺りで捜すことにする。

二人一緒に捜しても効率が悪いので二手に別れる。

大輔にはアミューズメントビルの方を頼み、私は百貨店を捜す。

百貨店の正面玄関から入り1階の宝石店から早足に見てまわる。百貨店は10時オープン、今はまだオープンして間もないため人がまばらだ。

その分捜しやすいが店員が制服姿の私を見ては怪訝そうな顔をしている。確かにこんな時間に制服を着た女の子が一人で宝石を見てまわるのはおかしい。

そう考えると桜がこんなところにいるはずないと思い2階にあがる。2階は化粧品売り場だ。ここにも桜はいそうにない。

私はエスカレーター横の各階の案内を見る。3階にバックや財布などの売り場が並び、4階に婦人服とアクセサリー売り場。5階は高級婦人服、6階は紳士服と続き9階のレストラン街まである。

どこに居そうか思案し、とりあえず4階のアクセサリー売り場まで行ってみることにした。だがこの階にもいない。どこに居るのか

さっぱり分らない。そもそもこんな時間の百貨店に立ち寄りたりするだろうか？よくよく考えるとここには居ないのではないかと思ひ始める。

やはりアミューズメントビルの方が可能性が高いのではないだろうかと思ひ、4階のエスカレーター横の硝子越しにそちらの方向を見る。

百貨店の正面玄関前には大きな交差点がある。交差点の車道は東西のみで片側3車線あり、南北は百貨店と商店街をつなぐ形で歩行者だけが渡れるようになってる。

商店街の入り口の西側にはシティーホテルが建っている。一階が旅行代理店になっているこのホテルのロビーは確か6階にあった記憶がある。

これは以前桜の誕生日会に桜のご両親に是非にとお誘いを受け、このホテルでフランス料理をよばれたことがあり、その時にロビーが6階にあるのを不思議に思ったから覚えてる。

そして商店街の東側には大きなアミューズメントビルが3棟並んでいる。このビルは駅前第一ビル、第三ビルという分かりやすい名前が付いている。大輔はそのビルのどれかを捜しているに違いない。私はここを出て商店街の方へ行こうと思ひもう一度その交差点に目線を落とす。

するとそこに捜し求めていた桜がいた。

「桜！」

思わず叫んでしまい、はっとして周りを見ると遠巻きに店員が変なものを見るような顔でこちらを伺っている。

でも今はそんなことを気にしている場合じゃない。もう一度交差点の方を見る。

どうやら桜は信号待ちをしているようだ、南側にある百貨店前から北に向かって信号を渡ろうとしているのだろう。

早く追いかけないと。

気が急くがあえて冷静に信号を確かめる。今桜から目を離してし

まうと見失う可能性があるので信号を渡った後どちらの方向に歩きだすか確かめてから追いかけた方がいいと考えてのことだ。

この交差点、西向きには殆ど車が走っていないが東向きは車が多い、よく見るとその車が一斉に動き出したところだ、ということはまだ歩行者側が赤になって間もないはずだ。

ここで桜の行く方向を確かめるより直ぐに追いかけた方が良いと判断した私は大急ぎでエスカレーターを駆け下りる。

心の中で桜に『待ってて』と願いながら。

運動神経はそれほど悪くないつもりだが桜を見つけて鼓動が早くなっているせいか直ぐに息が上がってきた。しかし気持ちで走り続ける。足がもつれそうになるが何とか踏ん張って最後まで駆け下りた。そしてそのままわき目もふらず正面玄関へ直行する。

百貨店の正面玄関を出るとすぐ目の前が交差点だ。

『いた！』私の鼓動は更に早くなる。

降りてくる間に信号が変わったのだらう、桜は既に交差点を渡りきっている。

その渡りきったところで何かの勧誘にでも声をかけられたのか立ち止まって話を聞いている。

ここからだと桜の横顔しか見えないが明らかに困っているのが分かる。普段ならうつうつしい存在の勧誘だが今は桜を引き止めてくれていることに感謝さえしてしまう。

そして桜に向かつて走り出そうとした時、桜が手と首を振りながら勧誘者から逃げ出すように歩きだした。

「待って！」

第20話 【文化祭】危ない！

桜が歩きだした。

焦った私は桜に向かって今まで出したことのない様な、自分でも驚くほどの大声で叫びながら走り出した。

「桜、まって！」

その声に気付いてくれたのか振り向いた桜と目が合う、桜は驚いたような顔をしている。やっぱり気づいてくれたんだ。

私は喜びから満面の笑みを浮かべ交差点を駆け抜け抜けようとする。

だが次の瞬間桜の視線が横に流れ、ひきつったような奇声をあげる。

それと同時に誰かの甲高い悲鳴が聞こえる。

私は思わず立ち止まり桜の流した視線の方を見る。

見ると車が物凄いスピードで迫って来ている。

私は桜しか見えていなく信号が既に赤に変わってしまったことに気がついていなかったのだ。

やっと見つけた桜が歩きだした焦りで、信号を確認する冷静さを失わせてしまい、既に赤になっていた交差点に進入してしまったのだ。

あまりの恐怖からか蛇に睨まれた蛙のように体が固まってしまい動くことができない。

全身に鳥肌が立ち脳には危険を知らせる信号が大量に送り込まれ、体だけではなく脳の中まで汗をかいているような感覚だ。

だが唯一動くのは震えている膝だけでそれ以外は何も動かない。

車は急ブレーキをかけたためにロックしたタイヤが路面との摩擦で白い煙を吐き出しながら耳を引き裂くようなブレーキ音を出し車体を半回転しながら迫ってくる。

一瞬目の前の景色が眩い光に包まれいつもとは違う次元に迷い込

んだような錯覚にとらわれる。

皆の悲鳴がゆっくりと耳に響き、周り全てがスローモーションのように映る。神経が極限まで研ぎ澄まされたような感覚だ。

桜の方を見るとこちらを凝視したまま固まっている。桜と目が合うが桜は見えているのだろうか？こんな危機的状況に陥りながらどこか冷静に周りが見える、だが迫る車から逃れる為の足は動かない。もう一度車に目を移すと完全に横向きになった車のボディが横滑りしながら２メートル程まで近づいてきている。

『もうダメ』ぶつかる。

私死ぬかも。桜、ごめんね。

そう思い全てを諦めかけた瞬間呪文が解けたように足が動いた。そして先ほどのまでのスローな次元から現実世界に引き戻される。私は大急ぎでその場を離れようと足を一步を踏み出した。が、遅かった。

もう目の前まで来ていた車はさらに90度回転しながら私に襲い掛かる。

そして車体の後部に激突し跳ね上げられる。

体に当たる瞬間の映像がしつかりと頭の中に刷り込まれる。

そして体が重力を無くした様な感覚にとらわれる。

しかし当たったはずなのにどこも痛くない、それよりも一瞬雲ひとつない青い空が見えたと思ったが今はどこを見ているのだろうか？ただ自分が吹き飛ばされてるのだけは分かる。

その時、目の端に桜を捉える、よく見ると後ろから桜を抱きながら腕で目隠しをしている大輔がいた。

大輔も桜を見つけたようだ。

『よかった』

そう思ったのとほぼ同時に、地面にたたきつけられたのだろうか背中火がついたような痛みにも襲われる。

車に当たっても痛くなかったのに地面の方が痛いんだ、などと思っているが、意識がだんだんと霞んでくる。

そして目の前が闇に覆われてくる。

今まで晴れていたのに急に雨が降ってきたのだろうか？耳元で雨音がともうるさく聞こえる。

体中が濡れたような感覚に覆われこんな時に雨だなんて、と嫌な気分になる。

しかしもう既に背中中は痛くない。どうしてだろう？極限状態には激しい痛みを感じないように脳内麻薬が出ると聞いたことがあるがそれだろうか。

それとも案外どこも怪我をしてないのかな？そう思って体を動かそうとするがどこにも力が入らない、というよりも力を入れようと脳に命令しても全く応答がない。

それより気を抜けば意識が飛んでしまいそうだ。そんな中なんとか意識を踏みとどまらせて色々なことを考えている。

やっぱり私はこのまま死んじやうのかな？きつと死ぬんだろうな。そうだ、桜はどこだろう。死ぬ前に謝らなきゃ。

桜、どこ？意識がもうもたないよ。もう一度会って話したかったのに。

どこにいるの？

いっぱい謝りたいことがあるのに……

もうダメ。桜……

ちよつと疲れた、これ以上は無理かも……

先に死んじやうかもしれないけどごめんね。

それと、大輔とのこと本当にごめんね。

私の一番大切な、大……な 桜……ごめん……ね。

第21話 【文化祭】返事をして！

目の前には信じられない光景が広がっていた。
ゆきちゃんが車にはねられ、一回転して大きく飛ばされてしまった。

私はゆきちゃんの名を叫びながら駆け寄る。

走りながら目の前で起こっていることなのに、嘘だ！これは幻だと言いつつ聞かせ、そうあってほしいと祈る。

ゆきちゃんを見るとどこから出ているのかはつきりとは分からないけど、頭の辺りだろうか血がたくさん出ている。

名前を呼んでも反応がない。

こうして近くで見れば見るほど紛れもない現実が目の前にある。
さっきまで元気だったゆきちゃんが今は動かなくなっている。

どうして？さっきビックリするような大声で私の名を呼んでくれたでしょ。

「ゆきちゃん、私だよ。なんとか言つて。さっきみたいに私の名前を呼んで」

全く反応がない。

ほんの一分前だよ。その時は私を呼んでくれたじゃない。

「ゆきちゃん、しっかりして」

私の悲痛な叫びもむなしく、体中の力が抜けきつたようにぐったりとしたゆきちゃんから返事は返ってこない。

いや、それよりもこのまま意識が戻らないのではないかと思わせるような酷い有様だ。

私はゆきちゃんの反応がないので揺すって意識を戻そうと思い手を伸ばした。

「ダメだ」

誰かの制止させようとする声と同時に私の体が後ろから掴まれる。
振り向くとそこには鮎川くんがいる。

「今真下を動かすのは危険だ、頭から血が出ているから飛ばされたときに頭を打ったかもしれない、救急車が来るまで動かさない方がいい」

「そうだ！救急車を呼ばなくっちゃ」

「大丈夫もう呼んである、直ぐに来ると思う」

私はパニック状態に陥り今何をすればいいかも分からない。意識が戻らないゆきちゃんの名前を叫びながら泣くだけだ。

その時、ゆきちゃんの唇がかすかに動いた気がした。

「今何か言ったよ、言ったよね」

私はすぐるような面持ちで鮎川くんに同意を求める。

「わからない」

そんなことない。確かに唇が動いた。そう、私の名前。桜と言ってくれた。

そう思うと呼びかける声がより一層大きくなる。

さつきよりもっと近く。ゆきちゃんの耳元で名前を呼ぶ。

だけどそれつきり反応がない。

全く動かないゆきちゃんに最悪の事態を想像してしまう。

ゆきちゃんを抱きかかえたいのだけど鮎川くんが邪魔をする。

救急車もまだ来ない。

焦りと苛立ちがピークに達しようとした時、遠くからサイレンが聞こえてきた。

あのサイレンが到着さえすれば……その車の中から天使が降り立ちゆきちゃんを助けてくれる。

その映像が頭中に浮かび上がる。

サイレンの音ひとつで幾分冷静さがもどってきた。

今まで幾度となく聞いたことのある救急車のサイレン。

いつもは他人事であり気にも留めることなどなかった。救急車に乗っている人を見ても無責任に、どうしたんだろう？大丈夫かな？と思う程度。

近くでサイレンを聞くと『うわ、すごい音量、耳が痛い』など不

謹慎な事を思ったりした。でも今はそのサイレンが私達を救ってくれる唯一の天の声のように感じる。

『早く来て、早く。お願い。』

私は祈るような気持ちで救急車が到着するのを待つ。

第22話 【文化祭】救急

ゆきちゃんを救ってくれるはずの救急車が到着した。

救急隊員の人達が出てきて、救急車を呼んだ鮎川くんは状況を聞きながら手際よく、かつ慎重にゆきちゃんをストレッチャーに乗せる。

私はただ突っ立ったままその光景を見つめる。

大事な友達が大変な事態に陥っているのに泣いているだけで何も出来ない。

私も何かしてあげたいし、ゆきちゃんの傍に居たい。けど何をどうすればいいのかわからない。

自分がどう行動すればいいのかわからなくただ見ているだけ。

鮎川くんが色々してくれている。鮎川くんがこの場に居なければと思うと怖くなる。

様子を見ているとどうやら鮎川くんは救急車に乗っていくようだ。私はどうすればいいんだろう。ゆきちゃんはどこにいくんだろう。

このまま会えなくなってしまうんだろうか。それは絶対に嫌。

そんなことを考えていたら…… 「咲原も一緒に乗って」 鮎川くんが声をかけてくれた。

「私もいいの」

「当たり前だろ、早く」

隊員の人に私のことも話してくれたんだろうか。

今はそんなことはどうでもいい、それより早く行かなきゃ。私は急いで救急車に乗り込む。

車の中ではゆきちゃんが横になり隊員の一人が頭の止血をしたり、マスクのようなものをかぶせたりと忙しく手当てをしている。

鮎川くんは相変わらず救急車が来るまでのゆきちゃんの状態や、事故の状況を的確に隊員に話している。

その話をもとに別の隊員が受け入れ先の病院に連絡を入れている。私だけが何もできずにゆきちゃんを見つめ、ただ無事を祈るだけ。それしか出来ない。

心のかなで謝りながら。無事であるように祈り続ける。

車内から連絡しておいた病院に到着した救急車は、待ち構えていた看護師に誘導され緊急車両専用出入口口に移動する。

ストレッチャーに乗せられているゆきちゃんが車から降ろされ救急隊員から看護師に受け渡され、そのまま救急処置室に入っていく。私達はその処置室に入ることは許されないようです。そこで閉め出された。

扉は金属製のできていてとても大きく、閉まる時は「ガチャン」と辺りに響き渡る様な大きな音を立てる。それはまるで二つの世界を完全に隔離し、こちらの祈りさえも遮ってしまうような重々しさを持っているように感じてしまう。

そう、その扉が閉まってしまえば一切中をうかがい知ることなどできない。

私はゆきちゃんが心配で直ぐにでも中に入りたい気持ちを抑え扉の前でたたずむ。

看護師さんに様子を聞きたいがもう誰も居ない。

仕方なく私と鮎川くんは、その忌々しい扉の前にある長椅子に座る。

隊員の仕事はゆきちゃんを病院に届けたことで終わりのようで、私達に一声かけて帰ってしまった。

隊員の話では家に連絡したが誰もいなく学校の方に連絡をしたらしい。

ゆきちゃんはお母さんと二人暮らしで、この時間お母さんはお仕事に行っているはずだけど、私もお母さんの職場までは知らない。きつと学校から連絡してくれるだろう。

ゆきちゃんが処置室に入って20分ほど経っただろうか、扉が開く。二人の看護師がベッドにのせられたゆきちゃんをひいてどこかに移動するようだ。

私は思わず大きく息を飲み短い悲鳴のような声をあげてしまう。

「ゆきちゃんが……ゆきちゃんが」

ゆきちゃんの変わり果てた姿を見て、心臓が止まりそうになり、力なくつぶやくように名前を呼ぶ。

第23話 【文化祭】待合で

ゆきちゃんの口元には酸素マスクのようなものが付けられ、左前腕の外側の辺りはガムテープのようなものが巻かれそこからは太い点滴の管がのびている。さらに頭には大きなガーゼのようなものを貼られ包帯が巻かれている。

首から下は布団が被せられていて、どうなっているのか分からないが、見えている部分だけで十分痛々しくとても直視できない。

二人の看護師がそれぞれベッドの頭元と足元を持ち、ゆきちゃんをどこかへ連れて行くようだ。

「すいません、どこに行くのでしょうか」

二人のすぐ後に出てきた一人の看護師さんに鮎川君が聞いてくれた。

「今から頭部のCTとレントゲンを撮ります」

「ゆきちゃんはどうなんですか。大丈夫なのでしょうか。どうなんですか」

ゆきちゃんの変わり果てた姿を見て、気が動転した私は泣きながら、まるで懇願するように看護師に寄りかかる。そうしてる間にゆきちゃんはどこかに連れて行かれた。

「それを調べる為に今から検査をするのです」

看護師がうんざりしたように答える。

その口調と銀縁眼鏡の奥に見える切れ長の鋭い目が、いかにも仕事ができそうな感じと、きつい性格を表しているようだ。

「あまり騒がれますと他の患者様にも迷惑ですし、お友達にもよくありませんので静かにお願いします」

私の切羽詰った態度に気を悪くしたのか看護師からは冷静で突き放すような答えが返ってきた。

確かに看護師の言う通りかも知れない。だけど心配で心配で心臓が潰れそう。色々考えてしまうと同時に看護師に突き放された事で

また涙がでてきてその場に泣き崩れる。

「ですから私の言っていることを聞いていますか。静かにしてくださいと言っているのです。患者はあなた達だけではないのですよ」

看護師からはまたもやきつい言葉が出てきた。
救急医療現場にいる看護師にしてみれば、確かによくみる光景でうんざりするのもかもしれない。

きつとゆきちゃんのことなんて大勢いる患者の中の一人だと思っ
ているんだろう。

だけど私にとってゆきちゃんはたった一人。この世の中でゆきちゃんの代わりなんていない。それをこの人には分かってもらえないみたいだ。すごく悲しい。そしてこんな風に言われて悔しい。

大切な親友のゆきちゃんが私のせいで大怪我をして、こういう状態かもはつきりしない。

もしかしたらこのまま死んじゃうかもしれない。そんな最悪の事態を考えてしまっているのに……

いつまでも泣き止まない私に対して看護師が信じられない言葉を投げつける。

「いくら言っても無駄のようね。ほんと迷惑だわ。こんなところで泣いてるだけでしたら帰られた方がよろしいんじゃないですか？」

その言葉で思わず息を飲む。そして泣くのを我慢する。けどさすがに看護師の態度には怒りが込み上げて睨み返す。

「なんですか。私は当然のことを言っただけです。何か間違っていますか」

さらにキツイ口調で言われる。

いつもの気の弱い私ならそう言われると下を向いただろう。けど今は違う。あまりにも酷い看護師の態度に、ゆきちゃんをないがしろにされたような気になり逆に怒り大きくなる。

思わず立ち上がり、

「あなたの言っていることが正論だとは思えませんね」
え？思わず横を見る。

私が言おうとした言葉を鮎川くんが先に言ってしまった。

私の代わりのつもりなのか、鮎川くん自身も相当怒ったのか看護師に詰め寄る。

「なんですって、静かにしてくださいと言うのがおかしいことですか」

「静かにしろと言うのは分かります。ですがこの子が心配して泣いているのにその態度は看護師として失格じゃないですか」

「どうしてですか、その子がうるさいから迷惑だと言っただけです」
「そもそもそれがおかしいですよ、別に大声で泣いているわけでもないですし、心配だから様子はどうですか。と聞いただけじゃないですか」

「人の気持ちが理解できるならもっと労わりのある対応ができるんじゃないですか。あなたは看護師として失格とかいう以前に人として最低ですね」

鮎川くんが凄い剣幕でまくしたてる。看護師がわなわなと震えているのが見て分かる。

私は鮎川くんの袖を引き小声で言う。

（もういいよ、私も悪かったんだから。他にも患者さんがいるのも事実だし）

怒りに興奮した鮎川くんはまだ何か言いたそうだ。

私は自分の言葉を取られたような感じで拍子抜けしてしまい逆に冷静になってきた。

（あまり大声で怒鳴ったりしたら、それこそ他の患者さんにも迷惑だからもうやめて）

その言葉に鮎川くんが一つ息を吐き出し怒りを納めてくれた。

「何を騒いでいるんだ」

その声に振り返るとどこから現れたんだろうか、そこには大きな体の先生が怖い顔をして立っていた。

第24話 【文化祭】副院長先生

「何をしてるんだ。レントゲン室に行くんじゃないのか。患者は一刻を争うんだ早くしないか」

先生に怒られ、看護師は何か書類のようなものを持って、大急ぎでレントゲン室のあるであろう別館へと走って行った。

「看護師が何か失礼をしたようで申し訳ありません」

大きな体に少し出たお腹。それと白髪交じりではあるが綺麗にセツトしていて清潔感のある先生がいきなり深く頭を下げた。

私にとって病院の先生とは、威厳があつて尊敬すべき存在。その先生がいきなり頭を下げてきたので私はびっくりして言葉をかえす。「そんなことはありません。私が騒いでしまったので注意されただけです」

「いえ、話は聞こえていました。彼の言われるとおりです。あの看護師には後でしっかりと指導しておきます」

先生の名札を見ると名前の上に『副院長』と書いてある。

副院長ともなると人格も出来た人じゃないとダメなんだろうな。さっきの看護師は後でこの副院長に怒られるのかな？そう思うと少し申し訳ない気持ちになる。

「ここでしばらく待つていてください」

副院長は、おもむろにそう言つてあの厳重な扉の中へ入って行った。

私達には重い扉でも先生達にとってはただの扉なんだなあ。と心の中でなんとなくそんなことを考えながら待つていると先生はすぐに戻ってきた。

「担当の医師に聞いてきました。お友達は、意識がまだ戻っておらず予断は許ませんが、とりあえず命に別状はないとのことでした」
心配している私達を気遣つてゆきちゃんの状態を聞いてきてくれたようだ。

だけど先生の言葉をどう解釈していいのか分からない。

命に別状がないと言って安心していいのだろうか？

それとも意識が戻らないというのは相当ひどい怪我をしているのだろうか？

命は助かってもなにか後遺症のようなものが残るのだろうか？

「詳しくは、学校の先生が来られてから説明するそうですので、一緒に話を伺われるとよろしいでしょう」

「一緒に聞いても大丈夫なんですか？」

鮎川くんが先生に聞いてくれる。

「大丈夫ですよ。私から担当の先生に話しておきましたから。それからお友達もきっと大丈夫です。ですからお嬢さんも元気をだしてください」

私の方を見て微笑みかけてくれる。なんて優しい先生なんだろう。これほど私達の事を気遣ってくれるなんて、先ほどの看護師とは全然対応が違う。

感謝の気持ちがあるまま態度に出た感じで、私は深々と頭を下げながら何度もお礼を言う。

副院長がどこかへ行ったので私達はまた長椅子に座ってゆきちやんが検査から戻ってくるのを待つ。

副院長のお陰で、命に別状はないと分かって少しほっとした気持ちになる。

やっと涙が止まった気がする。

今日はどれだけ泣いただろう？ いや今日だけじゃない、この前からずっと泣いてばかり。

いったいどれくらいの涙を流したんだろう。

涙っていくら流しても枯れることはないのね……

第25話 【文化祭】岡田先生

少し安心した私は、長椅子に座り込んで検査が終わるのを待っていた。

正面玄関の方を見ると、丁度担任の岡田先生が血相をかえ病院に駆け込んでくるのが見えた。

私と鮎川くんは、病院の裏口から入った直ぐのところにある、救急処置室の前の長椅子に座っていたが、正面玄関までは一直線になっ
ていて、障害物もないので先生が入ってきたのがよく見える。

遠目からでも先生の慌てぶりがよく分かる。大声で看護師にゆきちゃんのことを聞いている。

ここからでは少し遠すぎて、私達から直接声をかけることは出来ないけど、あの様子だとすぐにこちらに向かつて来そうだ。

私も同じくゆきちゃんを心配しているけど、先生の慌てぶりは異常なほどで、それが滑稽に見えて思わず笑ってしまいそうになる。

先生が総合案内のところで、受付の看護師に何やら説明している
ようだけど、気が動転してるからか上手く説明出来ていないよう
でなかなかこっちに来ない。

きつと的を得ない説明で看護師さんが困惑しているんだろうな。
そう思ったので、迎えに行くべく立ち上がるうとしたその時、先生
がこちらを見た。

どうやらやつと看護師に救急処置室の場所を聞くことが出来た
みたい、こちらに向かつて小走りやってきた。

近くまで来て私達に気がついたようで、さらに驚いたようだ。
私達の前まで小走りで行くと、その勢いのまま息を切らせ
ながら、ゆきちゃんの状態やなぜ私達がここにいいのか、なぜ事故
にあったのかなど矢継ぎ早に質問をしてくる。

私達はこれまでの経過を丁寧に順序立てて説明する。

説明が丁度終わった頃にゆきちゃんが検査から帰ってきた。

「真下、大丈夫か」

先生がいきなりゆきちゃんに話しかける。しかしゆきちゃんの意識はまだ戻ってないようだ。

「看護婦さん、真下は大丈夫なのですか。どうなのでしょう。私の教え子なのです」

先ほどの看護師さんもいるが、副院長に注意されたばかりなので黙っている。

私は鮎川くんを少し上目遣いで見る。鮎川くんも私を見ながら苦笑いしている。

「先生、静かにしなきゃ。ここは病院だよ、他にも重病人がたくさんいるのだから気をつけて」

鮎川くんが先ほど私が看護師に言われたことを、看護師の方を見ながら少し嫌味っぽく言う。

「ああ、そうだったな、すまん。先生としたことがちょっと興奮しすぎだな」

「そうだよ。それにここの看護師さんはすごく怖いんだから、怒られるよ」

そう言いながら私の方を見て微笑む。

「そなのか」

そう言って先生は二人の看護師を交互に見まわす。看護師は黙ったままそっぽを向いて処置室に入っていた。

副院長の言葉を聞いた私達二人は、本当に救われたような気持ちになっている。

あの言葉がなければ未だに泣きつづけているだろう。

先生や看護師の態度や言葉は私達にとって大きな力を持つものなんだと改めて思い知る。

しかし先生の言葉だけで全てが安心できるというわけではない。言葉には出さないが、きっと鮎川くんも心配していると思う。ゆ

きちちゃんの意識がまだ戻らないことを。

検査も終わったようだし、先生も大丈夫と言ってくれた、けど未だに意識がないというのは凄く怖い。

言葉に出せない程怖い。言葉に出すと恐ろしいことになりそうで黙りこんでしまう。

一瞬和んだよう雰囲気になったけど、結局は現実を直視できずに意識を無理やりゆきちゃんから外しただけのこと。閉ざされた扉から何の反応もない、そんな時間がほんの数分流れただけで三人とも黙り込んでしまう。

また重苦しい雰囲気が漂う。

扉の向こうは一体どうなっているんだろうか……

第26話 【文化祭】ICU

時計を確認すると12時20分。

バタバタしていて時間の感覚があまりなかったが、病院に着いたのが確か11時頃だからもう1時間半近く経ったことになる。

処置室ではいったい何がなされているのだろうか。

ゆきちゃんの意識はまだ戻らないのだろうか。

時間が経てば経つほど不安が大きくなるばかりだ。鮎川くんも先生も俯いたままじつとしている。

裏口にある救急処置室の前といえども正面玄関とは一直線で、直ぐ近くには外来患者が会計をする場所があるため辺りはざわついている。

しかしこのほんの2メートル程の長椅子の上だけはまるで別世界の様に静まり返っている。誰も言葉を発しようとはしない。もちろん私も声を出せないでいる。

目を瞑りこれまでの出来事を思い返す。

私が朝ゆきちゃんとの約束を破って一人で出かけた。しかも学校にも行かなかったのでゆきちゃんが心配して私を捜しにあんなところに居たんだ。

私が約束を破ってしまった原因となる人物が隣に座っている鮎川くん。

私は鮎川くんが好きだった。そして葵くんの話だと鮎川くんも私を好きらしい。

それは凄く嬉しいことだけど、ゆきちゃんも鮎川くんが好きだったことを聞かされた。

それを聞かされたことによって、私はゆきちゃんから真実を聞くのが怖くて逃げ出したんだ。

だからこんなことになっているんだ。

ゆきちゃんは私が鮎川くんを好きなのを知っている。それでいて全てを話したいと言っていたのに。

話をちゃんと聞くべきだった。どう考えても私が悪い。

私がちゃんとゆきちゃんを家で待っていれば、こんな事故になんて遭わなくてよかったのに……

私のせいで車に轢かれたのに私は何もできなくて、鮎川くんが率先して動いてくれた。だからこうして 今病院にゆきちゃんを搬送し私達がここにいます。

ゆきちゃんごめん。意識が戻ったらちゃんと話を聞くよ。

ゆきちゃんが鮎川くんを好きなら私は、私は鮎川くんを諦める。

ゆきちゃんが事故に遭ったのは私が悪いんだから。

私、もう何もいらないよ。何も望まない。だからゆきちゃん早く意識を取り戻して。

それだけでいい。それ以外何もいらない。

早く元気になって。お願い。

ゆきちゃんさえよくなってくれたら私が死んでもいい。

だからお願い。意識を取り戻して。

「大丈夫か」

鮎川くんの声でふと気が付く、私また泣いていたんだ。

何か言いたいけど何を言えいいのか分からない……

そんな時、重い扉が開く音がする。

振り返るとベッドに乗ったゆきちゃんがいた。

まだ意識は戻っていないようだ。

看護師さんの話では、このまま入院するので今からゆきちゃんを別館の病棟に移すらしい。

別の看護師さんが親族の所在を担任の先生に確かめている。

だけど唯一の親族であるお母さんはまだ病院に来ていない。おそらく大急ぎで向かっているんだろうけど。

お母さんが病院に着くまでは、とりあえず担任の岡田先生が医師の話を聞くことになった。

副院長先生と一緒に聞いていい、と言ってくれていたけど、岡田先生は「後で説明するから一人で医師と話してくる」と言うので私達はゆきちゃんと病棟に行くことにした。

私と鮎川くんは先生と別れ、別館の5階までゆきちゃんと一緒にエレベーターで上がる。

エレベーターを降りると廊下が左右に伸び、右側には別館東棟、左側には別館西棟とか書かれたプレートが天井からぶら下がっている。

そしてエレベーターの目の前がナースステーションになっている。ゆきちゃんを載せたベッドはナースステーションの直ぐ右隣の病室、別館東棟のE501の個室だ。

部屋に掛かっている表札にはE501と書かれ、その下段にはICUと書かれている。

ICUというのは確か集中治療室のこと。そこは重篤の患者が入る部屋のはず。

ゆきちゃんは意識も戻ってないんだし、当然なのかもしれない……しかしICUなので外で待たされると思いきや、今度は救急処置室と違い一緒に病室に入るのを許された。

ゆきちゃんは乗ってきたベッドから病室のベッドに移され点滴や酸素マスクをつけたまま寝かされる。

看護師さんはゆきちゃんが絶対安静の状態なので気をつけるように言い残し病室を出て行った。

私と鮎川くんは、変わり果てたゆきちゃんをしばらく黙って見つめていたが、いつまで経つても全く無反応のゆきちゃんをベッドに残し、どちらからともなく病室の隅にあるソファに腰を掛ける。

第27話 【文化祭】病室内の様子

しばらく黙ったまま座っていると、鮎川くんが話しかけてきた。

「真下はどうなるんだろうな。意識がもどらないっていうのは心配だ」

「うん、早く気がついてほしい」

それだけで会話が止まる。

また重苦しい時間が流れる。私自身何を話していいか分からない。

「喫茶店」

鮎川くんがつぶやく。

「え？なに？」

「明日の文化祭で俺達のクラスは喫茶店をするだろ、明日の午前中は俺達4人で店に出る予定だったけど、どうなるんだろ」

「ゆきちゃんがこんな状態なのにそれどころじゃないよ。私はずっとここにいて、どこにも行かない」

当然だ。

ゆきちゃんが事故に遭ったのは私のせいなんだから、ゆきちゃん意識が戻るまでここを離れるわけにはいかない。

「ダメだ。明日はちゃんと学校に行くんだ」

いつの間に入ってきたんだろう、そこに担任の先生がいた。

「嫌です、私のせいでこんなことになったんですから、ずっとここにいます」

「ダメだ、お前達二人はもう帰って明日の文化祭にちゃんと出る」

「嫌です」

「桜ちゃん、優希は大丈夫だからちゃんと学校に行って、優希もその方が喜ぶと思うわ」

ゆきちゃんのお母さんが医師と共に病室に入ってきた。

お母さんを見たたんまた涙が出てきた。

「お母さん、ごめんなさい、私のせいでゆきちゃんが、ゆきちゃん

がこんなことになっちゃって」

私は泣きながら謝ることしかできなかった。

「私が約束を破ったから、だからゆきちゃんが心配して捜しにきてくれて」

涙が込み上げてきて言葉が続かない。

「ごめんなさい」

「桜ちゃん泣かないで、優希は大丈夫だから、だから今日はちゃんと家に帰って。そして明日文化祭に行つてね」

私は泣きながらうなずく。

「それじゃ私は今からお医者さんと話があるから、少しおもてで待つてくれるかしら」

「はい」

「よし、じゃあ鮎川も出るぞ」

先生が私と鮎川くんを伴って病室を出る。

私達3人は病室から少し離れた待合室のような場所で、ゆきちゃんのお母さんと医師の話が終わるまで待つことにした。

しばらくしてトイレに行くため席を立つ。

トイレから出た私は、まっすぐとは待合室に戻らずゆきちゃんの病室の前まで行く。

するとドアの前で看護師さんが何か作業をしている。キャスター付きのステンレスの台には色々な器材が乗っている。何をしているのかよく分からないけど、その作業のためドアが開いている。

カーテンがひいてあるので中の様子は見えないが、話し声は聞こえてくる。作業をしている看護師さんの横に立ち、話が終わるのを待つて風を装い、それとなく二人の話に耳を傾ける。

第28話 【文化祭】お母さんと先生

二人の会話を盗み聞きする。

「検査の結果、脳や体に異常はないんですね？では優希は大丈夫な
んですね」

「そうですね、CTを見る限り頭に異常は見られませんが、体の方
は右腕が骨折しているのと肋骨に少しヒビが入っている程度です」

「救急隊や事故の目撃者の話からすると、奇跡のような軽症と言っ
ていいと思います」

よかった。副院長先生の言った通りゆきちゃん大丈夫なんだ。
神様ありがとうございます。本当によかった。

「ただ、彼女の意識がまだ戻りません」

「私もそれが気になっていたので、CTの結果、脳には異常がな
いのですよね？だったら何故意識がもどらないのですか？」

「誠に申し上げにくいのですが、はっきり言いまして原因が分か
りません」

「わからない？検査をしたのに分からないのですか？ですからIC
Uに入っているのですか？」

「はい、検査の結果異常がないのに意識が戻らない、異常があれば
その部分のケアをする形で対応できますが、異常がないのに意識が
戻らないというのはどう対応していいのか」

先生が語尾を濁す。私はまた胸が締め付けられるように痛くなっ
てきた。

「今後何かあっても直ぐに対応できるようにとりあえずここ（IC
U）に入っていたきました」

やっぱりここは重病人が入る部屋なんだ。

私が約束を破ったからこんなことになちゃったんだ。ごめんなさ
いゆきちゃん。

自分を責めることでしか今のゆきちゃんに償いができない。

「では優希は今後どうなるのですか？」

「明日もう一度詳しい検査をします」

「はい」

「意識が戻らないということ以外は、検査の結果をみても何も問題ありませんので、もしかしたら5分後に意識が戻るかもしれません」
「そうなることを願います」

「しかし、逆に今まだ意識が戻らないということは、明日になっても戻らないかもしれません。いや、半年後、一年後も戻らないかもしれません」

ゆきちゃんの意識が一年後も戻らない？ どういうこと？ 検査の結果異常がなかったのにどうして一年も意識が戻らないの？

あまりにも衝撃的な先生の言葉で私は我を忘れて病室に飛び込む。

「先生、どういことですか？ 一年も意識が戻らないって！」

「なんだね君は？ 患者の友達か？ 今は親御さんと話しているから出て行って下さい」

「桜ちゃん、今先生と大事なお話しをしているの。少し待っていてくれる？」

「先生、ゆきちゃんの意識が戻らないってどういうことですか？ 教えてください」

私の叫び声で駆けつけた看護師さん数人が私を病室から連れ出そうとする。

「嫌、止めて、まだ先生に答えを聞いてないの、離して！」

私は更に大声で叫びながら看護師さんの手を振り払う。

「大人しくしてください、とにかく病室から出ましょう」

「嫌、嫌」

私は力いっぱい抵抗する。とその時

「桜ちゃん！」

ゆきちゃんのお母さんの優しくも力強い口調。

その重みのある声が私の耳に響いた。その声の静かな迫力に思わ

ず口をつぐみ、動きが止まる。

そして黙ってゆきちゃんのお母さんを見る。

お母さんは優しい笑みを私に向けながら言う。

「桜ちゃん、優希のこと心配してくれているんだよね。いいわ、こっちに来てここに座って、一緒に先生の話を楽しみましょう。でも少し静かにしてね」

私は黙ってうなずきソファに座っているお母さんの隣に座った。先生は私達の正面に丸椅子を置いて座りなおし、目配せをして看護師を退室させた。

そしてお母さんが私に説明するような形で先生に確認をする。

「では、今の所の検査では異常が見られないため、明日もう一度精密検査をするということですね」

「そうです、それで意識の戻らない原因を探ります。ただ事故で受けた脳への衝撃などにより、見た目では異常がなくても異変が起きている場合があります」

一瞬声をあげそうになったが、私は涙と声を押し殺し、俯いたまま黙って話を聞いた。

「今の医学では、脳に対してまだ分からないことが数多くあり、全ての原因究明がなされるとは限りません。しかし私どもで最善は尽くします」

医師の言葉は一つ一つがあまりにも残酷で、とうとう耐え切れなくなり、また嗚咽をあげる。

「説明はよく分かりました。私としては先生に全てを委ねるしかありません。よろしくお願いします」

先生は力強く頷き病室を出て行った。

私がまた泣きだしてしまっただろうか、お母さんは先生との話を打ち切ってしまった。

かろうじて声だけは出さないよう我慢しているが、涙は止まらない。

そんな私をお母さんが優しく抱きしめてくれる。

「桜ちゃん、ありがとうね。病院まで付き添ってくれて、そしてこんなに優希のこと心配してくれて」

違う、私は何もしてない。ここまで連れて来てくれたのは鮎川くん……

そう思っても何も言葉に出来ず、大きく頭を振るだけでただ泣き続ける。

お母さんは、さらに強く私を抱き寄せ優しい手で包み込む。

その母性に張り詰めた気持ちが崩れてしまい、大声を出して泣きだしてしまう。

お母さんはそんな私をいつまでも優しく抱いてくれた……

第29話 【文化祭】ゆきちゃんの過去

しばらくすすり泣いていたがだんだんと落ち着いてきた。

頃合を見計らったようにお母さんが話しかけてくる。

「もう泣かなくていいのよ、優希は大丈夫だから」

「でも先生が言ってた、意識がいつ戻るか分からないって」

「大丈夫よ、桜ちゃんがこんなに心配してくれているんだもの、優希だっていつまでも寝ていられないわよ」

「でも…」

「優希にとつて一番の親友は桜ちゃんよ、その一番の親友を悲しませるようなことをする子じゃないわ。大丈夫きつと直ぐにでも意識が戻るわ」

お母さんが私の心を少しでも癒そうと話してくれているのはよく分かる。

だけど今の状況を作り出した原因は私にある、そのことをお母さんは分かっているのだろうか。言わなければならないと思うが言い出せないでも、お母さんはそんな私の思いを分かっているかのように話を続ける。

「優希もバカね、桜ちゃんが自分を責めるような事故に遭うなんて悪いのは信号無視をした優希自身なのに」

「違います。私がゆきちゃんとの約束を破ってあんなところに居たから、だから心配して来てくれたんです。ごめんなさい」

「桜ちゃんが謝ることないわよ、担任の先生に事情は全部聞いたけどこの事故に対して桜ちゃんが悪いことはないんだから」

私はなんて言えばいいかわからず黙ったまま俯く。

「優希はね、子供の頃凄くお父さん子だったの」

お母さんが突然ゆきちゃんの子供の頃の話始める。

「優希が小学校から中学にあがるときの春休みにお父さんが癌で入院したの、既に癌で何度も入退院を繰り返していたのだけど、主人

は最後の入院と覚悟をしてたみたい」

「入院して数日が過ぎたある日、優希はお父さんが心配だから病院に泊り込むと言いだしたの。皆がダメだと言ったのだけど優希も何か感じるものがあつたのか、心配だからと言って聞き入れなくて、結局泊り込むことになったの」

いつも冷静なゆきちゃんでもやつぱりそんな時は我を通したりするのね。

「その日まで病状は落ちついていただけど、優希の泊まったその初日の夜遅くから急変して、そのまま亡くなってしまったの」

「優希は、病状が急変したのは自分が無理に泊まったせいだと思い込み。お父さんを死なせたのは自分のせいだと言ってずっと塞ぎ込んでいたわ」

ゆきちゃんのお父さんが病気で亡くなったとは聞いていたけど、そんなことがあつたなんて……

「それで中学一年の時は殆ど学校にも行かずに部屋に籠りつきりだったの。私も主人が亡くなって生活に必死だったので、なかなか優希をみてやれずに辛い思いをさせてしまったわ」

「いつの頃からか夜中に歩くようになり、ろくに家に帰らないような生活が続いたわ。私も注意はするけど仕事に忙しかったので何もしてやれなかった。そのことは今でも申し訳なく思っている。一番辛い時期に母としてそばに居てあげられなかったのよ」

「でもそれはお父さんが亡くなったことで生活が苦しかったから……」

「……その為にお仕事でいそがしかったからでしょ？」

「そうなんだけど、自分のせいでお父さんが死んだと思っていた優希には、そんなことよりも心のケアが必要だったのよ。私はそれに気づいてあげられなかった」

「それは私自身、主人の死が辛くてそれから逃げる為に夢中で働いていたような部分もあつたから……優希もそれをうすうす感じていたのだと思う」

「そうなんですか」

「優希への対応にどうすれば良いのか分からず、私自身カウンセリングを受けたの」

こんなに立派なお母さんでもいろいろな悩んでいたのね。

「そのお陰で優希が中学2年の夏過ぎから私もいろいろなケアしてあげられるようになったわ。そうすると少しずつだけど学校に行ってくれるようになって、3年になった頃には、まだ休む日も多かったけど高校を受験して合格してくれたわ。もともと勉強はよく出来た子だったから」

今でもゆきちゃんはずごく勉強ができる。私が必死でテスト勉強してもゆきちゃんには敵わない。

「それでもやっぱりどこか暗くて以前のような優希ではなくなってしまっていたの。親子の会話も殆ど無かったしね。話しかけてもいつも返事も無く、私を避けているようだった」

「ゆきちゃんにそんな過去があつたなんて……私の知ってるゆきちゃんは優しく、思いやりがあつて、頼りがいがあつて、頭がよくて。あげればきりがなくくらい良いところばかりです。そんなゆきちゃんに私はいつも助けられてばかりです」

「優希が今、桜ちゃんが言ってくれたような思いやりのある人間に戻ったのは、桜ちゃんと出会ったからよ。桜ちゃんと出会った日から優希は変わったわ」

「出会いですか？」

そこで少し考える。ゆきちゃんと出会ったのは高校に入る前の春休みだ。はつきりと覚えてる。

でも……それで何か変わるような重大な事があつたような記憶はない。

「高校に入る前の春休み、私は公園で野良犬に襲われそうになっていたのを助けてもらいました。それがゆきちゃんとの出会いでした」
やっぱりそれ以外何か重大な事があつた記憶はない。

「春休みに出会ったゆきちゃんと、高校1年で同じクラスになった時は驚きました。そしてそれ以来ずっと世話をかけてばかりで。い

つかお返しがしたいと思っていたのにこんなことになってしまつて・

・・」

また泣きそうになってくる。

「桜ちゃん、初めてあつた時に助けてもらったのは優希の方よ、そして私もあなたに助けられたわ」

どういうこと？

あの時は野良犬に襲われそうなところをゆきちゃんが助けてくれたはず。私が助けたんじゃない、私が助けられたんだけど……

どうしてゆきちゃんを助けたことになってるんだろう？ましてやお母さんまで助けたとはどういうことなんだろう。

第30話 【文化祭】ゆきちゃんの過去2

「どうして私がゆきちゃんを助けたことになるんですか？私の方が野良犬から助けてもらったんです」

そう言つと、お母さんは瞼を閉じ俯きかげんでゆっくりと首を振り、そして私の目をしっかりと見つめ直す。

「あの頃、まだお父さんのことを引きずったままの優希だったけど、あの日桜ちゃんに出会ってから変わったのよ」

どういうことだろう？

「後で優希から聞いた話だけど……」

そう言つてその頃の話をしてくれる。

「あの日ね、優希は道端に一羽の小鳥を見つけるの。その小鳥はよく見ると文鳥で死んでいるようだった。きつとどこかで飼われていたんだらうけど、逃げ出してしまったみたいね」

「道端で死んだまま放置されてるのはかわいそうと思ったみたい。でも当時まだ心がすさんだままの優希は、その小さな文鳥に対してまで素直になりきれず通り過ぎてしまったの」

「だけどどうしても文鳥が気になる優希は振り返るの、するとそこに泣きながらその文鳥を抱きかかえる女の子を見つけるの」

「優希は飼い主が見つけたと思い胸をなでおろすの」

「そして、その子を目で追つと、前の公園に入っていき辺りをキョロキョロ見回し、何かを探しているようだったらしいわ」

「不審に思い後をつけてみると、その子はある場所で穴を掘り出したの、どうやら文鳥のお墓を作るみたいと思ったその時、文鳥を足元において穴を掘っているその子の前に2匹の野良犬が現れるの」

「その子は文鳥を抱えあげて守ろうとしたらしいわ。だけど犬に吼えられ今にも泣き出しそうになり、足元は震えていたみたい。でも文鳥を守るためしっかりと抱き抱えたまま放そうとはしなかった」

「それを見ていた優希は犬目掛けて思いっきり石を投げるの、するとたまたま上手く石が一匹の犬に当たったらしく犬は鳴き声をあげて逃げて行つたの。一匹が逃げたことでもう一匹も釣られるように逃げて行つたらしいわ」

「その時の犬に襲われそうになってた女の子が桜ちゃんよ」

「そうだ、確かにお母さんの言う通りだった。だけど、それがどうしてゆきちゃんを助けることになるの？」

「今聞いても私が助けられただけの話にしか聞こえない……」

「その後、犬を追い払った二人は一緒に穴を掘るよね？道具も何もなくその辺りにある石や素手で一生懸命掘ったよね」

「そう。ゆきちゃんも手伝ってくれて一緒に穴を掘った。」

「その時二人で話した事を憶えている？大事な話をしたのよ。それまでずっとすさみ切っていた優希の心を救うようなとっても大事な話を……」

「何を話したんだろう？覚えてない。文鳥の話をしたような気はするけど、何か重大な会話をしたような記憶はない。」

「何を話したんですか？私、はつきりと憶えてなくて。ごめんなさい」

「いいのよ、桜ちゃんにすれば普通の会話だったのだから憶えてなくても無理はないわ、その時の二人の会話はね……」

第31話 【文化祭】二人の会話

「その時の二人の会話はね・・・」

穴を掘りながらの二人の会話

「助けてくれてありがとう」

「あんた名前はなんて言うの？」

なきはらあつか
「咲原桜花」

「桜花か、私は真下優希^{ましたゆうき}」

「ゆきちゃんね」

「その文鳥あんたのか？」

「違うよ」

「そうなのか？泣きながら抱き抱えてたからあんたのかと思ったんだけど」

「あんな所に放置されたままだと可哀相で」

「それで泣いてたのか、優しいんだな」

「死んだおばあちゃんが言ってた、人は死んでも魂はいつまでも生きてるって。きっと文鳥だって同じだよ。だからこの子も天国から自分のこと見てるはずだよ」

「そうか」

「そうだよ、だからあんな所にいつまでも放置されたままだときつと悲しんでるはずだよ」

「そうかもしれないな」

「おばあちゃんも天国からいつでも私を見てくれるの。だからいつも良い子だって褒めてくれてたおばあちゃんを悲しませるような、そんな人間にならないようにいつも気をつけて・・・」

そこまで話していると突然優希が泣き出す。

「どうしたの？ゆきちゃんどうして泣いてるの？何か悲しいことあ

「つたの？大丈夫？」

「大丈夫だよ」

「じゃあどうして泣いてるの？私何か悪いこと言っちゃった？」

その問いには答えず優希が話す。

「私にもね、私を見守っていてくれている人が天国にいるんだ。でも私は悲しみのあまり今の今までそのことを忘れていたみたい。そして私はその人を悲しませるようなダメな人間になってしまっていた」

「そんなことないよ。だってゆきちゃんは今こうしてこの文鳥のために一緒にお墓を作ってくれてるじゃない。こんなことしてくれる人がダメな人のはずないじゃない」

「ありがとう、あんたは優しいね」

「ゆきちゃんだって優しいよ。野良犬から私を助けてくれたし。何度とも言っただけどうして文鳥のお墓を一緒に作ってくれてる。ゆきちゃんの方がずっと優しいよ」

優希は首を振る。

「自分でも本当はもう分かってるんだ。お父さんが死んだのは仕方のないことだって。お母さんが生活のために一生懸命働いてくれたことも、悲しみのせいにしてお母さんを傷つけていたことも、今ではみんな分かっている。だけど自分でもどうしていいか分からずに全てから逃げてた。たった一言素直に謝ることさえできずに……」

泣きながら話す優希を桜花が抱きしめる。

「とつても悲しいことがあったんだね。だけどゆきちゃんの本当の優しさを、お父さんは知ってるはずだよ。今こうして泣きながら話してるのもきつと見てる。もし今までお母さんを傷つけてたとしてももう大丈夫だよ。そのことを後悔しているってことは、これからまた元の優しいゆきちゃんに帰れるってことだよ。今日家に帰ったらきつと素直に今までのことを謝れるはずだよ」

「そうだな、ちゃんと謝って、これからは今まで迷惑かけた分を取り戻さないと天国にいるお父さんに叱られるな」

「そうだよ、だからもう泣かないで、これからが大切だよ」
そう言った桜花の目にも涙が溢れてる。

「どうしてあんたが泣いてるんだよ」

「ごめん、私泣き虫で……」

「あんた、名前は桜花だったよね？桜って呼んでいいかい？」

「うん、いいよ。私もゆきちゃんって呼んでいい？」

「いいけど、桜はさっきから私のことゆきちゃんって呼んでるじゃないか」

「あつ、そうだったね。ごめん」

「よし、墓もできたし私はそろそろ帰るわ」

「うん、お墓作るの手伝ってくれてありがとう」

二人は笑顔で言葉を交わす。

「そうだ、桜は中学生か？」

「私はこの春から高校生になるんだよ」

「そうか私と同年だな、私は中之島高校に入るんだ」

「そうなの？私も同じ中之島だよ」

「じゃあ同じ高校だな、これからよろしくな」

「こちらこそよろしくね」

そう言って二人は別れる。

第32話 【文化祭】一言

「それが二人の会話だったのよ」

「あの日の夕方家に帰ってきた優希が突然私に話しかけてきたの、主人が亡くなってからの3年間、そんなことは一度もなかったからびっくりしたわ」

「それだけでもすごい驚きだけどその優希が突然今までのことを『ごめん』と言っただけだったけどそう言っただけで謝ってくれたの」

「今までずっとお互いギクシャクしていたから優希にしてみれば精一杯の一言だったと思う、でもその一言に全てが詰め込まれているのはよく分かったわ」

「私は優希が元の優しい優希に戻ってくれたと確信したわ。その日はあまりの嬉しさに眠れなかったのを今でも覚えているもの」

「言われてみれば、確かにあの日ゆきちゃんとそんな話をしました。すっかり忘れていたけどゆきちゃんは泣きながらお母さんを傷つけたことを後悔していましたよ」

「そうね、だから優希が元に戻ったのも桜ちゃんのお陰よ、それによつて私も救われたわ。本当にありがとう」

「いえ、そんな、私何もしてません」

「私たち親子は桜ちゃんに助けられたのよ。その大恩ある大好きな桜ちゃんを、いつまでも悲しませるようなことを優希がするはずないわ」

「でも……先生がもしかしたら一年経っても意識が戻らないかもしれないって言っていました」

「優希はもう昔の優しい優希なのよ。だから桜ちゃんを安心させるために直ぐに目を覚ますわよ」

「とにかく明日は文化祭でしょ？ちゃんと学校に行くのよ。だから今日はもうお家に帰りなさい」

「でも、ゆきちゃんが心配で……」

「大丈夫よ、私がちゃんと看ているから桜ちゃんは安心して帰って。もし泊まり込んだりして桜ちゃんが体調を崩すと、目覚めた優希が桜ちゃんに申し訳ないと言って気にするから。だから今日はちゃんと帰って」

お母さんにそこまで言われると帰らざるをえない。

「分かりました、今日はもう帰って明日の文化祭もちゃんと行きま
す。でも明日文化祭が終わったら直ぐにここにきてもいいですか」

「もちろんよ、その頃には優希も意識が戻っているだろうから文化祭の話でもしてあげてね」

「はい、分かりました」

「咲原こんなところに居たのか。みんなの迷惑になるしもう帰るぞ」
先生が私を捜しに病室まで来たようだ。

「はい」

そう言って私と鮎川君は病院をあとにした。

願いは一つ。早くゆきちゃんの意識が戻りますように。

第33話 【文化祭】 逸る気持ち

「おはよう」

教室に皆の元気な声が響きわたる。

普段は勉強をするだけの教室が、今日は喫茶店に装いを変え皆の心を軽くしているようだ。

皆楽しそうにしている。凄く元気がいいけど、私と鮎川君は暗い面持ちだ。

「今日文化祭が終わったら病院にいくんだろ」

鮎川くんが声をかけてくる。

「もちろん行くよ」

「俺も行くから一緒に行こう」

「うん」

「昨日は大変だったらしいわね」

振り返ると、委員長がこれもまた暗い面持ちで話しかけてきた。

「委員長はゆきちゃんのこと知ってるの？」

「先生に聞きました。でも他の生徒達は全く知らされていませんけどね」

「真下さんのことが心配でしょうけどとにかく今日は文化祭だから頑張ってる」

「うん、分かってる」

ゆきちゃんのお母さんとも約束したので、ちゃんと最後までいきやいけない。

「桜花ちゃん、心配ないよ。優希のことだからもう元気になってるよ」

葵くんには鮎川くんが昨日のうちに話しておいたらしい。今回のことは葵くんが悪いわけじゃないけど、なんとなく今までのような感じで話せない気分だ。

先生が来て本日の注意事項など一通り話し終え9時きっかり文化祭が始まった。

ゆきちゃんの代わりに委員長が勤め、私達は午前の部の喫茶店を営業させた。

午後は自由時間となりそのまま委員長を含めた4人で学内を見て周った。

私としてはすぐにでも病院に駆けつけたかったけど、ちゃんと最後までいると約束をしたから帰ることはできない。

他の3人はそれなりに楽しんでいるように見える。

だけど私はどうしても意識がゆきちゃんのことばかりになってしまつて、うわべだけの笑顔さえ出せないでいた。

何度も何度も時計ばかり見ていた。時計を見た数だけ時間が早く過ぎるなんて事もないのに…… どうしても見てしまう。

やっと3時になった。

「3時になったよ、そろそろ教室に帰って片付けをしましょ」
私の一言でみんな教室に戻る。

後片付けをしながらも気が急ぐ。

焦っても時間が早く流れてくれるわけじゃないのに、どれだけ早く片付けても4時になるまで学校から出れないのに。

ただどうしても動きが早くなる。

早く片付けて早くゆきちゃんに会いたい。

きつともう意識が戻ってるはず、だよ。そう願いながら。

4時前に担任の先生が教室に戻ってきて本日の文化祭の終わりを告げる。

解散した瞬間に私は駆け出し、自転車に乗ってわき目もふらず大急ぎで病院に向かう。

病院に着き自転車を止め駆け足で別館に入りエレベーターまで来たところで思いだす。

鮎川くんと一緒に来る約束をしたことを。

慌てていたのですっかり忘れていた…… 思わず振り返るが鮎川くんの姿があるはずもなくどうしようか悩む。

ゆきちゃんの事は気になるけど、約束を破ってしまったのも気になる。

もともとゆきちゃんが事故に遭ったのも私が約束を破ったからだ。約束という事に関してすごく敏感になってしまっている。

病院を出て表通りまで戻るが鮎川くんの姿はない。

その場で少し考えたが、鮎川君との約束よりもやはり今はゆきちゃんのこのの方が気にかかる。

私はまた思い立ったように駆けだし病室に向かう。

別館に入ったところでエレベーターに乗り込む人達が見える。

私は大急ぎで駆けつけ続いて乗り込む。

病人のことを考えてのことだと思うが、病院のエレベーターは昇降するのが遅い。

気が急いている今はさらに遅く感じる、しかもこの時間は人の出入りが多い時間帯なのか、各階に止まり乗り降りする患者や看護師、面会人で混雑している。

3階まで上がってきたところで我慢ができなくなり、エレベーターを降りてすぐ隣にある階段を使う。

階段には看護師や看護師達がたくさん上り下りしていてこちらも結構混雑していた。

その人達をかわしながら、5階まで一気に駆け上がりエレベーターを見る。

と、丁度エレベーターのドアが開いた。結果はどちらでも同じだったようだ。息があがって疲れただけだったみたいだ。

焦るらなくてももうすぐそこにゆきちゃんがいる。そう自分に言い聞かせ病室に向かう。

ここまで来たらもう目の前だ。はやる気持ちを抑え、息を整える為あえてゆっくり歩く。

病室の前で深呼吸を一つして病室のドアを……

開けようとしたが手と体、そしてなにより心が震えて開けることができない。

ゆきちゃんの意識は戻ったんだろうか？もし戻ってなかったら。そう考えると怖くてドアの前で固まってしまったまま動けない。ドアに手をかける勇気がでない。

もう一つ大きく深呼吸するが震えが止まらない。

学校にいる間は早くゆきちゃんに会いたくて、それだけを考えて時間が過ぎるのを待っていたのに、いざ病室の前に来ると会う勇気がでない。

意識が戻っていると信じていたのに、思考が悪い方によってしまっている。

そのとき病室から話し声が聞こえた。女性の声だ。ゆきちゃん！

第34話 【文化祭】まだ…

そう思った瞬間勢いよくドアを開け病室に飛びこむ。

「ゆきちゃん！」

私の声に看護師さんが驚いたように私を見る。

私は看護師さんの視線を無視し、ゆきちゃんの傍までいきのぞき込む、ゆきちゃんはまるで眠っているような穏やかな顔をして目を閉じたままだ。意識は戻ってないのだろうか？

チラリと看護師さんの顔を窺^{うかが}う。

「あの、点滴を変えにきたのですがまだ意識が戻らないようなので少し声をかけていたのです」

私が、声が聞こえたけど？と言いたげに看護師さんを見たのが分かったのか、看護師さんが自分の行動を説明する。

申し訳なさそうな声なのは、きっと私が睨みつけるように見たに違いない。

一瞬ゆきちゃんの意識が戻ったんじゃないかと期待して裏切られたから。

だけど看護師さんに何の罪も無いのに睨みつけてしまうなんて。

「ごめんなさい、看護師さん話しかけてくれていたんですね」

「早く意識が戻るといいですね。みんなそう願っています」

「ありがとうございます」

点滴を付け替えた看護師さんが病室を出ていき病室には私とゆきちゃんだけだ。

「ゆきちゃん、私よ、分かる？お願い返事をして。私が悪かったから、約束を破った私が悪かったから、私が悪かったのはもう十分わかったから、だからお願い。返事をして。早くまたあの優しい笑顔を見せて、でないと私もう…」

二人きりになったことで誰に遠慮することも無く私はまた声を出して泣きだしてしまった。

「咲原」

名前を呼ばれ涙を拭きながら振り向くと、そこには鮎川くんの姿があった。

「鮎川くん、ごめん。約束してたのに焦っていたいから、学校を飛び出してここまできちゃった」

「いいよ、その気持ち分かるから。それより真下の意識はまだ戻っていないようだな。辛いのは分かるけどあまり自分を責めるなよ」

私は俯いたまま返事ができない。

自分を責めるな、と言う言葉に頷いてしまつと罪から逃れてしまふような気がして。

でもそんな責任を感じてしまっている私を、少しでも楽にしてくれようと言ってくれた、鮎川くんの思いやりのある優しい言葉が嬉しかった。

頷くことはできないけど、私は泣き顔のまま精一杯の笑みを鮎川くんに返す。

「もう泣くなよ」

「うん」

鮎川くんの優しさが辛い。とっても嬉しいのに何故か胸が痛む。

第35話 【文化祭】病室で…

私と鮎川くんはゆきちゃんの眠るベッドを挟んで向かい合わせに立っている。

じつとゆきちゃんの様子を窺うっていたが視線を感じ鮎川くんを見る、と鮎川くんがあわてて視線を逸らす。

またゆきちゃんに視線を落とすと鮎川くんの視線を感じる。

「どうしたの？私の顔に何かついてる？」

「いや、そんなことはないよ」

鮎川くんの視線が熱く感じられる、私は何故か恥ずかしくなってきたのでソファーに移動した。

すると追いかけるように鮎川くんが私の座るソファーの目の前に来る。

「な、なに？」

なんだろう…… あんまり近づいて見られると恥ずかしい……

鮎川くんは無言のまま私を見ている。私の鼓動が早くなっていくのが分かる。

迫る鮎川くんから逃れるように、私は慌ててまたゆきちゃんの傍に戻ろうとし立ち上がる。

「咲原」

鮎川くんの何か切羽詰ったような裏声交じりの大声にビックリし思わず返事をする。

「はい」

「そこに座って」

「はい」

どうしたんだろう？鮎川くんがなんだか変。真剣な眼差しで見られて激しく緊張する。

さっきから胸の鼓動はどんどん早くなるばかり。頭の中では踏切の警告音のようなものが鳴り響いている。

「咲原、今から俺が言うことをちゃんと聞いて欲しい、知っていることもあるだろうし、びっくりすることもあるかもしれない」

「はい」

踏切の警告音が早鐘のように頭の中に響き渡る。

鮎川くんの真剣な眼差しに、なんとなくだけどこの後の展開が想像され激しく緊張してきている。

「俺自身もつと早くにいうべきだったと思ったたりもするが、こういうことはなかなか言い出せないのだということも分かって欲しい」

「はい」

鮎川くんが何を言おうとしているのか分かるような気もする。

それを考えた途端緊張が極限まで引き上げられ息苦しくなる。

「俺がこういう気持ちになったのは…… そんなことどうでもいいか、それよりも咲原は真下がこんな状態になっているのに！と思うかもしれない」

「はい」

だんだん周りが白く輝いて目の前の鮎川くん以外色を失っていく。

「咲原の気持ちを考えずこんなことを言おうとしていいのかとの葛藤もある、だけど真下がこんな状況だからというのものもある」

「うん」

ドキドキはおさまることなく今も激しく動揺している。そのせいか鮎川くんの話がよく分からなくなってきた。

「真下と約束をしたからというのもある。だけどそれだけじゃない、俺自身いつか言いたいと思っていた。彰弘に遠慮していた部分もあったけどいずれ俺が、と思っていたのも事実だ」

だんだんと頭は混乱し、目の前までが白い光に覆われはじめ何も考えられなくなってきた。

熱っぽくなつて頭もぼーつとしてきた。

鮎川くんの言い回しに何が言いたいのか、何を言おうとしているのか理解できなくなってきた。

「咲原」

私の名前を呼んで鮎川くんが大きく息を吐き出す。その息が私の前髪を揺らす。

「はい」

私の目の前は真っ白な光に包まれまともに前が見えない。頭も痺れるような軽い痛みを感じる。

声だけがかろうじて耳に届く、しかし緊張のあまり気分が悪くなってきた。

「俺は、ここ数日色々考えた結果を今から話そうと思う。咲原がその話をどう思いどう感じるかは分からない。だけど聞いてくれ」
真っ白い光に包まれた目の前がぐるぐる回っている。もう限界…

… 鮎川くんの言葉も殆ど聞き取れない。

「俺は……」

第36話 【文化祭】委員長が！

「ちよつと！いい加減にしなさいよ！」

物凄く大きな罵声にびつくりし心臓が止まりそうになる。

しかしその声で私の視界が元に戻る。

見るとドアのところに委員長が仁王立ちしている。

「鮎川くん、さっきから黙って聞いていたけど何をぐちぐち言うてるの！言いたいことがあるならハッキリ言いなさいよ」

普段の委員長からは想像の出来ない剣幕に、鮎川くんも面食らったようにキョトンとしたま何度も頷いている。

「あなたがハッキリ言わないから咲原さんが辛そうにしているですよ」

「え？ああそうだな。咲原大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ」

「そうか・・・」

また言葉が途切れる。

「鮎川くん言いたいことあったんでしょ？言わないの？」

「え？今か？」

「今言わないでいつ言うのよ」

「だけど」

「私が邪魔だつて言うの？」

「いや、そうじゃないけど」

「じゃあ早く言いなさいよ。いつまでもこのままじゃあ話が進まないわよ。ドアの陰で中に入りたいのに入れないでずっと待ってたのよ」

「うん」

と言ったきりまた鮎川くんは黙ってしまった。

「もう、じれったいわね。咲原さんが好きなら好きとさっさと言いなさいよ。簡単な事でしょ」

「なっ、委員長なんてこと言っただ」

「あら、違うの？私間違ったこと言っただ？もしかして鮎川くんは咲原さんのこと嫌いだったの？」

鮎川くんが慌てて私の顔を見る。私は恥ずかしくて鮎川くんの視線から逃れるように俯く。

「委員長が変なこと言うから咲原が困ってるじゃないか」

「困っているのはあなたがはつきりしないからよ、いつまで待たせるのよ」

二人のやり取りを聞きながら早くこの緊張感から逃れられないかと考えていた。

ドキドキが激しくて胸が痛い。鮎川くんが私を好きだっていうのは葵くんからも聞いていたけどこの緊張感に耐えられない。

でも委員長ってこんな激しいタイプだったかな？

なんだかゆきちゃんみたい…… そんな事を考えながらゆきちゃんのベッドを見つめる。

そして意識をゆきちゃんに移すことでこの緊張感から逃れようとする。

ゆきちゃん、早く起きて……

第37話 【文化祭】 ついに！

「咲原、俺、咲原のことが好きなんだ。だから付き合って欲しい」
ゆきちゃんに集中しかけていた意識を引き戻すには、十分すぎる
鮎川くんの告白だった。

委員長が入ってきた事でもうこの話は終わるのかな？と思っていたので告白の言葉を聞いて固まってしまった。

でもそんなことより、ゆきちゃんの意識がまだ戻っていない状況では、鮎川くんの言葉を素直に聞けない。

「ありがとう、だけどゆきちゃんの状態が」

「それは分かっている」

私の言葉を遮るように鮎川くんが言葉をかぶせてくる。

「さっきも少し言っただけど、この告白は真下との約束でもあるんだ」

「どういうこと？それに私はまだゆきちゃんの本当の気持ちを聞いてないの」

「それは知ってる、それも含めて約束なんだよ」

鮎川くんの言っていることが全く理解できない。

「何を知ってるの？約束って何？」

「私が説明してあげるわ、さっきから鮎川くんの話はまどろっこしくて、咲原さんに全然伝わってないから」

「え？ああ、そうか。そうだな頼む」

「まず、真下さんは鮎川くんのことを恋愛感情では全く見ていないのよ、それは私も含め、教室にいた全員が聞いているわ、そしてその証明として、鮎川くんに今日告白するように頼んだのよ。真下さんの言っていることが本当だって信用してもらえるようにね」

「ゆきちゃんがそんなこと言ったの？皆のいる前で？」

「そうよ、昨日咲原さんが来なかった朝の教室で、大声で怒鳴るように話していたわ、だから教室にいた私も全部聞いたってわけ」

鮎川くんが話に割って入ってくる。

「咲原、この告白は俺自身したいと思っていたものだ、決して真下に言われたからというわけじゃない。だけど今日告白したのは、真下が今日は咲原の誕生日だから今日にして欲しいと言ったからなんだ。そして今はそのベッドで寝ているけど、真下が文化祭で告白の場所をセッティングしてくれると、そこまで言ってくれたから」

ゆきちゃんと鮎川くんの間で、そんな話が出来ていたなんて全然知らなかった。

「だから真下のためにもどうしても今日告白したかった、そしてこれだけはちゃんと聞いてくれ。真下は俺のことなんてなんとも思っていないし、俺と咲原が付き合うことを本当に望んでいるようだ」

「鮎川くんが咲原さんと付き合いたい一心で嘘を言ってるわけじゃないわよ。全部本当の話よ、私の目にも真下さんはあなた達二人が付き合うようになることを望んでいたように見えたわ」

だまって聞いてたけど、鮎川くんは嘘をつくような人じゃないし、委員長までがそう言うのならきつと本当なんだろう。

私も鮎川くんのことは本当に好きだからこんな幸せなことはない。けどたとえ二人の話が本当だとしても、ゆきちゃんがこんな状態なのに私だけ幸せになっていいのだろうか。

正直ゆきちゃんの意識がいつ戻るのか、考えたくは無いけどこのまま戻らないかもしれないのに、こんな状況で鮎川くんの告白をうけていいのだろうか。

「咲原？」

「あつごめんなさい」

私が黙り込んでしまったから心配になったんだろう、鮎川くんが回答を求めるように私の名前を呼ぶ。

「私も鮎川くんのが好きです。だけどゆきちゃんが大変なこんな状態では、とても鮎川くんの言葉を受け入れられるような気持ちになれません」

「そうか、それはそうだね」

ゆきちゃんのこと心配だからだろうか、鮎川くんが好きとさら

りと言えた自分にびっくりする。

だけど鮎川くんの悲しそうな顔を見ると辛い。

鮎川くんに告白されて嬉しいはずなのに何故か涙が出てくる。

こんな状況じゃなければ……

私も鮎川くんのことが大好きで私から付き合っ
て欲しいとお願い
したいほどののに。

先ほどまで元気だった委員長も、
さすがに大人しくなり神妙な顔
をして私達の会話を見守っている。

第38話 【文化祭】だって…

「あらあら、また泣いちゃったの？誰に泣かされたの？その鮎川くん？」

「え？」

3人が同時に病室の入り口の方を見る。

ゆきちゃんのお母さんが入ってくる。

「桜ちゃん大丈夫？」

「はい」

「ちよつと桜ちゃんと二人で話したいの、申し訳ないけど少しだけ席を外してもらえ」

鮎川くんと委員長は素直に出ていき病室に私とお母さんが残る。

もちろんゆきちゃんも。

「桜ちゃん、せつかく大好きな鮎川くんが告白してくれたのに断っちゃったの？」

「どうしてそれを？聞いてたんですか？」

「ごめんね、病室に入ろうとしたら何やらとりこんでいるようだったので、ちよつと様子を見てたの」

「そうですか、ごめんなさい。ゆきちゃんの病室なのに」

ゆきちゃんの病室で告白されてしまうなんて、不謹慎だと恥ずかしくなる。

そう思つとお母さんの顔を見られない。

「いいのよ。それより青春って感じで、見ていた私の方がときどきしたわ。でも断っちゃったのね」

「はい」

お母さんが見ていたなら、なおさら断つて良かったと思う。

「泣くほど好きなら付き合っちゃえばいいのに」

「ゆきちゃんがこんな状態ではとてもそんな気になれなくて」

「優希の事なんて気にしなくていいのに」

「そんなわけにはいきません、こうなったのも私の責任ですから好きなのも本心だけどこの気持ちも本心だ。」

「それは関係ないって言ったでしょ。それにあなた達が恋人同士になるのは、優希自身が望んでいたことじゃない？」

「本当にそうなんでしょうか」

ゆきちゃんの気持ちを直接聞けていないのがどうしても気になる。

「本当よ、私も優希と親子二人だけの生活でいつも優希のこと見ているのよ。優希が何を考えているかなんて分かるわ」

「ゆきちゃんの考えてること？」

「ええ、優希は本当に桜ちゃんが喜ぶような結果になる事を望んでいたはずだよ」

「私の喜ぶ結果……」

ゆきちゃんはいつも私を気遣ってくれる。お母さんも言うんだから本当なのかもしれない。うつん、きつとそうなんだと思う。でもゆきちゃんの口から聞きたい……

「そうよ、だから二人が付き合くと優希も喜ぶわ。だから大好きな彼の告白を断ったりしないで。彼のこと好きなんでしょ？」

「はい」

「付き合いたいのでしょ？」

私は答えに窮す。もちろん付き合えたら嬉しいけどやっぱり……

「付き合いたくないの？」

「いえ、そんなことはないですけど……」

「じゃ話は簡単じゃない、ちよつと待ってね。彼を呼んでくるわ」

「え？いきなり？」

私は思わず立ち上がってしまう。

「そうよ、彼だって悲しそうにしていたでしょ？お互いが好きなのだから何も問題ないわよ」

「ま、まっ……」

私の制止の言葉も言い終わらないうちに、お母さんは鮎川くんを呼びに行ってしまった。

この状況を、なにやら楽しんでるように見えたのは気のせいだろうか。

精神的に疲れきった私はそのままソファーに深く座る。

第39話 【文化祭】もう一度

しばらくしてお母さんが鮎川くんを連れて戻ってきた。私は慌てて立ち上がる。

「さ、鮎川くんもう一度告白してあげて」

そう言いながらお母さんは私の後ろに回り私を後ろから抱きしめそっと両腕を掴む。

鮎川くんはなかなか言い出せないように黙ったままだ。

「どうしたの？おばさんがいると邪魔で告白できない？」

「いえ、そんなことは・・・」

私が邪魔？なんて言い方をされると「うん」とは言えないよ、でもきつとわかってて言っているんだろう。

「早く言っただげて、いつまでも待たせちゃ可愛そうでしょ？それにもう答えは決まっているのだから。何も心配ないわよ。でも一応こういうことは順序を踏まえた方がいいでしょ？だから早く告白してあげて」

やっぱりお母さん楽しんでるみたい。でもお母さんの言葉に安心したのか鮎川くんが意を決したような表情をつくる。

「咲原、さっきも言っただけど俺は咲原の事が好きだ、ずっと好きだった。だから付き合っただけいい」

何度聞いても緊張する。だけど私も鮎川くんのこと好き。お母さんにも応援してもらっているというのがゆきちゃんへの申し訳なさを霞ませてくれる。

でも私もなかなか返事ができない。

するとお母さんが私を抱きしめながら体を揺すってくる。

「ほら、鮎川くんが一生懸命告白したんだから桜ちゃんもちゃんと返事してあげて」

そうだ、鮎川くんの方がもっと緊張したはずだ。お母さんも鮎川くんも委員長もみんなゆきちゃんがこうなるのを望んでいたって言

つてくれてる。ゆきちゃんの気持ちはきつとみんなの言う通りなんだ。

そう考えて私も意を決して返事をする。

「さつきはごめんなさい。ゆきちゃんがこんな状態なので一度は断ったけど、私も鮎川くんのことずっと好きでした。私も付き合いたいです」

「おめでとう。よかった、これで二人は晴れて恋人同士ね。目を覚ました優希がきつと羨むわね」

私はドキツツとして鮎川くんを、そしてゆきちゃんを見る。鮎川くんもビツクリしたようだ。

「あら、私としたことが羨むと言うのは失言ね。でも優希は本当に二人の幸せを願っていたわよ。だから安心して、これから先ずっと仲良くするのよ」

「はい」

私達二人は同時に返事をした。

「良い返事ね。これなら大丈夫そうだね。それじゃちょっと優希の体を拭いてあげたいのでちょっと席を外していてくれる。10分もすれば終わるからそれまで時間をつぶしていてね」

私達二人は病室を出て委員長の待つ待合室に向かう。

残された病室にて・・・

「優希、どう？そろそろ起きない？」

そう言って美代子は優希の頬を撫でるが、相変わらず反応はない。「とにかく少し体を拭いてあげるわね」

パジャマの前のボタンを外し、固く絞ったタオルで愛しむように首筋から優しくタオルをすべらせる。

「ごめんね、二人のことを応援しちゃったわ。でもいいわよね？あなた自身どうせ報われないならせめて……　　という思いだったので

しょ？お母さんには分かってるわ。あなたの…… だからこれよかったでしょ？」

自分の行動は母として、優希のことはもちろん桜花のことも考えてのことだと、自分自身に言いわけするように語り続ける。

「目が覚めたらあなたの望んだ、でも望まない結果になっているわ。勝手なことをしてごめんね。でもこれがきつとあなたの為よ。」

聞こえていないであろうことは分っているが、自分の行動の理由を語りたかったのだろう。

「そんなことよりも早く目覚めて。みんな待っているのよ。この結果報告もあなたが目覚めてくれないと言えないじゃない。桜ちゃんや鮎川君が待っているのよ、だから早く起きてね」

第40話 【文化祭】目が合う？

20分程して3人で戻つてくると病室のドアが開いていた、どうやら終わったようだけど一応声をかけてみる。

「お母さん、もう入ってもいいですか？」

「どうぞ」

そう言われて私達3人は病室に入る。

委員長はまだゆきちゃんの様子を殆ど見ていなかったのでもっすぐベッドに向かう。

私は恥ずかしさのあまり鮎川くと少し距離をとったままお母さんの座るソファールに行く。

鮎川くんも照れているのか委員長と一緒にベッドに向かう。

私達は付き合うこととなり、こうして一緒にいるだけでドキドキした気持ちになっているけど、ゆきちゃんの状態はなんら変化がない。

「あつ、真下さんのお母さん。来ていたんですね。」

看護師さんは病室に入ってきたところで、お母さんが来ているのを知って声をかける。

「ちょうどよかった。先生を呼んできますので待っていてください。今日の検査の結果をお伝えするとのことでしたので」

みんなの顔に緊張がはしる、検査の結果が気になるのだ。

看護師さんは先生を呼びに行った。その間みんな一様に無言で先生が来るのを待つ。

しばらくして看護師さんが戻ってきた。

「先生が応接室で待っていますので、そちらまで来て頂けますか」

「分かりましたすぐに行きます」

「ではご案内します」

お母さんと看護師が出ていき病室には私達3人とゆきちゃんが残された。

「検査の結果どうだったんだろう、気になるな」

重苦しい雰囲気の中、鮎川君が話し、委員長が答える。

「そうね。今お母さんが先生と話をしているでしょうから、その話が終わったら聞かせてほしいわね」

「そうだな、今ここであれこれ言ってもはじまらないしな」

私はソファ―に座ったまま隣で話す二人の会話を聞きながらゆきちゃんのベッドを見る。

もう何度このソファ―から祈るような気持ちでゆきちゃんを見ただろう。

早く意識が戻ることを祈りながら。

そして今も……ん？何か変な感じがする。なんだろう？ゆきちゃんのベッドを見ていてなにか違和感を感じる。

一度鮎川さんと委員長に視線を移す。今、二人はベッドから離れて窓際に移動している。

『今話し合っても仕方ない』と言いながらも相変わらず検査の事を話し合っている。

そしてもう一度ベッドの方に視線を戻す。

なんだろう？何かがいつもと違う感じがする。

それが何なのか分からない。でも何か違和感がある。

しばらくベッドを見つめたまま考える。

ああ分かった、掛け布団が少しずれてゆきちゃんの左腕が少し見えているんだ。

違和感はそれだったんだ。

私は布団を掛け直そうと立ち上がりベッドに向かう。

でも布団がずれるなんて、委員長か鮎川くんが触ったのかしら？

二人は相変わらず話し合っている。

私はベッドまでいき、布団を掴もうとした時、ゆきちゃんお手がかすかに動いた。

私はびっくりしてゆきちゃんの顔を見る。と、ゆきちゃんと目が

合う。

目が合う？ゆきちゃん、私を見てる。よね？

ってことは？え？

目が覚めた？

「ゆきちゃん！？」

私の声に驚いたのだろう二人が会話をやめ駆け寄ってくる。

「ゆきちゃん目が覚めたの？私、桜だよ分かる？」

ゆきちゃんが何か言いたそうにしている様に見えるが、唇がかすかに動くだけで何を言っているのか聞き取れない。

「ゆきちゃん、気がついてくれたんだね？意識が戻ったんだね」

「真下さん」

「真下！大丈夫か」

隣で鮎川くんや委員長も口々にゆきちゃんの名前を呼ぶ。

ゆきちゃんの目はしっかりと私を見てる。

私もゆきちゃんの目を見る。だけど涙でゆきちゃんの顔がはつきり見えなくなってくる。

ゆきちゃんは目を明けているけど反応が鈍く、また今にも目を瞑ってしまいそうだ。

私は慌ててナースコールを押す。

すぐに「どうされました？」と天井のスピーカーから看護師さんの声がする。

私達は口々にゆきちゃんの意識が戻ったことを言う。

私達の言葉がどう伝わったのか分からないが、深刻な事態だということは伝わったのだろう。

数秒で看護師さんが駆けつけてくれた。

「どうしました、何かありましたか？」

看護師が駆け込むように病室に入ってきた。

「ゆきちゃんが目を覚ましたんです」

私は興奮して叫ぶように答える。

「ちよっと待っててください、すぐに先生を呼んできます」

そう言い残し看護師さんも慌てて病室を出て行った。
先生が来るのを待ちながらゆきちゃんに話しかける。
だがまたゆきちゃんが目を瞑った。

「ゆきちゃん？どうしたの？起きて！」

その声にまた目をあける。しかし黙ったままだ。

そして寝かせてと言わんばかりの表情でまた目を瞑る。

私はどうしたらいいのかわからずにただ名前を呼ぶ。

先生早く来て。そう願いながら名前を呼び続ける。

第41話 【文化祭】ここはどこ？

痛い。

頭が痛い？

ちがう顔が痛い？いや熱い？

夢？

痛い夢……

痛い。

こんな痛い夢は嫌、夢なら早く覚めて……

あれ？桜？

複数の原色が目の前でチラつく、その向こう側に桜がいる。
どうしたんだろう？何か喚わめいているようだけど。

夢の続きかな？

それにしてもこの痛みはなんだろう？顔全体が熱いような痛み。
夢の中なのに眠い。

白衣？誰だろう？見たことのない人だ。

まだ夢の続きかな？

痛みはだいたい引いた感じだ。先ほどと比べると痛くない。

それよりこの白衣の人は誰だろう？

手の感覚が…… あれ？私握手してる？

左手を見ようとするが体が思うように動かない。

やっぱり夢の中かな？

もうちよつと寝ようかな。

やっぱり誰かに手を握られてる。

もう一度見てみようと思を向けると。

そこに桜がいた。やっぱり桜だ。

どうして桜が？

眠いけどそろそろ起きなきゃ……
意識が段々とはつきりしてくる。

「あれ？桜？」

「ゆきちゃん目が覚めたの？」

「手、痛い」

「ごめん強く握りすぎたみたい」

なんだか深い眠りから引きずりだされた感覚だ。
徐々に目が覚めてきた。

誰か知らない女の人が私を起こす。

「わ！なんだ？お母さん、大輔？委員長も…… みんな何してるの？」

誰だろ？白衣を着た知らない男の人。それにピンクの看護服？

看護師？医師？

ここって病院？

「真下さん、気分はどうですか？」

「どうと言われても……ちょっと眠いけど、それ以外は特になにも」
辺りを見回すとここはどうやら病室のようだ。そして私の手には
点滴の管が。

「あなたは交通事故に遭われましてここに運び込まれたのです」
交通事故？私が？

「よく覚えて無いようですが、意識も戻りましたし徐々に思い出す
と思います。それとあなたは右腕を骨折しています、あと肋骨にひ
びが入っているので安静にしてください。頭の傷はそれほど深
いわけではありませんが、動いて血が出るといけませんので止血の
意味も含めて少し大袈裟に包帯を巻いているだけなのでご安心くだ
さい」

「痛っ」

そう言われ頭を触ろうと右腕を動かした瞬間痛みが走った。よく

見ると右腕はギプスがされていて簡単には動かせそうに無い。左手も点滴のため動かしにくい。

「それでは意識も戻りましたし、私は戻りますが何かあれば直ぐに連絡をください」

そう言って医師は看護師ともども病室を出て行った。

「ゆきちゃん大丈夫？」

桜は先生達が出て行くのを待ち構えていたように直ぐに泣きながら話しかけて来る。

「大丈夫だよ」

「でもずっと意識が戻らなかったから心配で」

「そうなの？どれくらい寝てたの？」

「一日半」

「へーそうなんだ」

「事故、覚えてないの？百貨店の前の交差点で車に撥ねられたんだよ」

言われてみればそんなことがあったような……

いや、思いだしてきた。そうだ。私車に撥ねられたんだ。

車が迫ってくる情景を思いだし物凄い脂汗が噴出してくる。

気分も悪くなってきた。

「どうしたの？顔色悪いけど大丈夫？凄い汗」

「大丈夫、ちょっと事故った瞬間を思い出しちゃって」

「ごめん。いやな事思いださせちゃって」

「いや、大丈夫だよ。こうして無事なんだし」

第42話 【文化祭】もういいよ。

「優希」

お母さんの声は私を叱責しているようだ。

「みんな凄く心配していたわよ。心配してくれる人がいてよかったわね。でもあなたの不注意で起こした事故なのに桜ちゃんが自分のせいだと言ってそれはもう大変だったんだから。ちゃんと謝っておくのよ」

「そんな… お母さん、悪いのは私なんです。ゆきちゃんは悪くないので責めるようないい方しないであげてください」

「桜ちゃんは優しいわね」

「優希」

「分かってるよ。私が飛び出して勝手に一人で起こした事故なんだから桜は悪くない。それくらい分かってるよ」

「それならいいのだけどね」

「桜、心配かけてごめんね。大輔も委員長も彰弘も心配かけてごめん」

「真下が無事ならそれでいいよ。何も謝る事はないよ」

と、言葉を切ったところで大輔が腑に落ちない様子で聞き返す。

「彰弘？」

私は大輔の言いたい事が分からず「うん？」と応え彰弘を見る。

私の目線を追って大輔が振り向く。

「彰弘、いつの間に？」

「今さっき…」

「どうしてここへ？」

「委員長に聞いて」

「葵くんは知らなかったの？私てつきり知っているものだと思って話ししちゃったわ」

委員長も秘密をばらしてしまっでごめんなさい。というような言

い方だ。

何がどうなってるんだろう？今まで気を失っていた私には話が見えてこない。

「文化祭でのみんなの様子がおかしかったから、疑問に思っていたんだけどこういうことだったんだ」

「別に隠していたわけじゃないけど、お前どこ行っただけだったから言いそびれて」

「ああ、俺があの日逃げて帰ってしまったからな。別になんとも思っていないよ」

要するに彰弘だけが私の事故を知らなかったってことなんだろう？とにかく彰弘の出現で場の雰囲気が重くなったのは間違いないさそうだ。

いきさつがはっきりと分からないので、何を話したらいいのか分からない。

それよりも少し疲れたし寝たい。そうお母さんにそう言おうとした時。

「みんなちょっと聞いて、ここで大ニュースを発表するわ」

お母さんが暗い雰囲気打破する為かのように、大きい声で手をたたきながら皆の注目を集める。

なんだろう？

お母さんの次の言葉を待っていると桜が大慌てで制止する。

「お母さん何を発表するんですか？まさか」

「もう分かっているくせに。あなた達のことに関係するじゃない」

「ちょっと待ってください。こんな大勢いる前でいきなり発表するんですか？」

桜がそうとう慌ててる。

「みんなが居るから発表する意味があるんじゃない。それともずっと隠しておくつもりだったの？」

「いえ、そんなことはないですが……でもこんないきなり……」
桜の態度で、お母さんが何の話をしてるのか、なんとなく分かつ

た。

「では私の口から言うのもなんですので、鮎川君から言って頂きましょう。どうぞ」

大輔の名前が出たことで確信した。そうか、二人は付き合うことになったんだ。

彰弘の方を見ると、彰弘もなんとなくそれを感じているのか寂しそうに桜の後ろ姿をじっと見ている。

「僕が言うんですか？」

「あら嫌なの？じゃあやっぱりおばさんが言いましょうか？」

「いえ、僕から言います。真下には僕から報告する義務があるような気がするので」

そう言っ大輔が私の目の前に立つ。

もう何を言うか分かった、だから今ここであえて大輔から聞かなくていい。

今は聞きたくない。

元はと言えば私が大輔にお願いしたことだけど、でももう分かったから言わないで。

そんな私の思いが通じるはずもなく、大輔が私を正面に見据える。

第43話 【文化祭】大輔の報告

「真下、昨日の朝の約束覚えてるか？約束どおり咲原に告白して俺の想いを受け止めてもらった」

私は何て言えば良いか分からず、大輔の顔をまともに見れなくて横を向く。

私が横を向いたのをどう感じたんだろうか、桜が慌てて話しに入ってくる。

「ゆきちゃん。私、ゆきちゃんが大変な状態なのに、お付き合いするなんていけないと思って、だから一度はお断りしたんだけど……」
最後は消え入りそうな声で語尾が途中で切れてしまったようだ。
思ったけど？思ったけど何？結局付き合ってたんでしょ？だったらそれで良いじゃない。

桜は何かいいたくて大輔の話しに割って入ったの？それとも『けど』の続きに大事な話でもあったの？

私は小さく頭を振る。痛っ。小さく振ってもどこかしら体が動くようであちこちから痛みを感じる。

桜はそんな私をじっと見つめたまま何も言えないでいる。

私は誰にも分からないように心の中で小さなため息を一つつく。

私ってホント嫌な人間ね。桜は私がそっぽを向いたことで怒ってると思ったかな。

私は今どんな顔をしてるんだろう。皆にはどんな風に映ってるんだろう。

自分で二人が付き合う事を望んで大輔に告白するように頼んだのに……

その通りになったと分かった途端二人が気にするような態度を取ってる。

私って最低な人間だ。桜、ごめんね。

桜は何も悪くないのに……

怒ってるわけじゃないのよ。ただどうしようもなく寂しく感じただけなの。

「優希！桜ちゃんはおあなたが大変な状態なのに今付き合うなんてできないって断ったのよ。だけどあんた鮎川君と約束していたのでしょ？桜ちゃんの誕生日である今日に告白することを！だから、ってわけでもないけど私が強引に二人の仲を取り持ったのよ。優希のことは気にしないで良いって言ってね」

ああ、そうか。お母さんが間に入ってたんだ。それで。

お母さんがそんな行動をとるなんて…… やっぱりお母さんには分かってるんだろうな。

「桜、大輔おめでとう。これからずっと仲良くね」

桜が悪いわけじゃない。そう思い直して言った言葉だったけど、自分でもびつくりするほどぶっきらぼうな言い方になってしまった。

こんな言い方じゃ余計気にしてしまうんじゃないだろうか。

「俺は認めない！」

大輔の報告を聞いてうなだれていた彰弘がいきなり声を発した。

しかも認めないって。

彰弘が認めるとか認めないとか関係ない気がするんだけど……

でも思い詰めて出た言葉だということはよく分かる。

そして彰弘の発言のおかげで、私のぶっきらぼうな言い方が流されたように助かった。

「たとえ桜花ちゃんが誰と付き合おうが関係ない。俺は桜花ちゃんが好きだ。絶対に諦めない」

諦めた方がよさそうだと思うけど黙っておこう。

彰弘はバカだけど桜への思いは本物だ。それをどうこう言う資格なんて私にあるはずもない。

頑張れとは言えないけどあの一途な思い、そしてそれをはっきりと言える心を持っている彰弘が羨ましい。私にはとてもそんな勇氣はない。

「俺は帰る」

そう言い残し彰弘は帰って行った。続いて委員長ももう時間も遅くなったし、と言って帰って行った。

時計を見るともう7時40分だ。

「咲原、俺達もそろそろ帰ろうか、あまり遅くなると真下も疲れるだろうし。それに面会時間も8時までだから」

「私も少し疲れた。ちょっと眠りたい」

今はこれ以上話をしてもろくなことがない、と感じていた私は桜に帰るように促す。

「うん、バタバタしちゃってごめんね。また明日来るね」

そう言った桜だが、まだ何か言いたそうだ。

「桜、どうしたの？何か言いたいことがあるんじゃないの？」

桜は何かを考えているようだ。そして少し間をおいて。

「ううん。何でもない。また明日来るからゆっくり寝てね」

「そう？何でもないならいいけど」

「うん。なんでもない。お大事にね」

「ありがとう」

桜と大輔が帰っていった。

そして病室には私とお母さんだけが残された。

第44話 【文化祭】電話で

皆が帰り、病室には私とお母さんの二人っきりになった。

「優希、さっきの態度は何？あれじゃ二人が可哀想じゃない」

私はそれには答えず黙ったままだ。

「桜ちゃんすぐく気にしていたわよ」

私はお母さんを睨みつける。そんなことはわかってる。

「桜ちゃんは事故は自分のせいだから付き合えないと言ってたのを、私が無理やり取り持ったのよ。それなのにあなたはあんな態度をとって」

わかってるよ。でも私だって辛いんだ。

「それと最後桜ちゃんは何を言おうとしていたかわかっているの？」

何か言いたそうなのはわかったけど何が言いたかったのはわからない。

「お母さんにはわかるっていうの？」

「わかるわよ」

「なに？」

「桜ちゃんはあなたの本当の気持ちをまだ聞いていなかったからその不安があったのよ」

そうか、結局何も話せてなかったもんね。

「あなた自身、二人が付き合うようになればいいと思って、鮎川君に告白するように頼んだんでしょ？それなのに情けないわね」

「分

「わかってるよ！」

私は思わず怒鳴っていた。

そんなことはわかってるけど……

「優希の泣きたい気持ちも分かるからこれ以上言わないけど、桜ちゃんにはちゃんとフォローしてあげるのよ」

「わかったよ」

「じゃ、お母さんもそろそろ帰るから一人で泣きなさい」

「うるさい、どうして私が泣かないといけないのよ」

「それだけ強がりと言えるなら大丈夫ね。また明日来るわね。お休み」

そう言ってお母さんも帰って行った。

病室には私一人が残された。

しばらく目が覚めてからの事を考えていると、消灯時間を告げる院内放送が入る。

時計を見ると9時だ。

病院つて9時になると消灯なんだ、あまりの早さに驚きながら病室を出て待合室に行く。

そこはまだ電灯が点いていて数人が本を読んだり雑談をしたりしている。

私は公衆電話の前に立ち電話をしようかどうかしようかしばらく考える。

8時に病院を出ているから約1時間経っていることになる、さすがにもう家に帰っているだろう、ちょうど晩御飯を食べている頃かな？

さっきの私の態度からして桜はきつと気にしてるだろう。

せつかく私の意識が戻ったのに晩御飯も美味しくないだろうな。

私がそっぽを向いたから、もしかしたら私の大輔への想いを疑ってしまったかもしれないし、意識のない間に付き合ってしまった事を気にしてるかもしれない。

どちらにしても桜が気にやnderことは間違いないだろうな。悪いことしちゃったな。

お母さんに言われたってわけじゃないけど電話でもして桜の心配を取り除いてやらないと。

電話をかけると桜がでた。

「桜？さつきはごめんね」

「どうしたの？急に」

「さつきは起きたばかりで疲れてたから私態度おかしかったと思うの」

「そうなの？」

桜が安堵したような声を出す。

「実はあの時凄く疲れてて、それで眠かったし横になりたかったんだけど、皆が話をしたから寝ないように我慢しながら話を聞いていたの。だからあまり話もちゃんとできなくて……」

「そうだったの？私はてつきり」

桜はそう言つて語尾を濁した。やっぱり気にしてたんだな。

「だからさつきはちゃんと言つてあげられなかったけど、大好きな大輔と付き合うことになったんだね。良かったね、おめでとう。ずっと仲良くするんだよ」

「うん、ゆきちゃんありがとう」

桜は相変わらず泣き虫だな、もう泣いてる。

「何を泣いてるの？嬉しいことがあったんだから泣くなっておかしいよ」

「今日はゆきちゃんの意識は戻るし、鮎川君とは付き合うことになるし、その鮎川君とのこともゆきちゃんがいろいろ協力してくれたみたいだし。ホントに今日は私にとって凄い日になったよ。それもこれも全部ゆきちゃんのお陰だよ。ありがとう」

「何を言ってるんだよ、私は何もしてないよ。事故も私が悪いんだし、大輔とのことはお互いが好き同士だったからうまくいっただけ。私は関係ないよ」

「ううん。ゆきちゃんにはいつも助けられてる、本当にありがとう」
桜がまっすぐに私を信頼し、感謝の言葉を続けるから私まで涙が出そうになってきた。

「私こそ今までどれほど桜に助けてもらったかわかんないよ。私の方こそありがとうだよ。そしてこれからずっと友達でいてね」

こらえ切れなくなって私も泣きながら話してしまう。
「もちろんだよ、私達はずっと友達だよ」
「うん」

それから1時間ほどいろんな話をして電話を切った。
電話をしてよかった。心からそう思った。
これで今夜は私も桜もゆっくり眠れるだろう。

明日は文化祭最終日。

第45話 【文化祭】最終日

「ゆきちゃん具合どう？」

病室の扉が開いたかと思うと同時に元気いっぱい桜が入ってきた。

「もう大丈夫だよ。検査の結果も異常がなかったから週明けには退院できるって先生が言ってた」

「そうなんだ、よかった」

「いろいろ心配かけちゃってごめんね」

「ううん、そんなことないよ、私がいけなかったんだから」

そう言ってまた少し暗い顔をする。

「もうその話はやめよう。こうして無事だったんだし。それより文化祭はどうだった？」

「喫茶店大繁盛だったよ。私、今日はお店の方は休みの予定だったけど、凄く忙いっていうからウイトレスでお手伝いしてきたよ」
「そうか、それは大変だったね。でもその儲けたお金ってどうなるだろ？クラスの皆で山分けなか？」

「ゆきちゃん何言ってるのよ」

「私もちゃんと分け前もらえるのかな？」

「もう、何の心配してるのよ。山分けなんてするわけないじゃない」

「え？じゃ委員長が独り占め？」

私の冗談に桜がたまらず噴き出す。

「利益は全部生徒会が預かって学校で必要なものを購入したりするんだよ」

「そうなんだ、せっかく儲けたのにそれは残念だなあ」

私の言葉に本当に楽しそうに桜が笑っている。私達の間にわだかま蟠りなんてない。

そんな雑談をしてると大輔がやってきた。

「真下、大丈夫か？」

「大輔、来てくれたんだ。ありがとう。もう大丈夫、来週にも退院らしい」

「そうかよかった」

続いて委員長もやってきた。

皆で他愛のない話に花が咲き時間が過ぎる。

だけど彰弘だけは来ない。

きっと皆が集まるここには来れないんだろう。

彰弘の気持ちを考えると可愛そうだけど人の心はどうしようもない。

簡単に想いを変えさせるなんてことは出来ないんだから。

出来ないならこのまま友達でいい。私はその道を選ぶ。

無茶をして誰かを不幸にしたり、自分が嫌われたりするの嫌だから。

こうして話ができるだけで幸せ。

と、自分に言い聞かせこのままずっと一緒に居よう。

今後二人がどうなるかわからない、もしかしたら結婚するかもしれない。

もし結婚したとしてもずっと友達でいたい。

私にだって彰弘に負けないくらいの想いはあるんだ。

ずっとこの笑顔を見ていたい。

だからこそこのままずっと……

こうして私達の高校最後の文化祭が終わった。

第45話 【文化祭】最終日（後書き）

長い文化祭も終わりました。

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

物語はまだまだは続きますので引き続き楽しんでいただけたら嬉しいです。

週末は執筆に専念したいと思いますので、次話投稿は週明け予定です。

今後もし宜しくお願いします！——<

第46話 「クリスマス」誘い

「ゆきちゃん、24日のイヴなんだけどクリスマスパーティーしない？」

「そつか、もうクリスマスだね。いいよ。二人でするの？」

「それなんだけど、大輔くんの家でやろうと思って」

ここから見ていても優希の顔が曇るのが分かった。桜花ちゃんは気づいていないようだけど。

「大輔の家で？」

すごく嫌そうな言い方だけど、桜花ちゃんはどう感じているんだろう？

「うん、パーティーだから大勢でやった方がいいでしょ？」

「そうだね。いいよ」

二人が付き合うようになってから2ヶ月程、桜花ちゃんは大輔の事を鮎川君から大輔君と呼ぶようになった。

桜花ちゃんが大輔君と呼ぶ声が聞こえるたびに不快感を覚える。

きつと優希も同じ気持ちのはずだ。

文化祭の時、優希は大輔のことをなんとも思っていないって言うていたけどあれは絶対に嘘だ。

二人が仲良くしているのを見るたびに不機嫌になっているのがよく分かる。

大輔も桜花ちゃんも全く気づいてないようだけど。

今も大輔の家で、と聞かされた途端明らかに不機嫌そうな顔をしている。

それでも優希は行くみたいだな。

俺も誘ってもらえるんだろうか？

あの病室での発言以来大輔とはなんとなく気まずい。

桜花ちゃんの俺に対する態度は以前とそれほど変わらないけど、でもそれなりに意識はしているはずだ。

俺の方からも以前のように、気軽に話しかけたりはしなくなってしまうていたし。

そんな事を考えながら桜花ちゃんの方を見ていると目が合う。

桜花ちゃんがこっちに向かって歩いてきた。

「葵くん、24日に大輔くんの家でクリスマスパーティーをするんだけど参加してくれる？」

俺の気持ちを知っていながら大輔の家でのパーティーに誘うなんて酷い。という思いから断ってやりたい気持ちもある。

だけどそれ以上に、大好きな桜花ちゃんが誘ってくれたという喜びもある。

俺を誘ったからといって俺に対して恋愛対象としての好意があるわけじゃないのはよくわかってはいるけど……一瞬の葛藤の末

「もちろん俺も参加させてもらうよ」

自分でも情けない返事だと思うけど、大好きな桜花ちゃんの誘いを断るなんてできない。

桜花ちゃんとは皆と仲良くしたいだけで、誰かに対して嫌味な気持ちなんてこれっぽっちも持っていない。

それは今までずっと見てきて分かってる。だからこそ断れない。俺が断ったら悲しむだろうから。

自惚れなんかじゃなく、桜花ちゃんっていうのはそういう子なんだ。

だからこそ今でも大好きなんだ。

「ありがとう。じゃ詳しくはまた連絡するね」

「うん。こっちこそ誘ってくれてありがとう」

桜花ちゃんが満面の笑みを浮かべながら頷く。やっぱり誘いを受けてよかった。

そして桜花ちゃんはそのまま委員長を誘いに行った。

委員長も来るみたいだ。

確かに人数は多い方がいい。

ふと優希を見ると寂しそうに窓の外を眺めている。

きつと優希も俺と同じような気持ちなんだろうな。

いや、桜花ちゃんと親友という立場上俺なんかより辛いかもしれないな。

第47話 「クリスマス」終業式の日

12月22日、今日は終業式だ。

俺の通う学校には試験休みというものがなく、2学期末の試験が終わった後もずっと授業がある。

午前中だけだが他の学校は試験休みだと思うと腹が立つ。

本来なら桜花ちゃんと会えるからよしとするとところだけど、最近
は教室でも大輔と一緒にいることが多いので見ているのがつらい。

こんな状況なら学校を休んで家でのんびりしている方がまだマシだ。

もうすぐ9時になる。

9時になると体育館に全校生徒が集まって校長のありがたいお話を聞かなくてはならない。

他の学校も終業式の度に校長の訓辞を聞かされるのだろうか？

わざわざ体育館に皆集める必要なんてないと思うけど。

こんな面倒な事をするのはうちの学校だけじゃないか？

そんな事を考えていると優希と話していた桜花ちゃんが近寄ってきた。

「葵くん明後日のパーティーだけど、大輔くんの家で4時に集合ってことになったけどそれでいい？」

何か良い話でもあるのかと思ったらパーティーの連絡か。

「うん、いいよ。結局何人集まるの？」

「6人だよ」

「6人？5人は分かるけどあと一人は誰？」

「あと一人は申し訳ないんだけど私の妹が来るの」

「桜花ちゃんの妹？」

「うん、どうしても行きたいってきかなくて。愛花っていうんだけ

ど、ゆきちゃんのことをすごく慕ってるし、大輔くんのことも知ってるから」

「そうなんだ。桜花ちゃんの妹なら大歓迎だよ」

へえ、桜花ちゃんの妹か。見てみたいな。

「ありがとう。じゃ4時に大輔君の家に来てね」

「うん」

とは言うものの、せっかく桜花ちゃんに誘ってもらったパーティーだけどあんまり楽しみじゃない。

桜花ちゃんを見ると、今は大輔と二人で楽しそうに話している。

だんだんと行きたくなってきた。

優希の方を見るとあいつも一人ぼつんと座っている。

俺は優希に近寄って行き、少しトーンを抑えて声をかける。

「優希、明後日のパーティー行くんだろ？」

「は？」

「は？ってお前。もうちょっと女らしいリアクションは出来ないのか？」

「なにが？私はものすごく女らしいじゃないか！男に見えるのか？」
いきなり思いつき不機嫌じゃないか…… 声かけたのは失敗か

……

「男には見えないけど、全然女らしくない！お前が女らしい話し方をするのは桜花ちゃんに対してだけだな」

「彰弘に対して女らしくする必要がどこにあるんだ？」

マジで相当機嫌が悪いらしい。

大輔のことを聞こうと思ったけど、今は近寄らない方が身の為かもしれない。

そのまま立ち去ろうとした時、優希から声をかけられた。

「それでなんだよ？何か話があったんじゃないの？」

このまま無視して立ち去るのも逆に危険かと判断し、話すことにする。

「優希もパーティーに行くだろ？」

「ああ」

返事がぶっきらぼうだ。

「楽しみか？」

優希がジロつと俺の顔を睨みつけるように見る。

その目つきに一瞬たじろいでしまう。

「俺は二人が仲良くするのを見に行くようなものだと思うと、行くのが億劫になってきたんだ」

「だから？」

優希の目が怖い。

しかし男としてこのまま引き下がれない。

「だから、お前も行くの嫌なんじゃないかな？って思っ」

「どうして私が嫌なのよ？」

「だって大輔と桜花ちゃんが仲よさそうにしてるといつも不機嫌だから」

「は？二人が仲良くしていつ私の不機嫌になってるのよ？」

『今！』と言いたいのが優希の恐ろしい形相を見たらとても言えない。

これ以上怒らせると俺の命が危ない。

俺が二人の話を振ったせいで、怒りが増してきてるみたいだ。

「そうか、嫌じゃなければそれで良いんだ。俺の勘違いだったみたいだな」

これ以上はマジで危険だ。席に戻ろう。

「待って！」

「え？」

なんだよ、もうカンベンしてくれ。俺が悪かった。だから席に戻らせてくれ。

「勘違いって何？何を勘違いしてるの？」

妙に絡んでくるな。俺に八つ当たりをされたんじゃない。たまったもんじゃない。

そのまま聞こえない振りをして逃げるように自分の席に戻る。

後ろを振り向かず、背中に意識を集中したが、それ以上優希が話しかけてくることも追ってくる様子もなくほっとする。

危なかった。あれ以上一緒に居たら絶対ヤバイことになってたな。ましてや大輔が、なんて言ったら殴られるだけではすまなかったかもしれない。

今のでよく分かった。優希は絶対に怒らせちゃダメだな。

しかし、優希も見た目は可愛いし、勉強もスポーツも出来るんだから普通にしていればモテるだろうに……

男に対して威圧感ありすぎなんだよ。

第48話 「クリスマス」一人の部屋

「今日はパーティーかあ」

誰もいない部屋でため息混じりにつぶやく。

桜に愛花ちゃんを迎えに来てほしいと頼まれていたので、もう少ししたら出かねくちゃいけない。

桜自身はパーティーの準備があるからと、昼頃から大輔の家に行ってるらしい。

桜は大輔と一緒に……

まだだ、またこんな気持ちに。あの時、あの病室でもう吹っ切ったはずなのに。

私は気を取り直し、部屋にある姿見の前に立ち服装をチェックする。

うっん、服装なんかより笑顔のチェックだ。

鏡に顔を近づけ笑顔を作ってみる。なんともみすばらしい笑顔だ。こんな悲愴感ただよ顔で行けるわけがない。

私は両手を使って口角を無理やり上げてみる。全然ダメだ……

そういえば割り箸なんかをくわえたまま、ニコッと笑うと口角が上がるとか……

「何やってるのよ!」

誰もいない部屋で私の声がむなしくこだまする。

無理やり作ったこんな汚い笑顔みせても嫌われるだけだ。急に胸が痛くなり俯きそのままその場にへたり込む。手で胸を押さえるが痛みが和らぐことはない。

いつまでもこんなところでうずくまってなんていられない、顔を上げもう一度鏡を見る。

見ると鏡の中の私の目からは、今にも涙が溢れそうになっている。ダメ、今泣いたらマスカラがとれてしまう。

今日は気合入れて、いつもはしないようなメイクしているんだか

ら。

普段はつけることなんてないマスカラ。口紅だってチークだって大人っぽさを演出するような色合いを意識している。つい先日、桜と一緒に雑誌など見て勉強したメイクだ。

アイラインも頑張って引こうとしたけど、それは上手いかず結局諦めた。

頑張ってみたんだけどな……

そんなことを考えているとどんどん辛い気持が大きくなり、堪え切れなくなつて涙が一滴流れる。

「あつ」

声を発して自分で気付く、涙声になつてる。

慌ててティッシュを引き抜き、鏡を見ながら涙を押さえる。

でも、せっかく押さえてるのに次から次へと溢れてくる。

「何やつてるのよバカ」

自分で自分に怒るけど涙は止まってくれない。

「なんで止まってくれないのよ」

もう嫌、泣きたくなてないのに。

泣きたくないと思えば思うほど涙が止まらなくなる。

我慢できない、私泣いてもいい？自分に問う。

自分で答えを出すことは出来なかった。でも静まりかえった部屋

で、私は誰にはばかることもなく声を出して泣いた……誰もいない部屋で、誰も知らない思いを胸の奥に押し込みむなく泣き続ける

……

どれくらい泣いていたんだろう？「あつ、何時？」

私は突然思いだしたように時計をみる。そろそろ出かけないと約束の時間に遅れてしまいそうだ。

「もう！」

私は全てを振り払うかのように勢いよく立ち上がり洗面所へ向かう。

手いっぱいクレンジングをとり、乱暴に顔にこすりつメイクを全部落とした。

大急ぎで部屋に戻りファンデーションを塗る、そしていつも使っている艶のない薄いピンクの口紅を塗る。チークもオレンジとピンクの中間のようなものを、目立たない程度に薄く塗る。

結局いつものメイクだ。

目が腫れぼったい感じがするけど今更どうしようもない。

愛花ちゃんが待つてるんだ。遅れちゃいけない。

私は勢いよく家を飛び出した。

時間がなくなつて焦っていることで少しは吹っ切れた気がする。

桜の家が見えてきたので時計を確認する。なんとか約束の時間には間に合ったようだ。

桜の家のガレージに自転車を停め息を整える。

チャイムを鳴らすと、待ってましたとばかりに愛花ちゃんが飛び出してきた。

「優希先輩こんにちは」

ドアを開けながら満面の笑みで出迎えてくれる。

私だと確認をする前に、勝手に私だと決めつけてドアを開けながら挨拶してるけど、私じゃなかったらどうするんだろ。

でもそんな屈託のないところが、愛花ちゃんの可愛いところだ。

なんだかこの笑顔に救われるような気持ちになる。

「愛花ちゃんこんにちは」

「優希先輩と二人で出かけられるなんて嬉しいな」

なんか微妙にデートっぽいニュアンスで言われてる気がするけど、気にしないでおこう。

「出かけると言っても大輔の家まで行くだけだね」

「それでもいいんです。優希先輩が私を迎えに来てくれて一緒に目的地まで歩く。それだけで幸せです」

「はは……」

なんと返していいか分からず間の抜けた笑いしかできない。

大輔の家は桜の家から意外と近い、二人の家の間には学区の区分けの境界線があるので中学校は別々だが、十分歩いて行ける距離だ。私の家も桜とそれほど離れてるわけではないけどやっぱり中学は別だった。

「楽しいですね」

愛花ちゃんは相変わらず楽しそうだ。

この調子で話を進められたら応えるのが大変そうなので話を変えよう。

「そつえば愛花ちゃんはもうすぐ受験じゃないの？」

「そうですよ」

「勉強はかどっている？」

「ばっちりです」

「高校はどこだっけ？」

「もちろん相星です」

なぜもちろんなのかはあえて聞かないでおこう。

「だって優希先輩の通ってる学校だもん」

聞いてないのに答えてくれた。

「はは……」

苦笑いするしかできない。

「先輩も大学受験するんでしょ？」

そう言いながら愛花ちゃんが何故か腕を組んでくる。

「そうだね。私はどっちでも良かったんだけど、桜と一緒に行くっていうから」

そつと腕をはずそうとするが、愛花ちゃんは腕をはずされまいと強くしがみつきなから話を続ける。

「優希先輩つてすつごく頭が良いつてお姉ちゃんが言ってたよ」

「そんな、別に良くないよ。普通だよ」

「うつん。お姉ちゃんが『ゆきちゃんは頭が良いのに進学するつも

りないみたいで勿体ない』って言ってたよ」

桜つて家でそんなこと言ってたのね。

「だから優希先輩を無理やり誘ったんだって」

そうだったんだ、だからあんなに必死で一緒に大学に行こうって
言ってたのね。

それよりもこの腕はいつ離してもらえるんだろうか。

「でも優希先輩のレベルに合わせた大学を受けることにしたから、
勉強が大変だって言ってたよ」

「桜も勉強は結構出来るはずだから問題ないと思うけどね」

「でもお姉ちゃんは、センター試験まで日にちがないから冬休みは
ずっと大輔……」

「愛花ちゃん！」

私はその先を聞きたくなくて、愛花ちゃんの言葉を切るように鋭
く愛花ちゃんの名前を呼んだ。

愛花ちゃんは相当びっくりしたようで、腕を離して「はい」と返
事をする。

「ほら見て、あそこに大きな赤い看板が見えるでしょ。あの隣が大
輔の家だよ」

一瞬キョトンとしたような顔をしていたけど、また腕を組もうと
してきたので、組まれる前に愛花ちゃんの手を引っ張り大輔の家へ
向かった。

第49話 「クリスマス」桜の手料理

大輔の家の前に立ち、チャイムを鳴らす。

ドアの向こうから返事が聞こえる。桜の声だ。

「ゆきちゃんいらっしやい」

桜が出迎えに来たことが嫌で、思わずぶっきらぼうな返事をしてしまう。

「やあ」

「お姉ちゃん私も居るんだよ。私にもいらっしやいって言ってよ」

「うるさいわね。あんたはついでなんだから」

「優希先輩」お姉ちゃんがいじめる。助けて」

そう言つて愛花ちゃんがまた腕を組んでくる…

「やめなさい、ゆきちゃんが迷惑がつてるでしょ」

「そんなことないもん。優希先輩はお姉ちゃんと違って、すぐに怒ったりしないし心が広いんだから」

屈託なくそんな風に言われるとツライ。

「桜花ちゃん、何してるの？早く入ってもらって」

奥から大輔の声が聞こえる。

「あつ、ごめんなさい。ゆきちゃんどうぞ上がって」

「お姉ちゃんなんだか奥さん気取りだね。気持ち悪い」

『奥さん』の一言に思わず反応してしまいそうになるが、グツと我慢する。

「なんですって！何が気持ち悪いのよ」

愛花ちゃんは「きゃー」と叫びながらさらに強く抱きついてくる。やられた。油断していた。完全に腕を絡め取られてる。

それより、じゃれ合ってる感じもあるけど、これ以上放っておくと本当に喧嘩になりかねない。

「桜、それくらにしてあげて」

「あ、ごめんなさい」

私の一言で桜がすぐに大人しくなった。

「やゝい。怒られた」

そんな桜を見て愛花ちゃんが桜をからかう。

「あんた、いい加減にしなさいよ」

一旦落ち着いたのに愛花ちゃんの一言でまた桜が怒りだす。

「べゝ！」

愛花ちゃんが舌を出してさらに桜を挑発する。

「愛花！」

桜は完全に怒った様で、怒鳴りつけるように愛花ちゃんの名前を呼びながら頭を叩いた。

「痛いゝ。なにをするのよ！」

「あんたがいつまでもふざけてるからでしょ！」

桜がもう一度頭を叩く素振りを見せる。

「やめて！」

私は一際大きな声で桜を制止する。

そしてその声には激しい怒気が込められていた。

突然の怒鳴り声にびっくりした二人は、完全に動きを止めてしまった。

二人の態度を見て私自身が慌てる。

「あ、大きな声だしてごめん……」

一瞬にして凍りついたその場の雰囲気を取り繕うように言うが、桜の顔は強張ったままだ。

「私の方こそごめんなさい、部屋に案内するわね。ついてきて」

そう言われて桜の後ろを私と愛花ちゃんがついていく。

あんな怒鳴り声を上げてしまったのに、愛花ちゃんは私の腕をしっかりと掴んだまま離さない。

愛花ちゃんは何んとも思わなかったのかな？

ふとみると愛花ちゃんが、私の腕にすがるようにして上目遣いでじっと私の顔を見ている。

「どうしたの？」

「優希先輩こそどうしたの？先輩らしくないし、なんだか顔色が悪いみたい。疲れてる？」

「そう？そんなことないよ、私はいたって元気よ」

愛花ちゃん私の顔を凝視したまま動かない。

少し間をおいて「だったらいい」そう言ってまた笑顔に戻る

あんな風に態度や顔に出してしまうなんて、ましてや愛花ちゃんにまで心配されるなんて…… 私ってつくづく最低だ。

部屋に入るともうすでに彰弘も委員長も来ていた。

今日は私達が大輔の家を借りてパーティーをすることになっていたので、大輔の両親はホテルのディナーに出かけたらしい。

「今日の料理はほとんど桜花ちゃんが作ってくれたんだ。美味しそうだろ」

大輔が自慢げに言う。

「凄いわね。これ咲原さんが作ったの？」

委員長が驚くのも無理はない。桜は基本不器用なんだけど料理だけは上手だからね。

その辺の料理屋で食べるよりも美味しい。

「いいえ、殆どお母様が作ってくれて、私はちょっと手伝っただけ謙遜しているけど、褒められて機嫌よさそうだ。さっきの事はもう気にしてない様子だ。」

「いいえ、お母様が…… お姉ちゃん気持ちわるゝ。お母様だってせっかく桜の機嫌が直ったのに、愛花ちゃんが茶化すようにものまねをする。」

「あんたはさっきから私に喧嘩売ってるの？」

このパターンは……

「ああゝ優希先輩助けてゝ」

やっぱりきた。

また腕を組んで離さない。

「だからあんたを参加させるのは嫌だったのよ。いい加減にしなさ

いよ」

「まあまあ。桜、落ち着いて」

私はあえてさっきの事などなかったように、二人の間に入る。

「ゆきちゃんも愛花を甘やかさないで」

この口調だと、桜もさっきの事は全く気にしてない様だ。よかった。

桜と愛花ちゃんのやり取りを見ている委員長や大輔は大笑いしている。

彰弘はというと、笑ってはいるが無理やりって感じがする。

逆に何か思いつめたように顔がこわばっているようにも見える。

なにはともあれ、こうして桜が腕によりをかけた手料理を食べながらのパーティーが始まる。

料理に関してはみんな大絶賛だ。私は何度か桜の家で桜の作った料理を食べさせてもらった事があるので、今更驚きはしないけど皆は桜の本格的な料理に心底驚いていたようだ。

ただ、鶏の一羽まるごとのグリルはいいとしても、フォアグラやロブスターなどの高級食材が並んでるのはどういう事だろう。3千円の会費ではとてもまかなえそうになさそうだけど。どうなってるんだろう？

こっそり桜に耳打ちする。

「桜、会費でこれだけの料理できたの？」

すると桜も小声で返してくる。

「大輔くんのお母様が食材を準備してくれたの」

そうだったんだ、聞かなきゃよかった。

「それに、大輔くんの家のキッチン凄いいんだよ」

「何が？」

「調理器具がすごい立派なのがいっぱい揃ってるの」

「へえ」

私は興味なさげに返事をするが桜は嬉しそうに話す。

「オーブンも、ものすつごく大きいのがあるんだよ。だから鶏も1羽まるごと焼けたの」

桜は料理を作るの好きだから、興奮する気持ちはわかるけど……そろそろ話を切り上げたいと思っていたところで、丁度良い合いの手が委員長からでてきた。

「今日は私のお勧めのビデオ持って来たの、皆で見ない？」

映画は「34丁目の奇跡」といってクリスマスをテーマにした映画らしい。

確かにこんな日にぴったりだ。

「はい。私見たい」

愛花ちゃんがささず返事をする。

もちろん誰も反対することもなくビデオを見ることになった。

第50話 「クリスマス」引っ越し

映画のあらすじは。

自分は本物のサンタクロースだと言い張る『クリスマス』という老人が、百貨店のおもちゃ売り場で働くことになることから物語は始まる。クリスマスは子供たちやその親たちのクリスマス・プレゼントの相談に乗り、ほかの店の方が安ければそっちを教えてあげたりして大盛況となる。しかしライバル百貨店の罠により自称本物のサンタは精神異常者として病院送りにされてしまう。

そして裁判に……

夢を信じることの素晴らしさをテーマにした心温まるドラマだった。

「委員長ありがとう。すごく良かったわ」

映画で、ある子供に『クリスマス』が言った「信じる心を失ったら、疑うだけの人生になってしまう」この言葉に桜がいたく感銘を受けていた。

「夢を信じる心、人を信じる心、そうよ信じる心。これを忘れちゃいけないよね」

桜が『信じる』というキーワードを何度も繰り返す。

もともと桜は人を疑うなんてことはしないんだろうけど、そう何度とも言われると今の私にとっては居心地が悪い。

委員長が時間を気にしている。

「もう8時回っちゃったわね」

「もう帰る時間？」

「うん、あまり遅くなると帰るのが億劫になってしまうので」

そういえば委員長と彰弘は電車で帰らないといけない距離だった。彰弘がもう少しと引きとめたが結局帰っていった。

その後も映画の話などで盛り上がり、愛花ちゃんなんかは小腹が空いたと言ってはまた料理をつまんだり、楽しく過ごした。

そうして時間を忘れてしばらく楽しんでいたが、ふと時計を見るともう10時になるうとしていた。

愛花ちゃんはお腹も満たされ、遊び疲れたのか3 40分前からソファで眠っている。

私も少し長居し過ぎた。そろそろ帰ろうかと思い席を立つ。

「優希帰るのか？」

彰弘が私に話しかける。

「そうだね、もう遅いしそろそろ帰るわ」

「ちよつと待つてくれ」

どうしたんだろう？さっきまで普通に楽しんでいた様だったのに急に暗い顔なんかして。

「皆に話があるんだ」

「話？」

「実は、俺、この冬休み中に引っ越しするんだ」

え？引っ越し？

「引っ越し？どうして急に？卒業まであと少しなのに？」

相当驚いたんだろう、桜が間髪入れずに聞き返す。私も驚いた。

「桜花ちゃんの言うとおりだ、引っ越すにしてももうすぐ卒業なのに、それまで待つてもらえないのか？」

大輔の問いかけには答えずに彰弘が続ける。

「俺は桜花ちゃんの事が好きだ」

一瞬にしてこの場の空気が張り詰める。

彰弘、この期に及んで何を言いだすんだ。せつかく良いムードで楽しんでいたのに。

「今でも好きだ。でも、桜花ちゃんは大輔の彼女。そしてその大輔は俺の親友。今日の二人を見ていて思ったことは、二人の間に俺なんかが入りこむ余地がないってことだ」

今日わかったの？今日の様子なんて見なくても、初めから彰弘の

入る余地なんてなかったでしょ？

もちろん私もだけど……

「桜花ちゃんのことを好きだから辛いけど、二人ならきつと幸せになれると思う。だから俺は今現在をもつて桜花ちゃんの事は諦める」

彰弘はそう言って私をみる。

つられて大輔や桜も私をみる。

彰弘、なんで私を見るの。二人が注目しちゃうじゃない。また変に勘ぐられると困るんだから。

それに今更諦めるもなにも、彰弘や私は初めから蚊帳の外だよ。

「だから俺は引越しをすることにした」

彰弘が話を続けた事で二人がまた彰弘を見る。

「彰弘の言いたいことは分ったけど、急に引越なんて」

「実は、両親はもう既に東京に行ってるんだ。卒業まで後少しだからということ、俺だけ親戚の家に世話になって残っていたんだけど、もうここに留まる意味もなくなったし、俺もさっさと東京へ行くこうと思って」

なるほど、そういうことだったのね。

桜も何か言いたそうだけど、自分達が原因だと言われてるのでなんともし言い様がないようだ。

「まあいいじゃない。いずれ引越すのは決まってた様だし、それが少し早くなっただけでしょ」

私は湿っぽい雰囲気振り払うために、わざと冷たい言葉を發した。

「そりゃそうだけど、もう少し寂しそうにしたらどうだよ。お前はホント可愛気がないよな」

そう言って彰弘が笑うが、二人は笑わない。彰弘も冗談で返したつもりだろうけど、こんな状況ではとても笑えないでしょうね。

「そういうことで、冬休み中に引越すので今日が皆と会うのも最後だ。元気でな」

だれ一人言葉を發することが出来ない。

「なんだよ。もうちょっと寂しいわ、とか向こうに行っても俺のと忘れるなよ。とか言えないのか？」

「ああ、すまん。そうだよな。引越しても俺達が友達つてのは変わらない。こっちに戻ってきたらすぐに会いに来てくれよ。俺もいつか会いに行くから」

「ああ」

「彰弘、あんたはバカだけど素直でいいやつだよ。素直なバカというのは結構人に好かれるから向こうでも元気だね」

「は？優希。お前それって俺を貶してるよな？それともまさか褒めてるつもりか？」

「思いつきり褒め言葉じゃない」

彰弘と大輔が笑う。

桜はまだ暗い顔をしたままだ。

「葵くん、私…… ごめんなさい」

「なんで謝るの？桜花ちゃんは何も謝ることなんかないよ。俺の勝手な横恋慕だし」

桜は俯いたままじっとしてる。

でも彰弘、今時『横恋慕』なんて単語使う人いる？あんたおかしいよ。

「桜花ちゃん、最後に1つだけお願いがあるんだけど」

「なに？私にできることならなんでも」

「握手して」

そう言っつて彰弘が手を差し出す。

「あんたはセクハラおやじか！」

私が茶化す。

「べ、別にいいだろ。握手くらい」

桜花が無言のままそつと彰弘の手を握る。

「桜花ちゃん、色々ごめんね。そして元気だね」

「私の方こそごめんね。何も応えてあげられなくて」

「いいんだよ。俺が勝手に好きになっただけなんだから」

桜はどんな顔をすればいいのかわらないようだ。

「葵くんも元気でね。引越したからと言って二度と会えないわけじゃないんだし、また皆で会いましょ」

「そうだね。また皆で集まろう」

皆が大きく頷く。

「じゃそろそろ帰るわ」

「おう、送っていくよ」

「私も」

そう言って三人が部屋を出る。

桜達が玄関に着いたのを確認してから、そつと愛花ちゃんに話しかける。

「愛花ちゃん、みんな出て行ったよ。もう起きてても大丈夫だよ」

そう言つと愛花ちゃんはプールで潜水でもしていたように、『ぷはあ』と言つて起き上がる。

「目が覚めたらなんか深刻な話をしてるみたいでびっくりした」。思わず寝たふりしちゃった」

「そうでしょうね。愛花ちゃんの挙動不審な態度はしっかり見てたよ」

私はその時の様子を思い浮かべてにやにやしてしまう。

「優希先輩気付いてたんですか？」

「うん。こつちからだと愛花ちゃんの様子がよく見えてたから。薄目あけてたでしょ」

「えええ！ばれてたの？」

「うん。さ、彰弘も帰ったし、さっさと片付けを終わらせて私達も帰りましょか」

「はあゝい」

委員長が帰る時にあらかた片付けていたので、それほど散らかってはいないが、場所を提供してもらっているのにこのまま放つては帰れない。

愛花ちゃんと二人で片付けていると二人が戻ってきた。

「ゆきちゃん。片付けはいいよ」

「なんで？」

「これから大輔くんと二人で片付けておくから」

「ええ。お姉ちゃんまだ帰らないの？」

「ゆきちゃんごめん。自転車、私の家に停めてあるんでしょ？申し訳ないんだけど愛花を送ってもらってもいい？」

「え？あ、ああ。いいよ。でも桜、もう遅いのに帰り道一人で大丈夫？」

「それは大丈夫。俺が責任を持って送って行くから」
それを聞いた私はすぐに愛花ちゃんの手をとる。

「愛花ちゃん帰ろ！」

私は愛花ちゃんの手を強引に引つ張って玄関に向かう。
大輔、責任って何の責任よ！

愛花ちゃんは私に引きずられるように玄関まで移動する。

「先輩まって、ポーチ……」

「あ、ごめん。愛花ちゃんポーチを持ってたね。ここで待ってるから早く取っておいで」

愛花ちゃんが小さく頷く。そして私の顔をじつと見てくる……

「な、なに？」私はたまらず目を逸らす。

しばらく視線を感じていたが、愛花ちゃんは黙ったまま小走りで部屋へ戻って行く。

私の今の態度は完全におかしかった…… はあ、またやっちゃった。

大輔の家をあとにして愛花ちゃんと手を繋いで夜道を歩く。

「先輩さっき怖い顔してた」

その言葉にドキツとする。

「そ、そう？そんなことないよ」

愛花ちゃんが足を止め、また私の顔を凝視する。
今度は私も目を逸らさないように我慢する。

少し間をおいて「うん。じゃあいい」

そう言って愛花ちゃんにはっこり微笑み私の腕にしがみついてくる。

内心ホツとしながら、この左腕は私の物だと言わんばかりの行動にも、愛花ちゃんの思っように腕を預ける。

「先輩。今日はありがとうございました。気をつけて帰ってくださいね」

家まで送りとどけると、今度は愛花ちゃんが私の事を心配してくれる。

「大丈夫よ」

私は愛花ちゃんが鍵を閉めるのを確認してから自転車にまたがる。「あれ？」

乗った瞬間違和感を感じる。なんだかおかしい。タイヤを見てみると見事にペチャンコだ。

仕方なく自転車を置いて帰ることにする。

チャイムを鳴らし、パンクしてる事を愛花ちゃんに一言告げて玄関を離れる。

歩いて帰ることに愛花ちゃんは心配していたけど、大丈夫だと言いつ張って夜道を一人自分の家に向かう。

今日はいろいろあった。

楽しかったこともあったけど、二人の仲の良さを見せつけられて嫌な気分にもなった。

彰弘の気持ちもよくわかる。きっと同じような気持ちのはずだ。

出した答えは正反対だけだ。

公園脇の歩道には、本格的な冬の訪れを告げるように、柗の花が冷たい風に煽られたくさん道端に落ちてている。その崩れた花びらは、まるで今の私を哀れんでいるようだ。

私は道端に寄り柗の花を蹴り飛ばす。

アスファルトまで蹴ってしまった爪先に痛みが染み出す。その現

実的な痛みが、心の痛みを少しだけ和らげてくれるように感じる。

私はもう一度、今度は力任せにアスファルトごと柵の花を蹴り飛ばす。

「痛っ」

街灯一っだけの薄暗い路地の中、痛みを耐えながら考える。

愛花ちゃんは桜と違って敏感だ、気をつけないと……

第50話 「クリスマス」引っ越し（後書き）

今回は珍しくボリュームありましたよねw
いつもの2話分くらいあります。

さて、クリスマス編もこれで終わりです。
次ぎはどうなるんでしょうねえ。

第51話 大学入学

「ピー、ピー、ピー」

洗濯終了のアラーム音が洗濯機から流れる。

いつの間にかアルバムに見入ってしまったようだ。時計を見ると11時半を少し回っている。

確かアルバムを見始めたのが11時頃だったので、30分くらい見てたことになる。

洗濯機の中はバスタオルだけなので手早く干して、またアルバムを手にとる。

主人は夕食を済ませて帰ってくる予定だし、慌てることはない。そう考えて、私は大学時代のアルバムを開く。

「見て見て、ゆきちゃん、サークルの勧誘の人がいっぱいいるよ」

「そうだね、桜は何か入りたいのあるの？」

私達3人は無事地元の国立大学に入学することができた。

今日は入学式があり、それが終わってから学内をゆきちゃんと二人で見学している。

「私はなんでもいい。でも何かには入りたいな」

具体的には何も決めてないけど、せっかく大学に入ってからにはどこかのサークルには入りたいと思っていた。

「私は入っても、入らなくてもどちらでもいいかな」

ゆきちゃんはサークルにはあまり興味がないようだけど、入るのも悪くないと思ってる感じた。

「それならせっかくだし、どこか入りましようよ」

「大輔はどうするの？一緒に入るの？」

「一応そのつもりみたい。だから3人で入れるようなのを選びたいなって思ってる」

「私はなんでもいいよ。桜に合わせるよ」

サークルに入ることにあっさり承諾してくれた。

「ありがとう」

「それより、大輔もこんな日にわざわざバイトなんて、行かなくてもいいのにね」

「なんか人が足りないから、どうしても来てほしいって言われたみたい」

大輔くんは入学式が終わったらバイトのためにすぐに帰って行った。

サークルに関しては大輔くんもゆきちゃんもなんでもいい、って言うてくれてるのでゆっくり見て回りたいな。

「それにしてもホントいっぱいあるね」

「そうだね、多すぎて決めきれないね。まずはある程度ジャンルを絞って決めようか」

「そうね、私運動系はちょっと……」

「わかってる、桜は運動が苦手だからそれ以外だね」

「うん。ごめん」

「いいよ、私だって大学に入ってまで運動したいとは思ってなかったし」

よかった、ゆきちゃんが運動系に入りたいって言ったらどうしようかと、内心ひやひやしていた。

「ジャンルは文化、メディア、演劇、学術、語学、音楽ってところかな」

簡単にジャンル分けしても結構たくさんある。

「これだけあると決めきれないね」

「とりあえず順番に見て回ろうか、ゆきちゃん時間大丈夫？」

「私はいつもフリーだから大丈夫だよ」

「じゃもう一回正門の所から順番に見て行きましょ」

「え？一番始めから見るの？もうあっちは見たじゃん」

「だめ、さっきはちゃんと見てなかったからもう一回始めから」

ゆきちゃんは苦笑いしながらも嫌そうじゃなく、初めから一緒に見て回ってくれる。

「はい、じゃここから。スタート」

私は二人だけに聞こえるような小さな声で、元氣良く掛け声をあげてサークル見学をスタートさせる。

どれくらい見て回ったんだろう？少し疲れてきた。

「桜、どう？なにか良さそうなのあった？」

「いくつか良さそうなのはあったけど、どれもこれも決め手に欠けるね」

「そうだね、それよりも勧誘の人が必死すぎてうざいところもいっぱいあったよね」

「うん、楽しんでる人もいるけど、必死な人もいるね」

「ちよつと疲れてきたね」

私に付き合ってもらってるので良いにくかったけど、実は私もだいぶ疲れていた。

「休憩しましょうか」

さつき回ってる時、どこかでコンビニを見たような気がするんだけど……

「どこかにコンビニあったよね？」

「うん、私もそれ考えてたの、どこだったっけ？どこかの棟の1階にあったはずだけど何号棟だったっけ」

記憶を辿り戻ろうとした時、ゆきちゃんがいいものを見つけた。

「あつ、あそこにカフェがあるみたい。あそこ行こうか」

コンビニのベンチで休むよりゆっくりできそうだ。

「うん。そうしましょ」

私達はカフェで休憩することにした。

「どう？桜、ある程度の候補は決まってるんでしょ？」

「そうね、ある程度は決まってきたよ」

そう言って私は、有機栽培されたコーヒー豆を独自にブレンドしたというこの大学のオリジナルブレンドのアイスコーヒーをストロ―で一口吸い上げる。

普段はコーヒーよりも紅茶を好んで飲むんだけど、販売員のお姉さんがお勧めだというので飲んでみたけど確かに美味しい。

「何にするの？」

ゆきちゃんも同じコーヒーを美味しそうに飲んでいる。

「絵画か演劇か、あと写真なんかも候補かなあ」

「演劇？それはダメ」

「どうして？」

ゆきちゃんって演劇嫌いだったのかな？知らなかった。

「だって、練習とか面倒くさそうだもん」

なんだ、そんな理由だったのね。思わず笑ってしまう。

「桜、何笑ってるのよ」

「ごめん、だって理由が面倒くさいって」

「でも、好きじゃないとあんなことはできないよ、きっと練習とかも厳しいだろうし」

「確かに団体でやるものだし、嫌々だと迷惑かけちゃいそうだね」

「絶対迷惑かける。自信あるからそれはやめよう」

「そうだね、ゆきちゃんが乗り気じゃないなら演劇は候補から外しましょ」

いろいろ話しているうちに、ゆきちゃんはコーヒーを飲み終わる。

私も残りのコーヒーを一気に飲み干し立ち上がる。

「じゃもう一度戻って絵画のサークルと、写真サークルを見てどっちかに決めましようか」

「そうだね、そのどちらかなら私もオーケーだよ」

私達は紙コップを所定のごみ箱に捨ててお店を出る。

絵画サークルって確かこっちだったような……

「ゆきちゃん、こっちであってるよね？」

「わかんない。合ってるような気もするけど自信ない」

たった今わかった。私もゆきちゃんも少し地理に弱いみたい。
さつきからちよくちよく軽く迷子になる。

「あつ、こんなところに近道があるよ。きつとここ通って行ったら
さつきの場所にでれるんじゃない？」

「わかんないけど迷子になっても学内だし、いろんな所見て回るの
もいいんじゃない？」

「そうだね、じゃ近道してみましよう」

小道を抜けると、まだ見たことのない棟に出てきた。

「ゆきちゃん、ここどこ？」

「私に聞かれても困るよ、桜が近道って言ったんじゃない。だいた
いどこに繋がってる道かわからないのに、始めっから近道って決め
つけるのもどうかと思ってたんだよね」

そう言って、私が勝手に近道と決めつけていた言動が、おかしく
って仕方ないという様に大笑いしている。

「そうだけど……近道だと思ったんだもん」

「まあどこだっていいじゃない、時間はいっぱいあるし慌てること
ないよ、散歩、散歩」

ゆきちゃんは何も気にしてない様で、散歩と言って今を楽しんで
るようだ。

「そうね、じゃのんびり歩きましょう」

最近は大輔くんと二人か、三人一緒に行動することが多くなって
たので、ゆきちゃんと二人でこんな風にのんびりする機会が減って
いた気がする。

久しぶりにとっても楽しい気分だ。

「桜、なににやけてるの？気持ち悪いよ？」

「もう、気持ち悪いってなによ」

「あはは、ごめんごめん」

二人で歩いているのが楽しい。なんていうのは、気恥ずかしくて
言えない……

「あっ！」

私は教室の壁に貼られている1枚のポスターを見て声を上げた。
ゆきちゃんがびつくりして「どうしたの？」と言いながら私の視線の先を確認する。

「なに？何かあったの？」

ゆきちゃんは私が何に驚いたのか分からなかったようだ。

「あのポスター、すっごく綺麗」

それは天の川を写した写真をポスターにしたようなものだった。

「ああ、あれか。そうだね綺麗だね」

「ゆきちゃん、決まったよ。私の入りたいサークル」

「そうなの？まだ全部見たわけじゃないし、もう一回絵画サークルも見に行くって言うてたけど。決めちゃっていいの？」

「うん、私これみてピンと来た。決めちゃってもいい？」

「写真サークルだね？もちろんいいよ」

「違う違う」

「ええ？この振りで写真サークルじゃないの？じゃ絵画サークル？宇宙の絵でも書くつもり？」

「違うよ」

「絵画も違うの？じゃ何？」

「ほらここ見て」

そう言うて私はポスターの左下を指さす。

そこにはこの写真を撮った人の名前とサークル名が書かれていた。

「天文同好会、ここに入りたい」

「天文同好会？」

「うん、きつとこんな綺麗な宇宙を見れて、写真も撮れるんだよ。私ここがいい」

「なんだ、写真でも絵画でもないのね。まあ桜がそう言うならそれでいいよ。元々私はどこでも良かったんだしね」

「ありがとう、じゃここにしましょう。大輔くんもきつとオーケーしてくれると思うし」

「そうだね、大輔も桜が決めた事に文句を言うはずないしね」

そんな風に言われると照れるのと同時に、私一人が皆を振りまわしてるみたいで、少し申し訳なく思ってしまう。でも誰も嫌な素振り一つ見せずに合わせてくれるのでつつい甘えてしまっている。

「じゃ、今から行ってみようか」

「ううん、もう気持ちは天文同好会に決定してるから、明日大輔くんと一緒に3人で行ってみたい」

「そうだね、その方がいいかもね。じゃ今日は帰ろうか」

「うん。でもお腹空いたし何か食べて帰らない？」

「賛成、私もお腹空いてきてたの」

「じゃ何か食べに行きましょ、今日は私に付き合ってもらったから私がおごるよ」

一日振りまわしたから、これくらいのお礼はしないかね。

「そんなのいいよ。私も楽しんだし」

「ううん、お礼がしたいの。お願い私におごらせて」

「そう？でも私と桜の間柄でお礼なんて別にいいのに」

「今日はそんな気分なの。久しぶりに二人でゆっくりできて楽しかったし」

「わかった、じゃ今日はごちそうになります」

「あんまり気を使うようだったら、カラオケはゆきちゃんのおごりでもいいよ」

「え？カラオケも行くの？桜は元気だなあ」

そう言っただけで、まんざらでもなさそうだ。

その日は結局二人でイタリアン料理を食べて、それからカラオケに行った。

カラオケでも大いに盛り上がって、帰宅したのは10時を過ぎていた。

楽しい入学の日だった。

第51話 大学入学（後書き）

いよいよ大学編スタート。

今後、桜花・優希・大輔達はどんなことになるんでしょう。
お楽しみに〜

第52話 歓迎コンパ1 / 人物紹介

「第二次ベビーブームということで、大変な倍率にもかかわらず見事我が大学に入学し、あまつさえ我がサークルにその大学生活の第一歩を踏みいれた不幸な三人組が、さらに迷える子羊とならんことを祈りつつ乾杯！」

乾杯の掛け声とともに一斉に皆がグラスを合わせお酒やジュースなどを飲む。

「部長、今の挨拶最後の方わけわかりません」

「何？何がわからない？おかしかったか？」

「普通におかしかったです」

乾杯のあいさつをしてくれたのが、3年生の『牧野芳郎』先輩。

部長ということらしい。

その部長に突っ込みを入れているのが、2年生の『下田新之助』先輩。

今日は私達三人が入部した天文同好会の新人生歓迎コンパということで、大学近くの居酒屋で集まっている。

この居酒屋、店名は『きょうめいかん 暁明館』と言って、居酒屋というよりは焼肉屋のような名前になっている。

ここは学校に近いこともあり、学生のコンパだけではなく、サークルのミーティングなどにも使われたりと、学生の溜まり場となっているらしい。

2階建ての居酒屋は、入口から通路が真っすぐ伸び、一番奥が2階へと上がる階段になっている。

1階は通路を挟んで右側がカウンター15席ほどで、その奥に4人掛けのテーブルが2つ置いてあるたき 炊敷になっている。左側は4人掛けのテーブルが5つある。

2階は階段を上がると左側が通路になっていて右側に個室になっ

ている座敷が5つほどある。個室はどれもそれなりに大きいようで、私達を通されたのは奥から2番目の部屋で、6人掛けを2つ繋げたテーブルがゆつたりと中央に置かれている。

今日は他のサークルも歓迎会をやってるようで、まだ5時になったばかりなのにぎょうめいかん暁明館はとても賑わっている。

「それでは新入生に1人ずつ自己紹介を兼ねて挨拶をしてもらおうか」

そう言つて大輔くんを見たのは副部長の『坂上悠一』先輩。

私達三人は各自名前を言い、そのうえで三人が同級生で一緒にこの大学を受け、三人一緒にこのサークルに入部した。と言うようなことを話した。

どうやら新入部員は私達三人だけのようだ。

「あなたたちがくるまで、女性は私一人だったから一気に二人も増えて嬉しいわ」

去年まで紅一点だったらしい女性は、二年生で会計を担当している『相沢博美』先輩だ。

「お前は女として認められてないから心配するな」

下田先輩がまたちゃちゃを入れる。どうやら盛り上げ役というかなんにでも口出しするタイプのようだ。

「なに！」

そう言つて下田先輩の右腕を思いつき叩いた。

「いてえ！なにするんだよ」

「ごめんなさい、男っぽいからつい手が出ちゃったわ」

部長も副部長も大笑いしている、私達もつられて笑ってしまう。でもさっきのは本当に痛そうだった。

「おい、宮川。お前さっきから一言もしゃべってないじゃないか。せつかくこんな可愛い子が二人も入ってきたんだから何か言えよ」

「そ、そんなこと言われても…… 宮川道雄です。よろしく」

私達三人は声を揃えて「よろしくお願いします」と言つた。

「お前は堅い！というかもうちよつと他に言う事はないのか？」

どうやら宮川先輩は大人しく比較的無口なタイプのようなのだ。

「ゆきちゃん、このサークルに決めてよかったね。とっても楽しい」「そうだね、部長も面白いし、下田先輩もいい味だしてるね」

堅苦しくない感じで、和気あいあいとしていてとっても雰囲気の良いサークルだ。

「でもサークルのメンバーってこれだけなのかしら？」

ゆきちゃんに対して小声で言っただけだったのに、部長にしっかりと聞かれていたようだ。

「咲原くん、確かに人数は君たちを入れて9人と少ない。サークル名も『同好会』となっている。だが学校にちゃんと届け出て認められた公認団体だ。だから君たち子羊は何も心配しなくてもいい。ミーティングと観測会を中心に活動しています」

一瞬人数が少ないと言った事を怒られるのかと思ったけど、どうやらそんなつもりはないみたいでよかった。

「部長、最後の方また意味がわかりません。それに部員は彼女たちを入れて8人ですよ」

「なに？9人じゃないのか？」

「西尾先輩は先月辞めましたよ？」

「それは本当か？全然知らなかった…… 部長の私に一言も言わずに辞めてしまうとは」

「きつと言ったと思います。部長が聞いてなかったただけでは？」

「なに！？しかしこれは大変な事になったぞ」

西尾先輩の存在は大きかったんだろうか？部長がずいぶん慌てている。

「3年生2人、2年生3人、3年生3人…… 負けた」

意味が分からず思わず質問してしまう。

「部長、何が負けたんですか？」

「何って…… 咲原君、2：3：3だよ？いざとなったら負けてしまっじゃないか！」

言ってる意味がよくわからない……

「多数決でも負けてしまっし」

もし3年生が3人いたとしても3:3:3だとどっちにしても多数決ではかてないのでは？

あくまでも同学年同士が同じ投票するとしてだけど……

それに『いざ』ってどんな時だろう？ そんな『いざ』となるようなことがあるのかしら？

「部長、あんまりわけのわからないことを言わないでください。新人生が混乱してます」

相沢先輩が間に入ってくれた。

「相沢君、私はさっきから変な事を言ってるか？」

「言ってます」

無口な宮川先輩以外全員口がハモる。

「ほらな、咲原君。わかったかい？ このようにいざって時に人数で負けてしまっし」

今のが部長の言う『いざ』って時だったのね。

「部長、今のは部長対部長以外全員なんで3年生の数は関係ありませんよ」

相沢先輩がすました顔で冷静な突っ込みを入れる。

「なに？ 俺の味方は俺だけか？」

「部長、暴走しすぎです」

「どうやら料理が来たようだ。芳郎はほっという皆食べよう」

副部長である坂上先輩の一言で、一気に運ばれてきた料理を私とゆきちゃんが仲居さんから受け取ってテーブルに並べる。

「おい、芳郎！ お前またなんでこんなもんばかり頼んでるんだ」

「何かおかしいか？」

「じゃがバター、じゃがいも団子、フライドポテトにポテトサラダ

……芋ばかりじゃないか」

「心配するな。大学生としての本分も忘れていない。ちゃんと大学芋も注文してある」

「そんなわけのわからない心配なんてしてません」

相沢先輩の突っ込みはタイミングが良くて笑える。

「まあ他の料理もちゃんと来てるし、とりあえず皆食べよう」呆れ顔で副部長が言う。

「桜、楽しそうだね」

「うん。楽しい。大輔くんも楽しい？」

「ああ、皆いい人っぽくてすぐに馴染めそうだ」

「ゆきちゃんもさつきから大笑いしてるし、楽しんでるみたいね」

「部長が面白すぎる」

ゆきちゃんの笑顔が見れて本当に良かった。

「二人とも楽しんでくれて良かった。私が選んだサークルだから変なところだったら私の責任だもんね」

「桜、それを言うなら楽しいけど、十分変なところだ。違った部長が変なだけか？」

三人とも自然に笑いがこみあげてくる。

その後も先輩たちのやり取りに、圧倒されながらも楽しい時間を過ごさせてもらった。

「部長、そろそろ2次会！カラオケに行きましょう」

「そうだな、料理もあらかた食べたし、腹ごなしにカラオケでもいくとするか」

第52話 歓迎コンパ1 / 人物紹介（後書き）

一度に数人新しい人物が登場しますので簡単に紹介したいと思います。

天文同好会メンバー

牧野芳郎 3年生 部長

坂上悠一 3年生 副部長

相沢博美 2年生 会計

下田新之助 2年生

宮川道雄 2年生

そして紹介するまでもないでしょうが、新入部員として。

咲原桜花 1年生

真下優希 1年生

鮎川大輔 1年生

第53話 歓迎コンパ2

暁明館ぎょうめいかんから歩いて10分弱の場所。駅の近くのカラオケボックス「アンバサダー」へやってきた。

暁明館もこのアンバサダーも駅から大学へと続く一本道の途中にある。

「いらつしゃいませ。お客さま、只今満室となっておりますお待ちしております時間が1時間以上ございます」

やっぱり今日はどこもいっぱいのようなのだ。

「部長、予約してくれてますよね？」

下田先輩が部長に確認をしている。そうよね、こんな日に予約もなしでいきなり入れるわけないよね。

「え？予約？」

どうやら部長には寝耳に水の話のようだけど。

「部長に頼んでおいたじゃないですか！」

「そうだったけ？そんな話聞いてないよ？」

「言いました」

「聞いてないなあ」

「間違いなく言いました」

言った言わないの水掛け論になってしまっている。

「下田君、君が言ったかどうかは問題じゃない。私が聞いたかどうか問題なんだ。たとえ君が言ったのが確かだとしても、この私がちゃんと聞いていなければ意味がない」

そりゃそうでしょうね。でも部長、さも正論のように言ってますがそれはただの屁理屈では？

「新之助、芳郎にそんな事を言っても無駄だ」

「でも……新生もいるのに1時間も待つなんて」

下田先輩私達の事を心配してくれてるんだ。優しい一面もあるの

ね。

「大丈夫、俺がちゃんと予約を入れといたから」

さすが副部長、そつがない。

ただ、もし部長がちゃんと予約を入れていたら、予約が重複してたんじゃないかしら？

フリータイムで入ったカラオケで、初めは皆好き好きに歌っていたが3時間が過ぎたころになると歌よりもサークルの話になってきた。

と言つても、部長と下田先輩は相変わらず歌い続けてる。

「さっきの居酒屋では、部長と新之助のコンビが暴走してしまつてちゃんと話が出来なかつたわね」

そう言つて私達に話しかけてきたのは相沢博美先輩だ。

「部長も下田先輩も楽しい方ですね」

「あれは楽しい、じゃなくておかしい人だね。新之助のことは下田先輩なんて言わずに新之助と呼び捨てにしているわよ、私が許す」

相沢先輩の話に三人で顔を見合せて笑う。

「それと私の事も博美と呼んでくれていいわよ。あなたたちはなんて呼び合つてるの？」

「私は桜」「私は優希」「僕は太輔」

それぞれに呼び名を確認し合う。

「了解、じゃこれからはそうやって呼びましょ」

三人そろつて「はい」と返事をする。

「それで、さっきは聞きそびれたけど、あなた達はどうしてこの天文同好会へ入ったの？」

「それは、桜が博美先輩の写真を見て一目惚れしたからです」

ゆきちゃんがあのポスターの事を話す。

「あら、どういうこと？」

「実は学内を見学している時に、博美先輩の撮つた天の川の写真を見て。それでこんな写真に写つてるような綺麗な宇宙そらを見たいと思

「つたんです」

「ああ、あの写真ね。あれなかなか良く撮れてたでしょ？私の会心の作品だよ」

「とつても綺麗でした。あれを見てこれは天文同好会しかない。と思いました」

「ありがとう。で？他の二人は？」

「僕たちは三人で一緒にどこかのサークルに入ろうって決めてましたので、桜がここがいいと言ったので必然的にここに決まりました」
「なるほど、仲が いい のね」

「桜と大輔は高校時代から付き合ってますしね」

ゆきちゃん、いきなりこんなところで言わないでよ。恥ずかしい。
「やっぱり？さっきのお店で二人を見ていてそうじゃないかな、って思っていたのよ」

「そうですか？」

「うん」

普通にしていたつもりだったんだけど、やっぱりわかったちゃうのかしら？

「ちよつと皆聞いてくれ」

部長が突然マイクを通して皆に話しかける。
どうしたんだろう？

「実は……」

なんだろ？真面目な顔をしてるけど。

「実は咲原君と鮎川君は付き合ってるんだ！」

ええ？

「ふふ、歌いながらもしっかり聞こえていましたよ。そうか二人は高校時代から付き合ってるのですね」

隠す必要はないけど、ちよつと恥ずかしい。

突然の事に大輔くんもやっぱり恥ずかしそうだ。

「部長、マイクを通さなくても聞こえますよ」

「鮎川君、私のことはこれから部長と呼んでくれ」

「はい。って、初めからずっと部長って呼んでます。というかそんなことよりマイク切ってください」

また皆が大笑いする。

「ミッチー、残念だったな。桜ちゃんは今もう既に先約済だ」

今度は下田先輩までマイクで話しだす。

「ぼ、僕は別に……」

下田先輩が宮川先輩をからかっている。

「案ずるな宮川君、まだ真下君が残っている。頑張れ」

部長、残ってるって、その言い方はゆきちゃんに失礼では？

「芳郎、優希ちゃんに失礼だぞ」

副部長の坂上悠一先輩が注意をする。

「ん？そうか？失礼な事言ったか？」

「部長、思いつきり失礼ですよ。優希ちゃんがかわいそう」

博美先輩も部長を責めるけど、当のゆきちゃんは全く気にしていないようだ。

ゆきちゃんはそんなことで怒るようなタイプではない。

私は小声でゆきちゃんに話しかける。

「なんかゆきちゃんの話で盛り上がりだしたね」

「ホントだね、あの部長の言うことだし別に失礼なんて思わないけどね」

「だよね」そう言って二人でくすりと笑う。

「芳郎、そんなことよりそろそろ帰らないと電車がなくなるんじゃないのか？」

坂上副部長の言葉で全員が時計を見る。

「ホントだ、そろそろ帰らないとやばいな。まあ私はいざとなったら悠一の家泊まるけど」

「断る！」

部長あっさり断られてる。

「なんだよ、悠一冷たいな」

「迷惑だから電車のある今のうちに帰ってくれ」

言葉だけ聞くと、取りつく島もないという感じだけど、言葉とは裏腹に全く迷惑がってないのは、二人のやり取りを見ていればわかる。

部長も副部長に対してだけは、苗字じゃなくて名前で呼んでるし、きつととても仲がいいんだろうな。

「しかし悠一の言うとおりだな。それでは今日はこの辺でお開きにします。皆さん各自勝手に帰ってください」

「部長、最後の言い方冷たい」

こうして下田先輩の突っ込みで最後を締めてお開きとなった。

私達三人は同じ電車に乗り、一度電車を乗り換え同じ駅で降りる。4月も終わりに近づき、夜でもだいぶ暖かくなってきた。

はしゃいで火照った体に夜風が心地良い。

「じゃ私はここから自転車で帰るよ。大輔、桜をちゃんと送って行つてあげてよ」

「おう、もちろんだ。心配するな」

ゆきちゃんの家も、私の家からそれほど離れてるわけじゃないけど、駅から見るとゆきちゃんと私達は方向が違う。大輔くんの家は私と同じ方向では私の家よりまだ奥になる。

ゆきちゃんが角を曲がるまで見送ってから、私達も自転車で家に向かつて走り出す。

「今日は楽しかったね、ゆきちゃんもすつごく楽しんでたみたいだし」

「そうだな、でも今日は優希の心配ばかりしてなかったか？」

「心配？」

心配ってなんだろう？

「心配というか、楽しんでるかどうかを凄く気にしてたように思ってたから」

そう言われてみればそうかもしれない。

いつからだろう？ゆきちゃんのつまらなそうな顔を見ることが増

えた気がする。

それが知らないうちに気になっていたのかもしれない。

最近楽しそうにしていたといえ、入学式の日にサークル見学していた時くらいしか思い浮かばない。

「そんなことないよ。私が強引に決めちゃったサークルだったけど、楽しんでくれてたみたいだから嬉しかっただけだよ」

「そうか、それならいいんだけどな。ちなみに俺だって桜の決めたところに自動的に入ってるんだよ」

「そうだったね。楽しんでくれた？」

「ああ、すつごく楽しかったよ」

「よかった」

「送ってくれてありがとう、大輔くんも気をつけて帰ってね」

「ああ、お休み」

「お休み」

大輔くんが角を曲がるまで手を振る。大輔くんも名残惜しそうに何度も振り返る。

振り返ってくれるのが嬉しくて私はずっと手を振り続ける。

第54話 初ミーティング1

「ゆきちゃん、この講義終わったらどうする？ミーティングは5時からだからちよつと時間あるよね」

「そうだね、どうしようか？」

「まだ学内の地理が把握できてないから、一緒に散歩でもしない？入学式の日の散歩が楽しかったので、また一緒に散歩したくなつたのだ。」

それとあの日のゆきちゃんの楽しそうな顔もまた見たかったし。

「大輔は今日もバイト？」

「うん。今日は初めてのミーティングがある日なのにね。最近バイトが忙しいみたい」

「そうか、バイトなら仕方ないね。じゃ二人で散歩行こう」

学校は駅から一本道で正門に繋がっている。

正門を入るとまず目につくのが門の左右に植えられている6本の桜だ。

今はもう花は全て散ってしまつて葉桜となつているけど、入学式の日は八重桜が満開で、風が吹くとざわざわとピンクの花びらを揺らして、私達新生を歓迎してくれているようだった。ただ6本中1本だけ枝垂れ桜が植えられているのが不思議だった。その枝垂れ桜は紅枝垂れだろつか、散つた今となつてはもう見ることはできないけど、ピンクの八重に混じつて赤がとても綺麗な花びらだった印象が残っている。

私の名前は桜と花が入っているので、花全般好きだけど桜は特に好きだ。入学式の日はこの桜達を見ただけでテンションが上がった。

「桜、なに物思いにふけつてるの」

「あ、ごめん。正門の桜が綺麗だったなあって思いだしてたの」

「そうだね、あの桜は見事だったね」

「うん」

そんな話をしながら自然と正門へ向かう。

「でも、あの池も大きくて立派だよな」

「そうだ、まん丸に作られたあの池も立派だ。」

正門前は半円形の広場のようになっていてのだけど、入学式の日にはここにいろいろなサークルがテントを張ったり、テーブルを出してきたりして新入生を勧誘していた。その広場から正面と左右に道がのびている。と言っても左右は斜め45度の角度だ。丁度半円の広場に矢印が刺さった様な感じになっている。

その道の中央を進むと、すぐに大きな池に突き当たる。そしてその池を中心に、また四方八方に道がのびている。その道からいろいろな棟や体育館、グラウンドなどへ行くことが出来る。

入学式は池から北西へとびる道の先にある体育館で行われた。

学校の敷地は高校とは比べ物にならないくらい広い。だから学校の中にこんな大きな池が作れるんだろう。池の真ん中には大きな石が置かれている。それに水草も浮かべてあり、鳥なんかも飛んできてとても趣がある。

鳥については疎いので種類がわからない。雀や鳩、鶴くらいならなんかわかるのだけど……

「ゆきちゃん、あの池って大きさどれくらいあるんだろう?」

「さあ、どれくらいあるんだろうね」

「学内にあるって考えるとすっごく大きいよね」

「うん、凄く大きいね」

「うん」

結局私もゆきちゃんも大きいと言うだけでしか表現できない。

「まだ40分くらいあるし、今日は池の向こう側、野外ステージのある方に行ってみない?」

「あっちの方は私達にはあまり関係ないと思って、殆ど行ったこと

ないからね」

「そうでしょ。だから行ってみましょうよ」

「そうだね」

私達は正門から池まで行き。池をぐるっと半分回ってその奥へ続く道を歩く。

「ゆきちゃん、こっちであってるよね？」

「たぶん」

少し歩くと。

目的の野外ステージが見えてきた。ここまでの道が少し高台を通る感じで高くなっているのここからだステージ全体が見下ろすようにステージ全体を見渡せる。まだ時間が早いのか、それとも今日は使われる予定がないのか誰もいない。ただ1人を除いては。

「ゆきちゃん、誰もいないね」

「そうだね、今日はどこも練習とかしないのかな？」

「でもあの観客席の所に1人だけ座っている人がいるね」

「本当だ、隅の方に1人座ってるね」

「とりあえずもう少し近くへ行ってみましょう」

「時間大丈夫かな？」

「まだ集合時間まで20分以上あるし大丈夫でしょ」

「帰り道で迷わなければね」

ゆきちゃんがにやけ顔でいう。

そうか、私達の場合迷子の計算もしておかなければいけないのか。いや、いくらなんでももう迷わないでしょ。

「大丈夫よ。せっかくここまで来たんだしもう少し近くで見てみましょうよ」

「いいよ」

そう言っ私達はステージまで道を下って行く。

「誰でも中に入っても大丈夫なのかな？」

「鍵が開いてるなら入ってもいいんじゃない？」

「なるほど、ゆきちゃん頭いい！」

ステージの観客席側の扉はいくつかあるが中央の一つが解放されている。

「ゆきちゃん、あそこから入れるんじゃない？」

「そうだね、行ってみようか」

私達が中央出入り口へ向かって歩いていると、中から誰か出てきた。

「あつ、宮川先輩」

私達に声を掛けられたて相当驚いているようだ。

「や、やあ。君たちか」

宮川先輩、どうしてこんなところに？

「こんなところで何をしてるんですか？」

「君たちこそどうしてこんな所に？二人だけかい？」

そう言つて私達が二人なのかどうかを気にしてるようだ。

辺りをずいぶん注意深く見回している。

「はい。私達二人で学内を見学していて、ここに辿り着いたんです」

「そうか、もうミーティングが始まるよ。早く行かないと」

「はい」

と返事が終わるか終わらないうちに、先輩は急ぎ足でミーティングルームのある棟へだろうか、その方へ向かって歩いて行った。

「ゆきちゃん、宮川先輩なんか慌ててたね」

「そうだね、何かあったのかな？挙動不審だったよね」

「不審かどうかわからないけど、こんなところで私達とはち合わせてバツ悪そうだったね」

「どうする？中にはいる？」

「時間的にはまだ少し余裕はありそうだけど、どうしようか」

「間に合わなそうなら走ればいいし、ちよつと入ってみよう。さつき高台から見た時に観客席に居た人って、きっと宮川先輩でしょ？なんかあやししい入ってみよう」

ゆきちゃんなんだか生き生きしてるなあ。

そんな事を考えながら立ち止まっていると「桜、時間あんまりないんだから急いで」と急かされる。

「ああ、待って」

私は慌ててゆきちゃんの後を追う。

「桜、さっき見た時に先輩の座ってた場所ってこの辺りよね？」

「そうだね、この辺りで合っているとと思う」

「何もないなあ」

「何かあると思ってたの？」

「あるとは思ってないけど、あるかもしれないとはちょっと思ってた」

「どういうこと？何かあるの？」

「さー」

ゆきちゃんにはなんか考えがありそうな感じだ。

「何？何かあると思ってたの？教えてよ」

「わかんないけど、例えばカメラとかあるのかな？と思っただけ」

「カメラ？」

「そう、隠し撮りでもするのかと思って」

「宮川先輩がそんなことするわけじゃない。もうなに言ってるのよ」

「そうかな？」

「そうよ、ここに一人で居ただけでそんな根拠のないこと思っちゃダメよ」

「そうだね、何もないし先輩は白だ」

「もう変な事言っで楽しまないでよ」

そう言うゆきちゃんは笑って「ごめんごめん」と言った。どうやら半分は冗談だったようだ。

「それより、そろそろ急がないとミーティングに遅れそう。桜は足が遅いから急ごう」

「ホントだ、もう10分くらいしかないね。急ぎましょ」

私達は大急ぎで、ミーティングのある12号館3階12303教室へ向かう。

第55話 初ミーティング2

廊下を走りながら時計を見る。2分前、なんとか間に合いそうだ。ゆきちゃんの方が足が速いので、私の前を走っている。

一足先に教室着いたゆきちゃんが、ドアに手を掛けて私のことを待っている。

私は息を切らせて「お待たせ」と言う。それと同時にゆきちゃんが教室のドアを開ける。

「遅くなりました」

私の声が教室に響き一斉に皆が私達二人を見る。

いつの間にサークルメンバーが増えたんだろ。ざっと見た感じ20人以上はいる。

それとは逆に知った顔が1人もいない。

部長も副部長も、さっき会った宮川先輩もいない。

「あなた達はどちら様？」

1人の女性がこちらにやってきて、私達が誰だか尋ねる。

「天文同好会のメンバーです。ここは天文同好会の教室じゃないんですか？」

ゆきちゃんがその女性に問いかける。

「あなた達は新生？」

「はい」

今度は私が答える。

「じゃ今年天文同好会に入ったのね？」

「はい」

「今日は火曜日よね？火曜日はこの教室は私達が使ってるのよ。天文同好会がここを使うのは金曜日じゃないかしら。火曜日は一つ上の階の12401教室だったと思うけど」

私とゆきちゃんは顔を見合わせる。そういえば毎週火曜日と金曜日がミーティングだけど、曜日によって教室が違ったんだった。

「す、すいません。間違えました」

私は深々と頭を下げる。

「いいのよ。それより牧野君によろしくね」

「え？先輩は部長とお知り合いですか？」

「ひどいわね、私ってそんなに老けて見える？私もあなた達と同級生よ」

しまった。部長を君付けで呼ぶから勝手に上級生と思ってしまった。

「と、とんでもありません。老けてなんて見えません。すごく落着いているので、先輩かと思ってしまいました」

「別にいいわよ。それより急がないと遅刻じゃない」

「はい。あつ、名前お聞きしてもいいですか？」

同級生と言われてもこの女性は、なんとなく敬語を使ってしまう
雰囲気かもしを醸し出している

「稲村律子よ」

「はい。お騒がせしました。それでは失礼します」

「桜、急ぐ」

廊下に出た私達はゆきちゃんの掛け声と共に再び走り出す。

一つ上の階へ行くだけなので、エレベータではなく階段を使うことにする。

階段の前で一旦立ち止まったゆきちゃんが、振り返り私を見る。

追いついた私が「どうしたの？」と聞く。

「さっきの人、同じ年には見えなかったね。落着きがあって綺麗だった」

そう言ってゆきちゃんは階段を駆け上がる。私も後に続く。

確かに綺麗な人だった。でも。

「ゆきちゃんも綺麗だよ。落着きはないけど」

私の言葉の後に、ゆきちゃんが階段で蹴躓^{けつまず}いて足を踏み外し、こけそうになる。

「桜、いきなり何言うのよ。びっくりするじゃない」

「そう？でも本当よ。ゆきちゃん綺麗だよ」

「よくそんな恥ずかしい事が平然な顔して言えるね。もういいよ」

「ホントなんだけどなあ」

「そんなことより完全に遅刻だ。急ごう」

「うん」

教室の番号を確認する。『12401』今度こそ間違いない。

ゆきちゃんがドアを勢いよく開ける。

「遅れてすいません」

今度もまた一斉に皆が私達を見る。

部長に副部長、宮川先輩も、見知った顔がそこにあつた。

大輔くん以外、ちゃんと天文同好会のメンバー全員いる。

「遅刻ね」

ホッとしたのもつかの間。博美先輩の咎めるような口調が飛んできた。

「すいません」

私とゆきちゃんは頭を下げる。

そしてゆきちゃんの方をチラリと見る。

とても教室を間違っただけというように言い訳が出来る雰囲気じゃない。

そもそも教室を間違えていなくても時間がギリギリだったのだから、今それを言ってもみっともない言い訳にしかない気がする。ゆきちゃんも同じような気持ちなのか、先ほどの事は何も言わない。

「おい、博美。初っ端からそんなに怒るなよ。遅刻といつても10分も遅れてないじゃないか」

下田先輩が博美先輩を抑えてくれる。歓迎コンパの時も思ったけ

ど下田先輩って意外と優しい。

「別に怒ってないわよ。遅刻したから遅刻ね。って言うただけよ」
本当に怒ってないのかな？ちよつと怖い。

「そうか、じゃもういいな。二人ともこつちおいで」

そう言つて下田先輩が不気味な笑いと共に手招きをする。

その様子は完全にエロおやじだ。

前言撤回。『やさしい』じゃなくて『やらしい』だ。

一文字違っただけで全然意味が違う良い例だわ。

「はい」

そう返事はしたものの、ちよつと近寄り難い。

「なんだよ、そんな目で見えるなよ。冗談だよ」

「いえ、そんな……」

「ちよつと和ませてやろうと思ったただけなのに、変態扱いされたらたまらんなあ」

「す、すいません」

あのエロさは演出だったんだ。下田先輩の地かと思っちゃった。

もう一度心の中で謝っておこう『ごめんなさい』

「それはまあいい、とにかくこつちに来て座つて」

副部長に促されて、私達は指定された椅子に座る。

博美先輩も、私達と下田先輩のやり取りを見て笑っているの、
もう怒っていないようだ。

席はコの字型に並べられ、部長、博美先輩と座り、角を曲がつて
下田先輩、宮川先輩、ゆきちゃん、さらに角を曲がつて私が座り、
その隣に副部長という配置だ。

私とゆきちゃんは角々に座らされる格好だ。

横に並ぶよりも角になっている方が、ゆきちゃんの顔がよく見える
ので安心感がある。

「鮎川君は欠席との連絡を受けているので、これで全員揃ったこと
になりますね。ではミーティングを始めます。相沢君よろしく」

進行役は部長じゃなくて、博美先輩なのね。

「では、今年度初のミーティングを始めたいと思います」

今日までにミーティングは一応2回している。だけど今日が今年度初のミーティングということになっている。前回まではただの集まりという感じで、コンパの日時決めたりしてたからなのかな？

はつきりとした理由はわからないけど、とにかく今日が正式なミーティング第一回目だ。

「まず始めに副部長から年間行事について、報告いただきたいと思っています。副部長お願いします」

ミーティングが始まった途端博美先輩の言葉遣いが変わる。

他のメンバーも先日のコンパの時とは違いピリツとしているせいか、空気が張り詰めている。

私も自然と背筋が伸びる。

第56話 初ミーティング3

「それではまず年間行事について、今現在確定もしくは予定しているものを発表したいと思います」

「その前に咲原君と真下君にも資料を渡してやってくれ」

「そういえば皆何か資料を持っている。」

「ごめんなさい、渡すのを忘れていたわね」

「私達は博美先輩から回ってきた資料を受け取る。」

「では、二人とも1ページ目を見てください」

「副部長に言われてページをめくる。そこには年間行事の表が綺麗にプリントされていた。」

「私達がページを開いたのを確認してから副部長が発表を再開する。まず5月ですが、下旬に千代崎小学校での観望会。7月は七夕観望会と七夕コンパ。8月はペルセウス流星群観望会。9月上旬には夏合宿。10月はオリオン座流星群観望会。11月は上旬に千代崎小学校観望会と中旬に獅子座流星群観望会。12月中旬にふたご座流星群観望会、下旬に忘年会。1月は学内観望会。2月は冬合宿。以上が今年度の決定している、もしくは予定されている行事です」

「一度に口頭で言われても頭に入らないけど、表があるので助かる。後でちゃんと覚えておこう。」

「とりあえず既に予定がたくさん決まっているのはわかった。」

「副部長ありがとうございます。新入生にとっては初めての事だと思いますが、これらの年間行事は昨年度末にある程度決めてありました。何か質問はありますか？」

「初めてのミーティングで緊張しているが自分自身でもよくわかる。何を質問すればいいのかわからないけど、何か質問をした方がいいのだろうか？」

「そんなことを考えているとゆきちゃんが質問をしてくれた。」

「千代崎小学校観望会とありますが、この大学内からではなく小学

校で観望会をするのですか？」

「そうです、もちろん学内でも良いのですが、千代崎小学校の方がうちの学校よりも標高が高く、夜になると周りの明かりも殆どなく特に北側、西側の星は非常によく観望できる環境にあります。なので時々お借りしています。そのため千代崎の小学生とも交流を持っており、夏休みなどを利用して一緒に観望会を開いたりもしています」

なるほど。そういうことだったのね。ゆきちゃん良い質問するなあ。

「わかりました。ありがとうございます」

「桜ちゃん、何か質問はありませんか？」

突然博美先輩に名前を呼ばれ、びっくりして思わず立ち上がる。

「桜ちゃん別に立たなくてもいいのよ。座って答えてくれれば」

「はい」

恥ずかしくなって俯いてしまふ。そして先ほどよりさらに緊張してしまふ。

ちらつとゆきちゃんを見ると、心配そうに私を見ている。

「特に質問はありません」

何を質問していいかわからずそう答えるしかなかった。

ゆきちゃんはより一層心配そうな顔をしている。

「相沢君、咲原君が緊張してしまっているようだ。少し堅苦しくしすぎだったかな？」

「そうですね。行事発表も終わりましたし、もうちょつと碎けた感じでいいんじゃないでしょうか？」

部長の言葉に博美先輩が応える。

「桜ちゃん、初めてで緊張してるみたいだけど、そんなに肩肘張らなくていいのよ。もっと楽にしてね」

「はい」

「よし！それなら俺の出番だ」

そう言って何故か席を立てて飛び出す下田先輩。

「新之助は黙ってて！」

勢いよく飛び出した下田先輩を、間髪入れず撃沈する博美先輩の突っ込みは相変わらず冴えている。

そのやり取りにコンパの時を思いだし、思わず笑いそうになる。

下田先輩のおかげで自然と緊張が解けてくる。

ゆきちゃんも私の緊張がほぐれたのがわかったのか、私を見て微笑んでる。

私もゆきちゃんに微笑み返す。

第57話 初ミーティング4

「今年の夏はペルセウス流星群が、例年になく活発になるとの予測がされています。ちょうど夏休みですし、その時期に合わせて小学生と一緒に観望会を開きたいと思うのですが、どうでしょうか。雑談形式で皆さん挙手などなしに、齒に衣着せず好き勝手話してください」

「部長、また最後言い方変ですよ」

「そうか？」

「そうです」

相変わらずの部長の言葉に、下田先輩が注意している。けれど部長の、最後は投げ出すような話し方も慣れてきた。

「昨年の観望会、小学生の受けもよかったようですし、今年も是非やりたいと思います」

そう言ったのは博美先輩。昨年と一緒にやったようだ。

「そうそう、あの簡易ラネタリウムも大好評だったしまたやりましょうよ」

下田先輩もやる気満々だ。

「道雄はどう思う？」

今日まだ一言も発していない宮川先輩に、気を使ってか副部長が話しかける。

「僕も賛成です。ただプラネタリウムに関しては、改良の余地があると思います」

「なんだよ、ミッチー。あのプラネタリウムも好評だったじゃないか」

「そうだけど、もう少しだけお金を掛ければ、もっと良い物が作れると思うんだ」

去年参加していない私には、どんなものかまったく想像できない。

そもそもプラネタリウムというのは、小学生のとき遠足で電気科学館に見に行ったもののイメージしかない。

そのイメージでは円形の映画館のような造りで、かなり大規模だった記憶だけど、宮川先輩の口調では自分たちで作るような事を言ってるようだ。どういうことだろう。

「話の途中で申し訳ないのですが、プラネタリウムを自作するんですか？」

ゆきちゃんは私の心が読めるのだろうか？いつも私が知りたいことをちゃんと質問してくれる。まあゆきちゃんにしても、よくわからない話なんだろうけど。

「そうだね、君たちは昨年参加していないからわからないね。実は昨年、流星群が発生するまでの時間を利用して、簡易のプラネタリウムを作り、それで簡単な星の説明などをさせてもらったんだ」

そう答えてくれたのは副部長。

「その案を出して、自作のプラネタリウム作りをメインでやってくれたのが道雄君なのよ。ね」

そう言って博美先輩が宮川先輩に向かって優しい笑顔を向ける。

「すごいですね。自作でプラネタリウムが作れるなんて、信じられません」

私は思ったことをそのまま口にし、宮川先輩を見る。

照れくさそうに俯き、頭を掻く仕草がいかに宮川先輩らしい。

「それで、どのように改良するんだ？」

この場合は副部長が仕切っている。

何か言いたそうに見えるけど、部長は皆の話を黙って聞いているだけだ。

「はい、昨年は大きな目の黒い傘に投影する形でした。あれは持ち運びも便利で一度に多くの人が見られる利点がありますが、大きいと言っても所詮は傘なので投影できる面積が小さいです。ですので星を大きく映そうと投影機を近づけると、星の映る範囲が極端に狭くなってしまいます。逆に全体的な星の位置などを確認するために遠

ざけると、小さくなりすぎて星を確認しずらくなります」

宮川先輩の話は、私には難しすぎてついていけない。

「なるほど、では今回はどうするつもりだ？」

「今回は傘ではなくテントにしたいと思っています」

「だけどミッチー、テントって高いんじゃないのか？」

下田先輩と同じ疑問を私も持った。

「確かに傘に比べると高いかもしれませんが、ドーム型の3〜5人用くらいのテントなら三千円くらいで売ってますし、3つくらい買っても部費で十分まかなえると思います」

普段はあまりしゃべらない宮川先輩だけど、星のこととなると積極的だ。星がよっぽど好きなのね。

「そうだな、それくらいは部費で出せそうだけど」

副部長が部長の方を向いて確認する。それにつられて皆が部長を見る。

だが部長は黙ったままだ。

みんな部長が話し始めるのを待っている。

それでも何も部長は何も話さないのしばらく沈黙が続く。

「おい、芳郎。なんとか言えよ。部費で出してもいいのか？」

「え？私に聞いているのか？」

「このサークルの部長はお前だろ？お前に聞かないで誰に聞くんだよ」

「そうか、私も話をしているのか」

「部長、なに訳のわからないこと言ってるんですか。話していいに決まってるじゃないですか」

「そうなのか、皆さん好き勝手話をしてくれと言ったので、私はその中に含まれてないと思って、話をしたかったがずっと我慢してたんだ」

「中に含まれてないって誰が決めたんですか？そもそも皆で話をしてくれて言ったのは部長でしょ？意味わからなすぎですよ」

「そうか皆さんの中には私も含まれていたのか……そこに気づか

なかったとは迂闊だった」

「よし、迂闊だったと気づいたところでどうだ？部費を使って新しいプラネタリウム作りに取り組むか？」

「私としてはかまわないと思うが、それについて皆の意見をまとめよう」

「そうだな、俺も道雄がやれるというなら良いと思う。博美と新之助はどう思う？」

博美先輩も下田先輩も賛成する。もちろん私も賛成だ。

「宮川先輩、一つ質問してもいいですか？」

すんなり賛成すると思っていたゆきちゃんが質問をする。なんだろう？

「テントは三つで1万円前後で買えるとしても、投影機も同じ数だけ必要なのではないですか？そちらも予算が必要じゃないかと思うのですがどうなんでしょう？イメージとしては投影機というのは高そうなんですけど大丈夫なんでしょうか？」

ゆきちゃんすごい。ここでこんな質問ができるなんて、宮川先輩の話にちゃんとついていつてる証拠だ。

「投影機というと、なんだか高価なイメージを持つかもしれませんが、そんなに大仰なものではありません。簡単な土台を作ってそこに裸電球を取り付け、その周りに黒い厚紙に星の分の穴を開けて取り付けるだけです。結構緻密な作業ではありますがお金のかかるものではありません」

「去年俺もやらされたけど、あれは肩がこった。今年も作るのか？」

「去年の物が使えると思う。テントを購入したら試してみたいと思う」

「宮川先輩ありがとうございました。質問はそれだけです。私もテント購入に賛成させていただきます」

「よし、全会一致でテント購入は決定。続いて小学生との合同観望会をするかどうかの採決を取りたいと思います」

「ちよつと待て芳郎」

「なんだ？」

「なんだじゃない。合同観望会は既に決定している。だからこそテント購入の話になったんだろう」

「そうなのか？いつ採決を取ったんだ？気づかなかった」

部長……

「すまない新之助、頭が痛くなってきた後を頼む」

「副部长から指名された下田先輩は、任せろ！と言わんばかりに大きくうなずく。」

「部長、採決は取っていませんが、さつき2年生は全員賛成してます。そして1年生もテント購入に賛成したことで合同観望会も賛成と理解させてもらいました。テントは合同観望会用として話を進めていたので問題ないと思います」

「そこまで言って博美先輩を指差す。」

「ですから採決を取るまでもなく全員賛成です。部長は反対ですか？」

「もちろん賛成だ。ただ部長らしく採決を取ってみたかっただけだよし、では日にちを決めてしまおう」

「芳郎、今から決めるのか？今日はもう遅いし、なによりまだ先のことだ。おいおい決めていけばいいんじゃないか？」

「そうか、では宮川君にある程度の日にちを聞いておいて、今日はお開きにしよう」

日程を決めるのは宮川先輩の役目なんだろうか？

第58話 初ミーティング5

「それでは、今年のペルセウス座流星群について説明させていただきます。今年は8月13日ごろに極大を迎えると思われます。ちょうどお盆にあたりますので、小学生だけではなくメンバーにも帰省されてる方も多いかと思いますが、逆に地元に残ってる子供達にはちょうどいいかもしれません。とにかく先方と話し合いをして、日程の調整が必要だと思います」

「ありがとう。極大が13日か、その日は厳しいかもしれないな」
極大って初めて聞く言葉だけど、話の内容から一番よく見える日ってことだろうな。

「そうですね、そのあたりどうするか検討する必要があるそうですね」

「よし、続きは後日だ。今日はこれまでにしよう」

「はい、お疲れ様でした」

先輩達が席を立ったので、私たちも挨拶をして皆に続いて教室を出る。

教室を出て歩きだしたところで、ゆきちゃんに声を掛けられる。

「桜、ミーティング前に下の階で会った人のこと、言っとかなくていいかな？」

「あつ、すっかり忘れてた。あの人のこと気になってたし部長に聞いてみようよ」

部員全員がエレベータに向かって歩いてる。先頭の部長は既にエレベータの前で立っている。

私は小走りに2年生達を追い抜き、部長の元まで行く。

急に走り出したため、慌てて追ってきたゆきちゃんが隣に立ったのを確認して、あの女性のことを聞いてみる。

「部長今日のミーティング、初め教室を間違えて12303へ行っ

たんですけど、その時…… えっと、ある女性に会ったんです。その人が部長によろしくって言ってました」

「なんだか口ごもった言い方だね。ある人って誰のこと？」

私はゆきちゃんを見る。

口ごもったのは別に何かを隠そうとか、言い難いこととかというわけではない。

単に名前が出てこなかったのだ。話しかける前にゆきちゃんに確認しておくべきだった。

そのときエレベータのドアが「チン」という音と共に開く。

部員全員がエレベータに乗り込む。

「稲村律子さんという人です。私たちと同じ1年と言っていました、長いストレートの髪で大人びた雰囲気のある女性でした」

ゆきちゃんが私の代わりに答えてくれた。

「稲村君か、あれは私と同級生で3年だ」

「え？3年生なんですか？」

嘘をついたってことかな？初対面の私達にいきなり嘘をつく必要性は感じられないけど。

「稲村君は冗談が好きだからな、からかわれたんだよ、まんまとだまされるとは君達も馬鹿だな」

「部長、なんですかその言い方は、馬鹿なんて言っちゃあだめですよ」

そうだそうだ！騙されたとはいえ、言いすぎですよ。下田先輩もつと言ってやってください。と心の中で叫んでみる。

「君たち稲村先輩に会ったのか」

突然話に入ってきたのは宮川先輩だった。

自主的に話しかけてくるのは珍しいのでびっくりした。

「はい」

「そうか」

宮川先輩は小さく呟いたまま動かなくなっていました。何か考え事をしてるようだ。

宮川先輩の態度は気になるけど、話しかけ難い雰囲気をもっているんで、部長に質問することにした。

「部長、稲村さんとはどういう関係なんですか？」

「稲村君とはただの幼馴染だ。な、悠一」

副部長がうなずく。

幼馴染ということを知ってる、ということは副部長も幼馴染なのかな？

1階に着いたエレベータを降り、全員で校門へ向かう。

「ゆきちゃんと言ってたんですけど、きれいな人ですよ。」

「綺麗？稲村君がか？まあ汚くはないだろうけど。綺麗とまで言えるのかな？普通じゃないかな？」

「部長、この場合の綺麗は、汚いの対義語じゃなくて不細工の対義語ですよ。だいたい稲村先輩に汚いとか失礼ですよ。せめて不細工か？と聞いてあげてくださいよ」

「新之助も十分失礼だ」

博美先輩が下田先輩の頭を思いつきり叩く。

「いてえな！何するんだよ。俺は間違ったこと言っていないだろ？」

「間違つてるとか、間違つてないとか関係ない。あんたは存在自体失礼なのよ」

そう言ってもう一度叩こうとするが、二度も叩かれてはたまらないとばかりに、今度は寸前のところでかわした。

「お前こそなんてこと言うんだ。意味わかんねえし」

そのやり取りに皆の笑い声が、日も暮れて人気のなくなった校門前広場に響く。

「あら、なんだか楽しそうね」

不意に声をかけられて皆が声の発信者を見る。

そこにはたった今話題にしていた『稲村律子』さんが立っていた。今、桜の木の裏から出てきたように思ったけど、気のせいかな？「君か、こんなところで一人でどうしたんだ？仲間はずれにされたのか？」

「相変わらず失礼な人ね」

「そうか？」

「そうよ！」

二人の切り口上は、まるで喧嘩でもしているようだ。

「律子、どうしたんだ？まだ帰らないのか？」

「副部長もやっぱり知り合いのようだ。」

「か、帰るわよ。ちょうど帰ろうとしていたところでしたから」

「そうか、気をつけて帰ったまえ」

「そう言っただけで通り過ぎた部長の後を稲村さんがついていく。」

「どうしたんだ？」

「どうもしないわよ。駅の方が同じなだけよ」

「なるほど」

私たちは、部長の後ろを歩く稲村さんの後ろを歩く副部長の後ろをぞろぞろとついていく。

「律子、腹減ってないか？今から皆で食事でも行かないか？お前たちもどうだ？」

「副部長が稲村さんに声をかけた後、私達の方を振り返り食事の提案をしてくる。」

「いいですね。僕行きたいです」

「私も参加」

下田先輩と博美先輩がすばやく賛成する。

その声を聞いて稲村さんが振り返る。

肩にかかった長い髪をかき上げながら、くるりと振り返った稲村さんの顔は、少し赤みがさしているようにも見えた。

「照れ顔？うれしいのかな？」

「そうですね。少しお腹も空いてきましたし、『bonne quailite』（ボンヌ キャリテ）にでも行きましょうか」

「ボンヌキャリテ？それどこだよ」

私も含め、その場の全員が疑問に思ったことだと思う。

「ヴィラ・アストンホテルのフレンチレストランよ。悠一は知らない」

いの？」

「ホテルの名前くらいは知ってるけど、レストランの名前までは知らない」

「そう、じゃあそこでいいかしら？」

「いきなり決定するな、だいたい『じゃあ』ってどこにかかっているだよ！それに全然よくない」

「どうして？」

「どうしてって、今から軽く食事しようかって話で、なんでホテルのフレンチなんだよ。だいたいあんな高級ホテルのレストランっていくらすると思ってるんだ」

稲村さんって天然なのね。部長もちよつと天然だし、副部長も大変ね。

「おい、芳郎からもなんとか言ってくれ」

「稲村君のおごりなら行ってもかまわないが」

部長、なんてこというんですか。

「全員となると8人ですね。一人3万として24万。そんなに持ち合わせがありません」

当然でしょ、大学に来るだけでそんなにお金持ってくる人いないでしょ。

「学校にはカードも持ってきていませんし、一度帰ってお金を取ってきますので皆さん先に行っててください」

え？稲村さん本気？

「そうか、稲村君悪いな。じゃ先に……」

副部長が部長の口を押さえた。

「もう芳郎は黙ってる。お前に聞いた俺が悪かった。律子、お金なんて取りに帰らなくていいし、フレンチレストランなんてどこも行かない」

「どうして？食事に行くんじゃないの？」

「食事には行くけどみんな割り勘で駅前のファミレスだ」

皆が大きく頷く。

そりゃ、そうだよな。でも……

「ねえ、ゆきちゃん。ゆきちゃんも行く？」

「そのつもりだけど、桜は行かないの？」

「うん、大輔くんのバイト終わったら会う約束してるから、早めに帰っておきたいの」

ゆきちゃんの顔色が曇ったのがわかった。私だけ大輔くんと会うため先に帰るのは気が引けるけど、約束があるのでどうしようもない。

「そうか、じゃ私だけ行ってくるよ」

「ごめんね」

私は副部長に用事があるので先に帰ると告げ、ファミレスの前で皆と別れ一人改札を通る。

4月も下旬を迎え、風が少し暖かくなってきたように感じる。

空を見上げると薄雲と駅前の明かりのせいで、星は見えない。

私は湿った風を体中に感じながら急行電車に乗る。

第59話 二人で食事1

古居^{ふるい}駅から後ろ髪を引かれる思いで急行電車に乗った私は、20分後いつもの新王寺^{しんおうじ}駅で地下鉄に乗り換える。

電車が来るのを少し待つて、そこからさらに15分揺られて上之^{かみ}瀬^{のせ}駅で降りる。

電車に乗っている間考えていたのはゆきちゃんのことだ。

私が行かないと言ったときの曇った顔が忘れられない。

ゆきちゃんは私と一緒に帰るつもりだったはずだ。当然私も一緒に帰るつもりだった。

でも今から考えれば、ミーティングが終わったら副部長に誘われなくても、二人で一緒にご飯でも食べて帰ろうと、考えていたのかもしれない。だからあの時あんな顔をしたんじゃないだろうか。

もちろん隠していたわけでも何でもないけど、はじめから大輔くんと会う約束をしていると言っておけばよかった。今更後悔しても遅いけど。

改札を通りながら駅に備え付けられた時計を見上げる、8時5分。大輔くんのバイトが終わる時間が9時だからまだ小一時間ほどある。

ミーティングの終わる時間がはっきりと読めなかったので、早く終わったら一旦家に帰って9時過ぎにまた出てきて駅前で待ち合わせ、また中途半端な時間だった場合はこのカフェで待つてることになっていた。

一旦帰ってもまたすぐに出て来ないといけなかったのでとりあえずカフェで待つことにした。

大輔くんに気付いてもらいやすいように、通りに面したガラス張りの席に座る。

注文を聞きにきたウエイトレスのお姉さんに、アップルティを頼

んで先日買ったばかりの雑誌をかばんから取り出す。

『月刊天文ナビ』というのが今回買った雑誌だ。

このジャンルの雑誌は生まれて初めて買ったのだが、1380円という値段を見て少し驚いた。

ほぼ全ページカラーだし、こんなものかと納得して買ったが月刊誌とすればやっぱり高い気がする。

注文していたアップルティが運ばれてきた。私は砂糖も入れず、ストレートで一口啜る。

熱い液体が胃に染み渡ると、胃の中が空っぽなのだと認識させられる。

今まで感じていなかった空腹感を急激に思い起こされたような感覚になる。

「お腹空いたな」

つぶやくように独り言を言つてメニューを見ると、おいしそうなケーキの写真が載っている。それを見るとさらにお腹が空いてきた。しかしこの後、大輔さんと食事をする約束があるので我慢しないといけない。

ゆきちゃんは今頃皆と一緒にご飯を食べてるんだろうな。

さっきのことを思い出すと胸が痛むので、それを考えないようにする為にカバンから出した雑誌だったけど、ついついゆきちゃんの事を考えてしまう。

私は記憶から追い出すためにも雑誌を広げる。

1380円もする月刊誌は雑誌といえども立派な作りになっている。

表紙はそれ自体が夜空を表していて、その中におおくま座・おとめ座・うみへび座が色分けされて描かれている。もちろん各星座に名前を書いてくれているのでわかるのであって、何も書いていなければ星座なんてわからない。

ページを一つめくると、右側のページにはどこかわからないけど

天文台と一緒に夜空が写っている。

満天の星空はとても綺麗だ。

そして左側は目次になっている。

その中で『春の星座はスケールが大きい』というタイトルが目につく。

どうやら今月号の特集記事のようで一際大きく見出しが付けられている。

ページを確認すると23ページと書かれているのでそこを開く。

内容は春の星座の特徴や、北斗七星を起点とした星座の見つけ方などが書かれている。

そして春の代表格的な星座、おおくま座が全天で3番目に大きいというのに興味を引かれた。

へー、おおくま座って大きいんだ。じゃあ2番目は1番目は？と知りたくなるものである。

しかしその疑問に対する答えはすぐに知ることができた。

そのページを読み進めていると2番目がおとめ座で1番大きな星座がうみへび座ということも、ちゃんと書かれていた。そしてその星座達すべてが春の星座であることも書かれていた。

なるほど、確かに春の星座は大きいのが多いみたいだ。

もし1番目、2番目が春の星座じゃなかったら、今月号のこの雑誌では知ることができなかったかもしれないことを思うと、少しラッキーな気がして嬉しくなった。

それからしばらく夢中になって雑誌を読んでいると、「ごめん、お待ちせ」という声と共に私の前に大輔くんが現れた。

「あつ、大輔くん」

「ごめん、ちよつと遅くなっちゃった」

途中から雑誌に夢中で時間を忘れていたが、いつの間にか紅茶も飲み干していた。

時間を確認すると9時半を少し回っていた。

1時間以上も待っていたなんて思わなかった。

「店長がラストオーダー終わってるのに注文受けたから、定時に終われなかったんだ。ごめん」

バイトは個人経営のそば屋さんで、大輔くんの仕事は基本的には出前専門らしい。

閉店は8時半だけど、片付けなどがあるのでバイトは9時までとなっている。

ここからお店までは自転車です分程の距離なので30分は残業させられたんだろう。

「私は大丈夫だよ。この前買った天文雑誌に夢中で時間忘れちゃってたし」

「そうか、それはよかった。でもお腹空いたでしょ？何食べる？」

「何でもいいよ。大輔くんは何が食べたい？」

「そうだなあ、腹減ったし駅前商店街の洋食屋はどう？俺あそのハンバーグが食べたい」

「『ロイ』ね？いいよ。でも大輔くんってほんとハンバーグ好きよね」

カフェを出た私達は駅から続く商店街をロイへ向かって歩き始める。

殆どのお店は8時〜9時の間に店仕舞いをするので7割がたシャッターがおりている。

この時間でも開いているのは食べ物屋さんくらいのもんだ。

「ああ、ハンバーグとから揚げは大好きだ」

「お子様よねえ」

ちよつとからかう様な口調で話す。私も大輔くと付き合うようになってからは、それまで殆ど食べなかったハンバーグが好きになっっていた。

「なんだよ、桜だってハンバーグ好きって言ってたじゃないか」

「好きよ」

「俺とどっちが好き？」

慌てて周りを見る。

「大丈夫、誰にも聞こえてないよ」

「こんなところで変なこと言わないでよ」

「別に変じゃないだろ？俺とハンバーグとどっちが好きか聞いただけじゃないか」

人と食べ物を比べるのは十分変だと思う。これが変じゃないなら何を変だと言うのだろう。

しかも、人通りは少なくなってるとはいえ、こんな商店街のど真ん中での質問じゃないでしょうに。

「なあどっちなんだよ。答えてくれよ、俺のこと好きか？」

私はもう一度周りをうかがう。殆ど人通りはないけど全くいないわけじゃない。

「恥ずかしくないから正直に言ってみて」

恥ずかしいかどうかは私が決めることなのに、なぜか大輔くんが代弁してくれる。

しかも間違ってるし、私は恥ずかしいです。

それに私が、大輔くんを好きと言うのを確信している口ぶりだ。

もちろん好きだけど、こんなところで言わされるのは恥ずかしい私がいじめられていると、大輔くんが両手を合わせて拝むように頼んでくる。

「答えてくれ」

そうこうしている間にお店に着いてしまった。

大輔くんは、2階にあるお店に続く階段の所で動こうとしない。

もう言わなくてもわかってるくせに。

こうなったら意地でも答えて欲しいんだろ？

どうしても答えて欲しいようなので、恥ずかしいけど答えることにした。

私は周りの人に聞こえないように、大輔くんの耳元に口を寄せる。大輔くんの方が20センチくらい背が高いので、両手で左肩を押さえつけるように引き寄せ、少し背伸びをして小声で話す。

「大輔くんのこと好きよ。ハンバーグよりも」

「そうか、ありがとう。やっぱり俺が一番だよな？」

私はこくりと頷く。

すると大輔くんはおおはしゃぎだ。そんなに嬉しいの？

でもその喜び振りを見ていると、なんだか私まで嬉しくなってくる。

「桜、俺も桜のこと好きだよ」

私は^{みたひ}三度周りをうかがう。

きつと顔が真っ赤になつてることだろう。そう思うとさらに恥ずかしいので少し俯いてしまう。

「よし、二人の気持ちも確認できたし。入ろう」

そう言つて大輔くんが私の手を引き、階段をのぼる。

私は引つ張られるようにして後をついて行くが、階段が狭い為手を引かれたままだと危ない。

それでも手を離そうとしない大輔くんに、内心苦笑いしながらも嬉しさを感じる。

付き合う前にはわからなかったけど、大輔くんってけっこう子供っぽいところがある。

それとも男の人ってみんなこんな感じなのかな？

そんなことを考えながら、大輔くんにエスコートされて店内に入る。

この洋食屋『ロイ』は大輔くんと何度か来たことがある。

リーズナブルなお値段のわりに、栗色を基調にした店の造りは、上品で落ち着いた雰囲気がある。玄関に敷かれているマットも毛足が長く高級感を演出している。

まさに『シックな』という言葉がぴったりの店構えだ。

お店に入ると、デミグラスソースの香りが鼻腔をくすぐり食欲をそそる。

また空腹感呼び覚まされ、思考が大輔くんからハンバーグへ移

行する。

ここにきてハンバーグの逆転勝ちかもしれない。などと少し意地悪なことを考えながら、ウェイターさんに案内され、商店街が見渡せる窓側の席に着く。

その時の私は、大輔くんに会ったことと空腹から、いつの間にかゆきちゃんのこととは、すっかり頭から離れていた。

第60話 二人で食事2

席に着くとウェイターさんがおしぼりと水、そしてメニューを運んでくれた。

注文が決まったらまた呼んでくださいと言い残し、厨房のほうへ戻っていった。

私はメニューを開いて大輔くんの方へ向ける。

「大輔くんは何にする？」

「俺はハンバーグとエビフライのセット、ご飯大盛りで。桜は？」

メニューもろくに見ないで速断する。はじめから決めてたみたいだ。

「じゃ私はハンバーグだけのセットにしようかな」

「OK、じゃ店員さん呼ぶよ」

そう言って大輔くんがウェイターさんを呼んで、注文してくれた。

「今日のミーティングどうだった？」

大輔くんから今日のミーティングについて話を振ってきた。

「今年一年の行事について話し合ったよ」

「ミーティング休んでたのって俺だけだった？」

まずはミーティングの内容よりも、休んでしまったことを気にしているようだ。

「先輩たち何か言ってなかった？」

「特に何も言ってないよ」

「初ミーティングだったのに休んだから、怒ったりしてなかった？」

「大丈夫だよ。誰も全然怒ってないよ。安心して」

「よかった」

「そんなに心配なら、バイトを休めばよかったのに」

「俺もそうしたかったんだけど、もう一人いたバイトの奴がいきなりやめちゃって、それでそいつが出勤予定だった日を、俺が代わり

に出勤することになったちゃったんだ。店長にどうしてもって頼まれたから断りきれなくて」

なるほどそういうことだったんだ。頼まれると断れない性格だから仕方ないか。

「それで、何か面白そうな行事とかあった？」

「それなんだけど、夏休みのお盆の頃にペルセウス流星群がよく見えるんだって。だからその時に観望会があるの」

「そうなんだ。流星群って見たことないな。きっと綺麗なんだろうね」

「うん、私も見たことないけど、きっと綺麗だと思う。それでね、その時小学生と一緒に見ることになってるみたい」

「小学生？」

「そこまで話したところでウェイターさんがコーンスープを2つ運んできてくれた。」

注文したセット料理についているスープだ。このコーンスープがまたおいしい。

大輔くんが早速スプーンでスープをすくってるのを見て、私も小学生の説明をする前に一口頂く。

「大学の上に、千代崎小学校っていうのがあるみたいんだけど知ってる？」

「いや、知らない」

「私も知らなかったんだけど、その小学校の児童とは交流をもってるみたいで、去年も一緒に観望会をやったんだって。それで今年もやるみたい」

「なるほど、面白そうだね。桜も優希も子供が好きだから楽しみだろ」

お腹が空いてる私たちは話をしながらもあっという間にスープを飲み干してしまう。

「うん、楽しみ。それでね。その時自作のプラネタリウムも小学生に披露するみたいなの」

「へー、プラネタリウムを自作するんだ。すごいな」

「普段は大人しいタイプの宮川先輩が、プラネタリウムの話になったとたん、積極的にいろいろな意見とか出しててびっくりした」

「そうなんだ、よっぽどプラネタリウムが好きなんだね」

「プラネタリウムというより星全般が好きなんだと思う」

「なるほど」

「あつ、来る」

私の席からだとも厨房が見えるので、料理が出来上がったのがわかる。

出来上がった料理をお盆に乗せてウェイターさんが、テーブルに近づいてくるのを目で追う。

ウェイターさんが近づいてくるとなぜか居住まいを正してしまう。テーブルまでやってきたウェイターさんは「失礼します」と言つて、それぞれ料理を並べてくれる。

大輔くんはハンバーグとエビフライ。大きな皿にはサラダと、みるからにジューシーなハンバーグ、そして頭がついた大きなエビフライが1匹乗っている。

私はハンバーグだけでも十分なボリュームだ。

「とりあえず食べよっか」

「うん、いただきます」

ちゃんとフォークとナイフが用意されているが、箸も用意してくれているので、私たちは格好を気にせずいつも箸を使って食べる。

ハンバーグに箸を入れると、ふわつとした柔らかめ肉の中から湯気が立ち上がり、大量の肉汁がこぼれ出る。

ここのハンバーグは牛100%だけどとてもジューシーに仕上がっていて、自家製デミグラスソースとよく合う。

一口大に切ったハンバーグにソースをよく絡めて、洋服を汚さないように気をつけながら口に運ぶ。

「おいしい。やっぱりここのハンバーグはおいしいよね」

「そうだな、この値段でこの味は最高だね」

大輔くんがハンバーグ好きなので、何度かデミグラスソースを作ったけど、こんなに美味しいソースは作れない。

ハンバーグ自体は負けなくらいの物を作れてると思うけど、ソースは敵わない。

このソースは、きつとすじ肉を使ってるんだと思うので、私も同じようにやってみただけどダメだった。

すじ肉をじっくり煮込み、玉葱を多めに使ってるソースは絶妙の甘味があり、くどくなくあっさりしている。

こんなにあっさりしてるのに、深い味わいを出せるのは、やっぱりプロのなせる業だと思う。

そんなことを考えながら、ふと大輔くんを見るともうほとんど食べ終わっている。

「大輔くん早い」

「腹減ってたから」

「いくらなんでも早すぎるよ。もうちょっとゆっくり食べないと体に悪いよ」

大輔くんのお皿に、ご飯はもう残っていない。

「大輔くん足りる？私のご飯食べる？」

「いいのか？お代わりしようか迷ってたんだ」

「私の半分取っていいよ。それで足りる？」

「十分だ。あと一人前だと少し多いし、と思って悩んでたからちょっとよかった」

私は大輔くんの皿にご飯を半分乗せ、ついでにハンバーグも少しわけてあげた。

「ハンバーグもくれるの？桜それで足りる？」

「うん、十分よ」

時間も遅いし、ちょうど良いダイエットにもなる。

こんな時間にこれだけの高カロリー料理を全部食べたらずっとうまい。

「はあ、ごちそうさん」

大輔くんは、半分あげたご飯もあつという間に食べ終えてしまった。

「ホント早いね、私まだ食べ終わってない」

「気にしないでいいよ。俺が早すぎただけだから、ゆっくり食べて」
「うん、ありがとう」

そうは言っても待たせると思うと急いしてしまう。

私が必死に食べてるので大輔くんも話しかけてこないで、窓の外を眺めている。

そんな態度を見ると余計早く食べなくては、と焦ってしまう。

「あつ」

窓の外を見た大輔くんがなにやら驚いている。

「どうしたの？」

「優希」

私は食べていた手を止め、慌てて大輔くんの視線を追って窓の外を見る。

ゆきちゃんが自転車で、私たちのいる店の前にさしかかろうとしているところだった。

私たちが見ていると、ゆきちゃんが一瞬こちらを向いた。

その瞬間目が合った気がしたけど、私たちに気がつかなかったよううで、そのまま通り過ぎていってしまった。

「今こつちを見たように思ったんだけど、気がつかなかったみたいだな」

「そうだね」

「帰りがこの時間ってことは食事の後、例のカラオケ屋でも行ったのかな？」

「そうかもね」

大輔くんの話に適当に相槌をうつっていたが、私は違うことを考えていていた。

それはゆきちゃんに気付かれなくて良かった、等ということだ。
悪いことをしているわけじゃないけど、ゆきちゃんやサークルの
皆との食事を断ったので、大輔さんと食事しているところを見られ
るのは、なんとなくバツが悪い。

ゆきちゃんの姿がすっかり見えなくなったので、私は残りのハン
バーグを口に運んだ。

同じハンバーグなのに、ゆきちゃんを見てからは全く違った味が
した。

あんなに美味しかったのに、最後は無理やり押し込んだ感じが
そして残りのサラダも急いで食べお店を出た。

「やっぱりロイは美味しかったな」

「う、うん。そうだね。美味しかったね」

「どうした？美味しくなかった？」

私の態度がおかしいと感じたんだろう、それが美味しくなかった
と思ったみたいで、気にして聞いてくれたけど、実際はそんなこと
ではない。

「そんなことないよ、それよりもうだいぶ遅くなったね」

「そうだな、そろそろ帰ろうか」

「うん」

商店街を抜け、駅前の自転車置き場から自転車を出す。

空を見上げると、心とは裏腹に空は晴れているのだろう、星がよ
く見える。

私は気を取り直して、先ほどの雑誌で読んだ春の星座の見つけ方
からおおくま座を見つける。

「大輔くん、おおくま座って名前くらいは知ってるでしょ？」

「うん。どれがおおくま座かは知らないけどね」

私は先ほど得たばかりの知識を、さもはじめから知っていたよう
に説明してあげた。

自転車は乗らずに、歩いて押しながら。

「へー、そうなんだ。桜いつの間に勉強したんだ？すごいな。なるほどあれがおおくま座か」

「そうだよ。それにあれがうみへび座で、あれがおとめ座だよ」
私の知識に、大輔くんはすっかり関心してくれている。

さっきのカフェで仕入れた情報なのでまだ覚えているけど、一週間経っても同じ説明ができるか？と聞かれると自信はない。

「俺もバイトばかりしてないで星の勉強しないとだめだな」
「ホントだね」

大輔くんと一緒に歩いて帰る。

空を見上げ、星の話をしてとても楽しい時間のはずなのに、その日はずっとゆきちゃんのことを頭からはなれることはなかった。

第61話 親友

今日も朝から授業があるので、自転車でゆきちゃんと待ち合わせの駅へ向かう。

4月も終わりを迎えいよいよ暑さが増してくる。

空は真つ青に晴れわたり、自転車をこいでいると少し汗ばむくらいだが、程よい風が気持ちいい。

しかしそんな清しい天気とは裏腹に、昨日のことを考えると私は憂鬱な気分になる。

だけどゆきちゃんと駅の駐輪場で待ち合わせは、いつものことだ。

駐輪場に入るとゆきちゃんが既に待っていた。

「おはよう」

さわやかな笑顔で挨拶をしてくれる。

私の考えすぎだったんだろうか。ゆきちゃんは何も気にしていないようだ。

そう思うとさっきまでずっと考え込んでいただけに、気持ちが晴れしていつもより元気よく返事をかえしてしまう。

「おはよう」

「今日は元気がいいね。昨日なにかいいことでもあったのかな？」

「え？別に何もなしよ。バイトが終わるのを待ってて、それから一緒にご飯食べたただけだよ」

「ふん」

そう言いながら、にやつと意味あり気な笑いを見せる。

「なに？変な笑い方しないですよ」

「別に、私はいいことでもあったの？って聞いただけで、大輔と良い事があったの？と聞いたわけじゃないんだけどなあ」

そうだった、てつきり大輔くんのことを言ってるのかと思ったけど、言われてみれば勝手に決め付けていた。

「昨日の食事会断っちゃって、ゆきちゃん一人に行かせたから気になってたの」

「そんなこと気にしてたの？桜は先約があっただから気にすることないのに」

「うん、それでゆきちゃんが怒ってない感じだったからホッとして元気になったんだよ」

私は気持ちを隠して取り繕うより、正直な気持ちを話した。

「バカね、私たちの間柄でそんな細かいこと気にしなくていいのに」満面の笑みで応えるゆきちゃんを見ると、なにをあんなに気にしてたんだろうと不思議に思えてくる。

「おはよう」

大輔くんだ。

「おはよう」

私とゆきちゃんが同時に応える。

「おっ、なんだ。桜、やけに元気がいいな。何かいい事でもあったのか？」

「え？そう？まああったといえばあったかな」

「なにがあっただ？教えて」

「昨日、私を置いてけぼりにして大輔と食事をしたんで、私が怒ってるんじゃないかと心配してたんだ。けどさっき私が怒ってないとわかって、急に元気がでただってさ」

「実はそうなの。ゆきちゃん怒ってないかなあって気になってたの。でも置いてけぼりとはちょっと違うよ」

「そうだね。正確にはサークルのメンバーで食事に行こうって話になったけど、大輔と約束があるからって先に帰ったってことなんだけどね」

「なんだ、そんなことがあったのか。俺に一言言ってくればよかったのに」

「大輔に会った時点では、もう私たちと別れた後だから言っても意味がないでしょ」

「違う。桜がそれで気にしてるんだったら、優希はそんなこと気にしないから、気を使わなくていいって言ってあげたのに」

「気を使わなくていいとか大輔が言う？それは私が桜に言う言葉だ」
ゆきちゃんが私に笑顔を向ける。

それを見て本当にゆきちゃんが親友でよかったと思う。

「ありがとう」

「ん？なんのお礼？」

「友達でいてくれてありがとう。っていう意味」

「桜って時々聞いているこっちが恥ずかしくなるようなことを言うよね」

私も少しは恥ずかしい気持ちがある。だから本当は親友って言い
たかったけど、友達と言ってしまった。

「桜、俺にも言うてくれ」

「え？」

「大輔、なにバカなこと言ってるのよ、あんたたちの惚気のろけは別に
たくさんあります」

「バカとはなんだよ、ちょっと言ってみただけだろ」

「言わなくていい。気持ち悪いから」

「な、なんだよ」

なんだかすごく良い雰囲気。こうやっていつまでも三人仲良く
れたらいいな。

「それより二人とも、早く行かないと電車に乗り遅れるよ」

「おう、そうだった。急ごう」

私は今日の天気と同じ、晴れた気持ちで電車に乗り、皆と大学へ
向かった。

「ゆきちゃん、お昼どうする？」

「ごめん。私ちよっと用事があるから、大輔と二人で食べて」

「え？用事？」

「うん、ちよつとね」

用事ってなんだろう？何か言い難そうだけど、大学で用事なんてあるんだろうか？

「午後の講義はどうするの？」

「それまでには終わるから、講義は出るよ」

「わかった、じゃ午後の講義で……」

まさか昨日断ったことが関係あるってことないよね？

「桜！」

私の名前を呼んだゆきちゃんがまっすぐ私を見ている。

「きゃ」

ゆきちゃんがいきなり私のおでこをつついた。

「なに心配そうな顔してるの。『やっぱりゆきちゃん怒ってる？』とかって気にしてるんじゃないでしょうね」

「そ、そんなことないよ」

否定はしたけどゆきちゃんの言うとおりだ。ゆきちゃんは何でもお見通しだ。

「言いたいことがあれば何でも言えばいいんだよ」

「うん」

「一つはつきりさせておくけど」

な、なんだろう。

「な、なに？」

何を言われるのかわからず不安から鼓動が早くなる。

「私にとっても桜は一番の親友で一番大事なんだよ。昨日のこのような小さいことで怒ったり、気にしたりなんてしないよ。だから聞きたいことがあれば遠慮なく聞いていいし、心配事や不安があれば何でも言っていていいんだよ。私達の関係はそんな小さなことで壊れたりしないんだから」

「うん」

ゆきちゃんの優しい言葉に思わず目頭が熱くなる。

「なに泣いてるの。そんなことで泣かないでよ」

「う、うん」

でも考えてみたら、ゆきちゃんも人が恥ずかしくなるようなことを平気で言ってる。

「ちなみに、桜が気にしてる私の用事っていうのは、宮川先輩と会うってことだよ」

「えー？」

私は予想もしなかったゆきちゃんの用事に、すっとんきょうな声をだしてしまう。どういうこと？昨日の食事会で二人の距離が急接近したとか？

「早とちりしないでね」

「ただ、ゆきちゃんは読心術の心得があるんだろうか。」

「してしまったけど、違うの？」

「違う、違う。昨日の食事のときに少し話してたんだけど、時間なくなっちゃって聞きそびれた話の続きを聞きに行くだけだから」

「へー、何を話したの？」

「それなんだけど、ちゃんと話を全部聞いたら桜にも教えてあげよう」

「うん」

「じゃそろそろ約束の時間だから行ってくる」

「どこで待ち合わせなの？」

「昨日宮川先輩と会ったあのステージの観客席」

「ああ、あそこか。なんであそこにいたんだろうね」

「それも含めて教えてあげるから待ってて」

ゆきちゃんはある時盗撮でもしてるんじゃないか？とか言ってたけど、まさかね。

じゃ結局なんだったんだろう。

後で教えてもらえるみたいだけど、こんなじらし方されると気になってくる。

「お待たせ。あれ？優希どこに行くのか？」

「うん。ちょっとね」

「ちょっとつてなんだ？」

「宮川先輩と会う約束してるから」

「なに？なんで宮川先輩と！」

「もう時間ないからいく。詳しくは桜に聞いて。じゃあね」

「なんだ？桜何があつたんだ？」

「そうね、食事しながら話しましょ」

「おう」

私は大輔くんと二人で学内の食堂へ向かった。

第62話 迷探偵・優希1

宮川先輩に会うため約束の場所へ向かう。

昨日と同じ扉が開放されているので、そこから観客席に入る。

中に入って辺りを見回すが人の姿はない。

時計を確認すると約束の時間までまだ10分ある。

私は適当な席に腰を下ろし、宮川先輩を待つ間、昨日食事の後に行ったカラオケボックスでの会話を思い返す。

薄暗い照明の中、ミラーボールが不規則に回転しながら色とりどりの光が部屋中を照らす。

部長と下田先輩は我先にと、曲を予約登録し競って大声で歌う。

二人とも下手とは言わないが決して上手いとは言えない。

そんな二人の音量が響く中、私は宮川先輩に話しかけた。

「宮川先輩は歌わないんですか？」

歌わないのはわかっていたが、話をしたかったので確認のため聞いてみたのだった。

「うん。僕は遠慮しとくよ」

期待通りの答えだ。

「じゃ先輩、ちょっと聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「なんだい？」

もともと仲が良いというほど付き合いがあるわけではないが、少しよそよそしい。何か警戒してるようだ。

聞きたいことは2つある。だけど身構えられているので、まずは答えやすそうな質問からすることにする。

いきなりハードルが高いと、話を打ち切られて何も答えてもらえないかもしれない、と思つてのことだ。

「稲村先輩のことなんですけど」

そこまで言ったところで、明らかに動揺しているのがわかった。
宮川先輩は突然ウーロン茶に手を伸ばす。先輩はうそはつけないタイプだな。

一口飲み終えた先輩が口を開く。

「稲村先輩がどうしたの？」

声も震えて、明らかに緊張している。

「はい、部長や副部長と仲がいいですよ。三人は幼馴染なんですかね？」

今度は私の質問に安堵の表情を浮かべる。

稲村先輩の名前を出したときの動揺が大きかったので、質問を少し遠回りさせたのだ。

「そうみたいだね。僕も部長達とは大学に入ってから1年の付き合いだし、それほど詳しく知ってるわけじゃないけど、三人が幼稚園の頃からずっと同じ学校だということは聞いている」

「そうなんですか、でも稲村先輩って絶対部長のこと好きですよ」
下田先輩の大きな歌声のおかげで、私の話が他の人に漏れる心配はない。なので本人たちがいる部屋でも大胆なことが言える。

「そ、そうかな？それはわからないよ」

ん？先輩がまた動揺している。私の今の質問で動揺するところなんてあつただろうか？

まさか宮川先輩って稲村先輩のことが好きとか？それであのエレベータで私が稲村先輩の話を出したときにあんな反応をしたのかな？

つじつまが合ってそうだけど、どうも釈然としない。

そしてその疑問こそが私が聞きたかった質問の1つめだ。あのエレベータでの反応が気になる。

「そうですか？大学の校門で待ち伏せしていたことや、食事を誘ったときの態度を見れば明らかだと思っんですけどね。宮川先輩はそう思いませんか？」

「う、うん。そうは思わないな。校門で会ったのも偶然だったし。食事の時だってはじめに誘ったのは副部長だったから……」

怪しい。どうも部長と稲村先輩を切り離したいような口ぶりだ。どうしてだろう？

先輩の反応の意味が分からないけど、話を変えることにした。

「先輩、話は変わりますけど、さっきエレベータで私が稲村先輩の名前を出したとき驚いてましたよね。どうしてですか？」

「え？そ、そうだったかな？覚えてないな」

そんなに驚かなくてもいいのに。

それに早口に答えるその様が明らかに焦っている。

なんてわかりやすい人なんだろう。

「『君たち稲村先輩に会ったのか？』って言いましたよね。覚えてますよ」

「え？なに？」

あつ、今、聞こえない振りされた。

絶対聞こえてるはずなのに。

もう一度同じ事を言おうとしたところで歌の間奏に入り、少し静かになる。

皆に聞こえるとまずいので、歌が始まるのを待つ。

下田先輩が歌いだしてから、さつきよりさらに近づいて、宮川先輩の耳元で同じ質問を繰り返す。

宮川先輩は押し黙ったまま何も言わない。

それからおもむろにウーロン茶を手に取り、口いっぱいを含む。

今度はなにか迷っているような態度に見える。

私が答えを促すように目をじっと見つめると、先輩は目を伏せる。もしかして本当に稲村先輩のことが好きなのかな？

「先輩、私変な質問してますか？」

「いや、別に変な質問をしてるわけじゃないよ」

「でも先輩なんだか答えにくそうですね。私はただ、稲村先輩ってどんな人なんだろう？宮川先輩も知ってるみたいだし少し聞いてみよう。って思っただけです。答えられないなら別にかまいませんよ」

稲村先輩の質問に対しては、軽い気持ちで質問しただけで『問いたです』というようなものではなかった。本当に質問したかったのはもう一つの方だったのだし。

でも先輩の態度がいちいち怪しいのでつい責めるような質問になつてたのかもしれない。

あまりにもおどおどするのでかわいそうになつてきた。

「もう一つ聞きたかったことがあったんですけど、もういいです」
なるべく先輩の負担にならないように、優しい口調で言う。

「なんだい？ 答えられることなら」

ということは、やっぱりさっきのは、答えられない質問をしていたってことなんだ。

何が答えられないんだろう？ 頭の中はクエッションマークだらけだ。

「それではお聞きします。ミーティングの前にステージでお会いしましたよね。どうしてあんなところに一人でいたんですか？」

「そ、それは……」

やっぱり答えられないみたいだ。先ほどからなぜか答えにくそうなので、この質問にも答えられないんだろうなと思っていた。

なので、あっさりあきらめることにした。

「答えにくそうなのでいいですよ」

私は宮川先輩にこれ以上精神的負担をかけたくなかったので、笑顔でそう言った。

どうしてそんなに追い詰められたような態度を取るのか、不思議で仕方なかったけど、これ以上は無理だと判断し、もう忘れることにした。

「ごめん。いずれ話せる時がきたら必ず答えさせてもらうよ」

え？ いずれって、そんなに大層なことなの？ 知らない間に私はすごいことに首を突っ込んでいたとか？

少し思案する。

まさかね。私はすぐに自分の考えを打ち消し、気持ちを切り替え

ることにした。

「大袈裟ですね」

私は笑いながら言う。

「一つだけ言うと……」

なに？

「あそこからだと22号棟の屋上にある展望台がよく見えるんだ……」

宮川先輩って話が上手いのか下手なのかよくわからない。でも知ってか知らずか、つい話に引き込まれてしまう。

「展望台？学校に展望台なんてあったんですか？」

「うん」

「じゃサークルの観望会ってその展望台からするんですか？」

「いや、今は使われてないんだ」

「どうしてですか？」

また黙ってしまった。

「先輩教えてくださいよ」

宮川先輩は口を閉ざしたままだ。

なんなんだろう？全くわけがわからない。

単にシャイで話が遅いのか、話すのが苦手なのか、話してはいけないことがあるのか。それとも計算して話しているのか、いったいどれなんだろう。

宮川先輩はもとも口数も少ないので真意が読み取りにくい。

なんだか宮川先輩と話すのも疲れてきた。と思っていたところに博美先輩が話に入ってきた。

「優希ちゃん、道雄と何ヒソヒソ話してるの？そんなに顔をくっつけあって」

「え？べ、別に普通に話してただけですよ。ちょっと歌声が大きくて話し声が聞き取りにくかっただけです」

「そんな力いっぱい否定しなくてもいいわよ。道雄がかわいそうじゃない」

「いえ、そんなつもりじゃ……　ただ事実を言っただけです」

「でも側から見たら恋人同士みたいだったよ。二人の世界に入ってたみたいだから、声かけるのわるいなあゝって思ってたのよ」

「ち、違います」

宮川先輩がどんな顔をしてるのかと思って見てみると、心ここにあらずといった表情で、何か考え事をしているようだ。

「宮川先輩もなんとか言ってください」

「え？あ、ああ」

やっぱり宮川先輩は私と博美先輩のやり取りを聞いていなかったようだ。

このままでは博美先輩に勝手に恋人同士にさせられそうだったので、私は下田先輩に話しかけた。

「下田先輩。それ私も歌いたいです。マイクーってください」

「おお、一緒に歌うか。よし来い」

下田先輩が歌っていた歌が、ちょうど知っている歌だったので、マイクをもらって下田先輩の席まで移動して一緒に歌った。

その後もしばらくカラオケで皆盛り上がり続けていたけど、私は帰りが一人だったのもあり、途中で抜けさせてもらうことにした。

「道雄、優希ちゃんが帰るって。外まで送っていつてあげなさいよ」

博美先輩、何を言い出すんですか。勝手にくっつけようとしなくてください。

「大丈夫です。店を出たらすぐ駅ですから。それに宮川先輩にも悪いですし」

「じゃ俺が送っていつてあげよう」

なぜか下田先輩が割ってはいる。

「いえ、ホント大丈夫ですから。ありがとうございます」

「新之助は関係ない。あつちで歌ってなさい」

「僕、トイレに行くからついでに……」

宮川先輩。トイレのついでって。

「優希ちゃん。ごめんね。道雄は口下手だからトイレと女性を送るのを一緒にしてしまってるけど、悪気はないのよ」

「はい。わかってます」

宮川先輩自身を送ってくれようとしてるなら、これ以上断るのも悪い気がするな。

「では皆さんお先に失礼します。ごゆっくり楽しんでください」
「お疲れ」

私たちが歌っていた部屋は3階だったので1階まで降りるためにエレベータに乗る。

「先輩わざわざ送っていただいて、ありがとうございます」

「いや、たいした事じゃないよ。それよりやっぱりさっきの事が気になって」

「もういいですよ」

「いや、やっぱり悪いから明日ちゃんと話すよ」

え？本当にもう別にいいのに。でも元々質問したのは私の方だし、答えると言われたからには聞かないといけないんだろ？

「あ、ありがとうございます」

「いや、僕のほうこそごめん。明日ちゃんと話すから、お昼にでもあのステージでどう？」

どうしてこうなっちゃったんだろう？明日は桜と一緒に昼食ベようと思ってたのに。

「はい、それでは明日お願いします」

本当は断りたかったんだけど、なんとなく一大決心しての誘いのように感じたので、簡単に断ることができず、結局今日のこの約束をしたのだった。

第63話 迷探偵・優希2

しばらく考え事をしていたが、だいぶ待ったような気がして、ふと時計を見る。

2限目は12時10分に終わるので、待ち合わせ時間を12時20分にしていた。

午後の講義は13時10分からなので、30分くらい話を聞いて切り上げるつもりだったのに、既に約束の時間を10分も過ぎている。

宮川先輩って時間にルーズな人なのかな？

とにかくもうしばらく待つことにする。

さらに10分待ったがやっぱりやってこない。どうしたんだろう？ なにか急用でもできたのだろうか？

これ以上待っていても来ないような気がして、まだ食堂にいるかもしれない桜と大輔に会いに行くことにした。

ステージから足早にいくつか校舎の横を抜け食堂へ向かっていると、遠目に校舎の影から宮川先輩の姿が見えた。

約束の場所に来ないで何をしてるんだろうか？

このまま気付かなかった振りをして素通りでもしようかと思ったのだが、見つけてしまったからにはやっぱり一応声をかけるべきかな？ と思い直して先輩に近づいていく。

近くまで来て、校舎で死角になっていた場所にもう一人いることに気付いた。

誰だかはわからない。しかし少し口論になっているようだ。口調が激しい。

言い争っているようだし、やっぱりこのまま知らん振りをしようと思っていたら、宮川先輩が突き飛ばされた。

『あつ』声にならない声で叫んでしまう。

それと同時に、突き飛ばした男の人の怒気を含んだ声が聞こえてくる。

「お前、しつこいんだよ。もういいだろ」

「西尾さん待つてください、もう少し聞きたいことがあるんです」

「うるさいな！俺は話したいことなんてないんだよ」

あの男の人は、西尾さんというのか。

どこかで聞いた名前のような気もするが、誰だか思い出せない。

すぐる宮川先輩の腕を乱暴に振りほどき、西尾と呼ばれていた男性はその場から立ち去った。

その男の姿が見えなくなっても、宮川先輩はその場にへたり込んだままだ。

私は急いで駆け寄っていく。

「先輩、大丈夫ですか？」

私はしゃがみこんで先輩の腕を持ち、引き上げるようにして一緒に立ち上がる。

「ありがとう。それと、待ち合わせに遅れてごめん」

遅れてって、ここは待ち合わせ場所じゃないですよ。そんなことより……

「それより大丈夫ですか？今の人はなんなんですか？」

「今のは西尾先輩だよ」

先輩はズボンについた汚れを叩きながら、私も知ってて当然というような言い方をする。

だけど誰だかわからない。

「誰ですか？私も知ってる人ですか？」

「そうか、よく考えてみたら入れ違いだから知らなかったね。あの人は元天文同好会の部員で、部長たちと同じ3年生だよ」

そういえば歓迎コンパの時に、部長の知らない間に辞めた人がいたって話をしていた記憶がある。

その時、名前も言ってたけど、名前はすっかり忘れていた。

「そうですか、その西尾先輩がどうして宮川先輩を突き飛ばすんですか？」

「まあ、いろいろあつてね」

宮川先輩の気弱な性格のためなのか、自分に非があつたのか、そのあたりはわからないけど別に怒ってる風でもない。

「先輩、どうします？時間も遅くなりましたし、私もそろそろご飯を食べて、午後の講義に出る準備をしたいと思うんですけど」

「そうか、午後から講義とってるんだ。それじゃもうあんまり時間がないね。講義が終わってからにしようか？」

え？先輩積極的。でも昼休みを台無しにされて、帰りまで潰されちゃ大変だ。今日は桜と帰るつもりだし、あんまり遅くまで拘束されるのめかなわらない。

「ごめんなさい、今日はちょっと用事があるので」

「そうか、こつちこそごめん。約束があつたのに、西尾先輩に偶然会って話し込んでしまつて。また明日以降に時間が合えばそのときにでも話そう」

先輩的にはなにがあつても話をするのは決定しているようだ。

ということは、これはどうしても一度話をしないとおさまらないつてことよね。

それなら、どうせ一度は時間を潰されるなら今日でもよかったかも……

しかし今更、やっぱり今日でもいいですとは言えないので、明日以降ということにしてその場は先輩と別れた。

私は大急ぎで食堂へ向かいながら時計を確認する。あと2分もすれば1時になつてしまう。こんな時間だし、桜と大輔は食事を終えてしまつてるとは思いながらも、もしかしたら食後もそのまま食堂で話しこんでいるかもしれない。

と、淡い期待をもつて走る。

食堂についてとりあえず一度ざっと中を見回す。

食堂はとても大きく、たくさんの長いテーブルが並べられている。高校のときも大きいと思っていたが、大学は桁が違う。

縦のラインには、8人掛けの長テーブルを3つ繋げられたのが2つ。そしてそれが15列くらい並んでいる。

単純に720人が座れる計算になる。

徐々に人が引きだす時間帯になってきてるとはいえ、まだ6割以上埋まっている席から桜を捜すのは大変だ。

私は別れる前の桜の服装を思い浮かべながら、順番にテーブルを回り、ブルーっぽい色を一つ一つ拾っていく。

居ない。やっぱりもう食べ終わっちゃったんだろう。

午後の講義までもう10分しかなし、きつともう教室に行っちゃったんだろう。

それともまだどこかでお茶でもしてるかな？

はあ〜と大きなため息を胸の中でつく。結局宮川先輩とも話ができなかったし、散々だな。

考えてても仕方ない、とにかく何か食べよう。

もう普通に食事をする時間はないので、おにぎりを1個だけ食べることにする。

私は肩を落しながら食券売り場へ向かう。

学食のメニューは豊富でなんでもあると言っている。

その中からおにぎり1個を買うなんて寂しい気持ちになる。

値段を確認すると80円。学食ってホント安いなあ。

私はカバンから財布を取り出し、その財布から100円玉を1枚出す。

「ゆきちゃん」

券売機にお金を入れようとしたところで名前を呼ばれる。

振り向くとそこには桜と大輔がいた。

私はお金を入れるのを止めて二人の元へ行く。

「どうしたの？まだいたの？全然気付かなかった」

「もうご飯食べ終わってお茶してたの。そしたらゆきちゃんが走っ

て食堂へ向かつてるのが見えたから、急いで追いかけてきたの」

「そうだったんだ」

「きつと私たちがまだ居るかもって思っで、急いでるんだと思っただから」

「そっだよ。桜、わざわざ来てくれてありがとう。」

「なんとなく照れくさくて、声に出しては言えない。」

「今から食事？」

「うん、桜たちはもう食べ終わっててるんでしょ？もう時間ないし二人で先に行っで」

「俺、今日はもう帰るから」

「え？そっなの？またバイト？」

大輔が頷く。

「あんまりバイトばかりしてたらダメだよ。授業はちゃんと出ないと」

「わかつてるんだけど、店長がどうしても人手が足りないって泣きつくから」

「私もちゃんと講義に出るように言っでるんだけど、人が居ないからって言っで聞いてくれないの」

「わかつてるって。昨日面接に来た人を雇っつもりみたいだから、そっなったらちゃんと前のシフト通りにしてもらっよ」

「うん、そっしてもらっでね」

「じゃ、そっいうことで俺はもう帰るわ」

「気をつけてね」

「ああ」

「そっ言っで大輔は一人帰っでいった。」

「それよりもゆきちゃん」

「ん？」

「もうあんまり時間ないよ、早く食べないと講義に遅れちゃっよ」
「ホントだ」

「もう後5分で午後の授業が始まっでしまっよ。」

「ダメ、もう食べてたら間に合わない。このまま授業に出よう」

「え？大丈夫なの？」

「うん、次の講義が終わったらおにぎりでも食べるよ」

「じゃ急ぎましょ」

そうして私達は講義のある教室へ急いだ。

二人で5限目まで講義を受けた。

5限目が終わって校舎の外にでるが、まだ薄明かりが残っている。最近では6時半頃にならないと真っ暗にはならない。

「じゃ、結局宮川先輩と何も話してないの？」

校門に向かって歩きながら今日のお昼の出来事を話す。

「うん。西尾先輩という人と揉めてみたいだったんだけど、何を揉めてたのかもわからないし」

「その西尾先輩って元同好会メンバーなんですよ？」

「歓迎コンパの時に名前が出たんだけど、桜覚えてる？」

「覚えてないなあ。誰かが辞めたって話だけなら覚えてるけど……」
と、その時、桜が突然「あつ」と小さな叫び声をあげる。

「ど、どうしたの？」

桜の声に合わせて、私も思わず小さな声で反応してしまう。

「ほら見て、あそこ」

私たちは校門へ向かうために池の広場に出てきたのだが、ちょうどその時池の広場からステージのある方へ向かう人がいた。

「宮川先輩だ」

「でしょ、どこへ行くのかな？」

「どこだろ？」

「ちよつと様子を見てみようよ」

「え？後をつけるの？」

「うん、尾行してみようよ」

「桜、楽しそうね」

「えへへ」と声が聞こえてきそうな表情を浮かべて舌をだす。

「とにかく後を追おうよ」

そう言ったかと思うと、私の返事も待たずに一人で宮川先輩の後をつけていく。

「ちょ、ちょっとまって」

そう言いながら私も好奇心に誘われ、桜と一緒に宮川先輩の後をつけた。

第64話 迷探偵・優希3

「ゆきちゃん、こっち、こっち」

桜の手招きに応じて、宮川先輩の後をつける。

「どこに行くんだろうね」

この先には野外ステージがある。誰かと待ち合わせでもしているんだろうか？

「ゆきちゃん、宮川先輩ステージに行くのかな？」

「そうかもしれないね」

丁度そのころ、私達は高台にさしかかっていた。

時刻は6時半になろうとしている、今はまだある程度明るい、そろそろ日も落ちそうだ。

「とにかくついていきましょ」

先輩がステージの中央扉の前で立って、周りをきよるきよる見回している。

やはり誰かと待ち合わせをしているんだろう。

しかし高台から5分程しか経っていないのに、日が沈み出したと思ったら、あつという間に日が暮れてしまった。これでは人を識別するのは難しいかもしれない。

「やっぱりステージだったのね。でもどうしてこんな所に来たんだろ。ゆきちゃんどう思う？」

「だれかと待ち合わせかな？」

木の陰で桜と話し合っていると、校舎からステージへ続く道を通って誰かがやってきた。

「桜、誰か来たよ」

「ホントだ、ゆきちゃんの言った通り、誰かと待ち合わせしていたみたいね、でも誰だろ？」

まだ真っ暗というほどではないけど、かなり薄暗くなっていて、

ここからだとか誰かわからない。そもそも私達の知ってる人とも限らないけど。

ただ、服装や髪型などのシルエットから女性だということは間違いなさそうだ。

「やっぱりちよつと暗くてわからないね」

「私ちよつと見てくる」

「え？ダメよ。見つかるよ」

桜が様子を見に行くなんて、とんでもないことを言うので止める。
「大丈夫、私達から見え難いってことは、あっちからも見え辛いはずだから」

桜の言ってることは確かに間違っていないけど、あんたはどんくさいんだから、それをちゃんと加味してくれないと……

「桜、別にもういいじゃない。帰ろうよ」

「ええー、ゆきちゃんは今ここで来て待ち合わせの人が誰だか気にならないの？先輩の彼女かもしれないし。見てみたいじゃない」

「まあ、そうだけど。でも見つかったら気まずいし」

「大丈夫、任せて」

桜だから任せられないのよ。

と、考えてる間に桜が飛び出して行った。

桜を追って私まで一緒に飛び出してしまいそうになるが、ギリギリで踏みとどまる。

二人もこんな木陰から飛び出したら、それだけで見つかってしまうかもしれない。

桜はゆっくり遠巻きに、徐々に近付いて行く。なかなか慎重だ。

幸い二人は向かい合って話し合っているせいか、桜の存在に気付いていない。

当の桜より、ここで見てる私の方がドキドキしてるのかもしれない。

ここは学校の敷地の奥まった場所にあるため、この時間は軽音部

が使っていないと人通りなんて殆どない場所だ。

だから桜が一人でこんなところを歩いているのは不自然だ。それでも二人は話に夢中なのか、未だ桜が近付いて来ていることに気付かない。

桜が5メートルほどの距離に近付き二人の横を通り抜けようとした時だった。

二人の方ばかり見ていたため、自分の歩いている線上にゴミ箱があることに気付かず思いっきりぶつかる。

金網でできたゴミ箱はがしゃーんと大きな音を立てて桜と一緒に倒れこむ。

「あちゃー」

私は思わず小さな声をあげてしまう。

あれだけのアクションを起こしたんだ、宮川先輩も気付かないはずがない。

桜の存在に気付いた宮川先輩が駆け寄る。

しかしなんてべたな見つかり方をするんだろうか。これほど見事に私の嫌な予感が的中してしまうとは。

どうしようか考えたけど、桜が見つかってしまったんだし、ここで隠れてても仕方ないと判断し、私も桜の元へ走る。

騒動の最中、待ち合わせの女性は何も言わずに帰ってしまったが、宮川先輩と一緒に居たのは稲村先輩だったことがわかった。

桜は大仰にひっくり返ったわりに、どこも怪我することなく無事だった。

待ち合わせの稲村先輩が帰ってしまったので、三人で一緒に駅まで帰ることになった。

「君達はどうしてあんなところに居たんだい？」

尾行していたと言にくい。

なんて答えればいいのか頭をフル回転させる。

桜も答えに困っている。

「え、えっと、そうだ。宮川先輩がステージから展望台が見えるって言ってたので見に来たんです」

なんとか言いわけを思いついてほっとする。

「今日の昼に来た時に見なかったの？」

そうだった、今日のお昼にステージで待ち合わせしてたんだ。ほっとしたのも束の間、次の言いわけを考える。

「え、ええ。そ、そうなんですけど……　そ、そうだ。桜に話をしたら、桜も見たいと言ったから講義が終わってから見に行こうってことになって……　ね、桜」

私は桜に同意を求める。

「ええ。そうなんです」

何かなんだかわからないという表情だけど、なんとか話を合わせてくれる。

「なるほど、そういうことだったのか。じゃ咲原さんも僕の話に興味を持ってくれたのかな？」

「ええ、はい」

桜が消え入りそうに小さな声で返事をする。

きつと桜には話が殆ど見えていないはずだ。

だからなんと答えればいいのかわからず、不安げな返事をしていくんだらう。

「そうか」

そう言ってから、宮川先輩が何か思案している。

何を考えているんだらうか？　もしかして嘘がばれたのかな？

「よし、じゃ今から三人でどこか、そうだな暁明館ぎょうめいかんでも話をしようか？」

え？　何を考えているのかと思ったら、そんなことを考えていたの？　興味本位で尾行してしまったことから、嘘をつくはめになってしまい、そして今から話をしようと誘われてしまうなんて。

ちよっとした出来事から、自分が全く意図しない方向に話が流れ

てしまっている。

しかし今更嘘でした、尾行してましたとも言えない。
「ちよっと待ってください、桜と相談します」

先輩から少し離れて桜と小声で話す。

今回のいきさつは少し話していたが、もう少し詳しく説明して、
今日これからどうするか桜に決めてもらうことにした。

桜いわく、今日は大輔との約束もなく、時間を気にしなくて良いらしい。

それに宮川先輩が何を話してくれるかも興味があるらしい。

ということで『ゆきちゃんが大丈夫なら、今からでも一緒に話を聞いてもいい』ということだった。

私もどうせ一度は話を聞かないといけないと思っていたところだし、桜と一緒に聞けるなら先輩と二人っきりで話すよりよっぽど良いので、助かったという気持ちだ。

二人の意見がまとまったところで先輩に告げる。

「先輩、桜も一緒に話を聞きたいと言ってるので、今からきょうめいかん暁明館へ行きましょう」

「わかった。でも真下さん、今日は用事があるって言ってたけど大丈夫？」

「用事は、大学の帰りに桜と一緒にご飯食べて帰ろう、という約束だったので大丈夫です」

「そうか、それなら良かった。じゃ行こう」

辺りはもうすっかり日が落ち暗くなっている。

薄い雲の隙間からいくつかの星が輝いているが、多くは雲に覆われ霞んでいる。

そんな空を見上げ、ため息にも似た大きな息を吐き出す。

こうして私は桜を巻きこみ、歓迎コンパで使った居酒屋『暁明館』
へ向かったのだった。

第65話 迷探偵・優希4

私ははつきり言つてどちらでもよかった。多少疑問に思つたりもしたけど、なんだかいろいろ絡み合つていて難しい話のような気がしたから。

ただどうだろう、隣に座っている桜は好奇心丸出しで生き生きとしている。

先輩から早く話を聞き出したいといった態度だ。

私は逆にあまり難しい話には首を突っ込みたくなかった。何故かわからないけど、いやな予感がしてたまらない。

店内は相変わらず学生達でいっぱいだったが、運よく1階の4人掛けになつている棧敷さじきに座っていた先客が帰るところだったので、そこに通してもらえた。

立て板一枚隔てたすぐ隣にも、同じ大学の学生らしき人達が座っているが、店内がががやがやしているので話し声はあまり気にならない。

要するにこちらでも深刻な話をしたとしても、それほど周りを気にする必要もないということだ。

「お待たせしました」

ホールスタッフがウーロン茶とオレンジジュースを運んできた。

「じゃとりあえず乾杯」

宮川先輩がジョッキを突き出してきたので私達もそれに応えてジョッキを持ち上げる。

「おつかれ」

「お疲れ様です」

皆が一口飲んでジョッキを置く。

「早速ですが、どんな話なんですか？」

桜が我慢しきれずに先輩を急かす。

「ゆきちゃんに少し聞いたんですけど、なんだか先輩の言動がミス
テリっぽくて気になるんです」

先輩は苦笑にがわらいともとれるような笑い顔を浮かべ、ゆっくりと口を
開く。

「いろいろ疑問はあると思うけど、この一連の話のゴールを言っ
ておこう」

なんだろう？不思議な話し方をする人だな。

「僕の願いは一つ。それはあの22号棟の屋上にある天文台を再び
使えるようにしたい。ということだ」

歓迎コンパやミーティングでは引込み思案で大人しいタイプに
見えたけど、実際はそんなことないんだろ？初ミーティングで
プラネタリウムの話になった時も急に饒舌になっだし、昨日のカラ
オケでも最後は私が聞かないことまで積極的に話し始めていた。

もしかしたらそっちの方が本来の宮川先輩ほんらいの姿なのかもしれない
気がしてきた。

「どうして使えなくなっただんですか？」

「話すと長くなるけど大丈夫かい？」

ここまできて大丈夫じゃないなんて言ったら桜にうらまれるだろ
うな、と考えて内心苦笑してしまう。

「大丈夫です。聞きたいです」

桜はいちにもにもなく即答する。

先輩が返答を促すように私の顔を見てくるので、私も大丈夫です
と答えた。

「中野静香……」

ため息と共に漏れたような声から一人の女性の名前が出てきた。
そしてその名前を口にした途端、先輩の態度が急変する。

たった今まで和やかな雰囲気だったのに、憂いを込めた表情にな
る。

「中野静香？」

桜が聞き返すと今度は鋭い目つきになる。ある種の決意のような、強い意志とでもいうのか、そんなものが感じられる。

そしてまたゆっくりと話します。

「そう、中野静香。その女性があ天文台事故の中心人物なんだ」

「天文台事故ってなんですか？」

先輩は真剣な眼差しで、順を追って話すからしつかり聞いてくれと言った。

漠然としていて、まだ話がまったく見えない状態なのに、これから話される出来事に何故か背筋が寒くなるような感覚を受ける。

先輩の凄みのある態度に、桜も先ほどの好奇心は影を潜め、こわばった表情をしている。

「実は、あ天文台は稲村先輩のお父さん、『稲村幸造』さんが作ったものなんだ」

驚きのあまり、私は桜と顔を見合わせる。

「稲村幸造さんは世界的にも有名な建築家で、この大学の卒業生でもある。そこで大学側が新しく建てる22号棟の建築を依頼したんだ」

稲村先輩の家はお金持ちだと思っていたけど、お父さんが世界的に有名な建築家だったとは知らなかった。

「失礼します、刺身三種盛りと、シーザーサラダです」

料理が運ばれてきたけど誰も手をつけない。

とりあえず先輩の話が一段落するまではこのまま聞いていたい。

「幸造さんは学生当時、天文サークルで部長を務めた経験もある天文サークルのOBなんだ」

天文サークル？今の天文同好会とは違うのかな？まだ話は続くようなので口を挟まず先輩の話が終わるまで待つ。

「そういう訳で当時の天文サークルのメンバーに寄付という形で、22号棟の建築と共に天文台を作ったんだ。それが今から5年前の話だ」

なるほど天文台ができたいきさつはよくわかった。

「ちょうどその年に中野静香という一人の女性がこの大学に入学し、そして天文サークルに入部するんだ」

「失礼します。軟骨のから揚げと、串焼き盛り合わせです」

また料理が運ばれてきたので、テーブルの中央に並べた。だけど誰も手をつけない。

先輩がウーロン茶を一口飲んだので、私達もつられてオレンジジュースを一口飲む。

先輩は私達がジュースを飲み終わるのを待って、話を続ける。

「彼女は何も悪くないんだ。普通にこの大学に入学して、普通にサークルに入っただけだった。初めの1年はよかった。何事もなく穏やかな1年だった。だが2年に上がってから少し状況が変わったんだ。彼女は家庭の事情からサークル活動にあまり参加する時間がなくなってしまったんだ。でも星が好きだった彼女は時間が許すときは極力サークルに参加していた。でもその態度を快く思わない先輩が数人いたんだ」

宮川先輩、やけに詳しいけど、これらの話はここの学生なら誰でも知ってるレベルなんだろうか？

「ある日、その上級生二人が中野静香を呼び出すんだ」

そこで先輩が一旦話を切る。

私は次の言葉を待ちながら先輩の手を見る。先輩はこぶしを握っているが、そのこぶしが小刻みに震えている。こちらから見ても相当力が入ってるのがわかる。

これから話すことを思うと怒りがわいてくるのだろうか？わなないているように見える。

「そこで事件がおきる」

事件？さっきは事故と言っていたと思うんだけど？

「その先輩二人は彼女に退部を迫るんだ。でも彼女はサークル活動に極力参加するので続けさせてくれと懇願するんだ」

その先輩二人に退部させたり、続けさせたりする権利があるんだろうか？

「もちろんその先輩二人には何の権限もなかったのだが、先輩に威圧されて少し気の弱かった彼女は下手にでてしまったんだ。それで調子に乗った二人は、部に留まれるようにしてやるという事の交換条件として、あろうことか彼女に裸になるように要求するんだ。後から考えるとはじめからそれが目的で退部を迫ったのかもしれない」

な、なんてことを。

「もちろんそんな要求に応える必要はなかったんだけど、半ば強引に服を剥ぎ取られて写真に撮られてしまうんだ」

「ひどい、その先輩許せない」

今まで黙っていた桜だが、さすがに我慢できなかったんだろう、怒りを口にした。

私も許せない気持ちだ。

「そんなの警察に訴えればいいのに」

「そうなんだけど、気の弱い彼女はどうすることもできなかったんだ。とにかくその場合は写真を数枚撮られただけで帰してもらったらしい」

「そうなんですか。でもよかったとは言えませんが、それだけで済んだことは不幸中の幸いと言っていいのかな？」

そう言った桜が不安げに私を見る。自分の言動が不謹慎なものじゃないか心配になったんだろう。

しかし私も同じ思いだ。その状況でそれだけで済んだなら助かったと思うべきかもしれない。

そのまま乱暴されてもおかしくない状況だったのだから。

「そうだね、それだけで済んでいたら事故はおきなかったかもしれない」

「どういうことですか？」

この問題には事件と事故の二つがあるってことなんだろうか。

今の事柄が事件でこれから事故についての話になるってことだろうか。

「その事件にはまだ続きがあるんだ。その後、その写真をネタにま

た彼女を呼び出すんだ」

なんて卑劣な。私も桜も次の言葉が出てこない。

「それから何度か呼び出されては卑猥な写真を撮られるんだ、そして……」

そこまで話して宮川先輩が言葉を詰まらせる。声はもちろん全身を震わせている。

激しい怒りと共に、悲しみをまとった目を真っ赤に充血させている。

今にも涙が零れ落ちそうだ。

「そして、ついに、その二人の先輩は…… 彼女に、乱暴をしようとするんだ」

途切れ途切れに話す先輩はもはや完全に泣いている。

私もこの話を聞いて、同じ女としてその女性の境遇はあまりにもかわいそうすぎるし、先輩二人には怒りも覚える。しかし過去の出来事にこれほど感情移入するものだろうか？

もしかして先輩はその彼女と、何らかの繋がりがあるんじゃないだろうか？

「酷いです、その二人の先輩は絶対に許せません。ね、ゆきちゃん」
そう言って私の腕を掴んできた桜も、涙を流して泣いている。
もしかして私が冷めているだけなんだろうか？

すごくかわいそうな話だけでもう過去のこと、今さら泣くほどでは……

「ありがとう、咲原さんもそう思ってくれるかい」

「当然です」

桜の答えを聞いた宮川先輩が私を見るので私も頷く。

もちろん私も許せない気持ちはある。涙が出るほどではないけれども。

一呼吸おいて、宮川先輩は涙を拭く。そして気持ちを落ち着かせるようにウーロン茶を一口飲んで話を再開させる。

「男二人に力づくで押さえこまれ、なすすべなく一人の男に体を奪

われたそうだ」

桜は声を漏らさないように、口にハンカチを押し付けながら泣いている。

私も胸が締め付けられる思いだ。

「そしてその行為が終わって男二人がたばこをふかしていると、彼女は柵を乗り越え建物の端に立っていたらしい」

なんてこと、自殺してしまったんだ。

「22号棟は屋上になっている場所は塀はなく周囲すべてが鉄柵になっている。高さはせいぜい120cmくらいだろうか？女性の背丈でみても胸のあたりくらいしかない。そしてその柵の外側は50cmくらいの足場があるだけだ」

その気になればいくらでも乗り越えられる高さだ。確かに危ない構造といえる。

私と桜は固唾をのんで先輩の次の言葉を待つ。

「男二人は彼女が自殺するものだと思います、急いで助けようとする。そりゃそうだよ、自分達が原因で自殺なんてことになったら大事件になってしまうから必死だったんだろう」

「それで、その女性は助かったんですか？」

「この辺りの真意はわからないんだけど、助けようと塀を乗り越えた一人の男の方が屋上から落ちたんだ」

「え？男が？」

「そうなんだ、焦って助けようとして足を滑らしたんだろうってことになっているけど、彼女が突き落としたとの噂もあるんだ」

どっちにしても自業自得だ。命と引き換えにしなければならなかった程って言いかわからないけど、一人の女性の人生を無茶苦茶にしてしまったのは間違いない。そして助けようとした理由も自分可愛さだろうし。

情状からその先輩を哀れに思ったり、痛ましく感じることも殆どない。

「それで、結局その女性はどうなったんですか？」

「その前に少し彼女の話をしておこう。実は彼女、ご両親をなくしていて弟と二人暮らしだったんだよ。だから高校を卒業したら働くうとしていたらしんだけど、唯一の親戚である母親の妹が援助をするから学校へ行くようにと、強く勧めたんだ」

そんな境遇の女性に対して、そんな仕打ちをするなんて本当に酷い先輩達だ。

もちろんそんな家庭的事情を知っていたとは思えないけど。

「大学に入学当時は叔母夫婦に仕送りをしてもらっていたんだけど、彼女が2年に上がった頃、叔母夫婦の仕事がうまくいかず大きな借金を背負ってしまうんだ。それでも叔母夫婦はぎりぎりの金額だったけど仕送りを続けたんだ。彼女も気を使っただろう、学校を辞めて働こうとしたんだけど叔母が続けるようにと言ったため、在学したままアルバイトをいくつもこなす様になるんだ」

なるほど、それで2年になってからあまりサークルに参加できなくなっただんだ。

「そしてその事件があっってからしばらくして、彼女と弟は叔母夫婦と共にオーストラリアに行くんだ」

「オーストラリアですか？」

「そう、仕事がつまらなくてなかった叔母夫婦は仕事場をオーストラリアに求めることによって再起しようとしていたんだ。そして当時完全に自分を閉ざしてしまっていた彼女のためにも一緒にオーストラリアに行くのがいいたろうということになったんだ」

「そうですか、それでは今でも彼女はオーストラリアに？」

「うん」

「彼女は平穏無事に暮らしているんでしょうか？」

「心の傷はまだ癒えていないけど、叔母夫婦の仕事も軌道にのり、借金も早々に返すことができて環境としては平穏な日々を送っている」

「そうですか、それは良かった」

なんともすごい話を聞かされたけど……

「この話は学内では有名なんですか？」

「そうだね、ここまで細かくは知らなくても事故と事件のことはある程度知ってるんじゃないかな？」

「そうですか」

「やっぱり先輩…… いや、まだはつきりした事はわからないけど。でも、もしかしたら……」

「それで、先輩はあの展望台をもう一度使えるようにしたいんですよね？」

「うん。稲村先輩を通じて幸造さんを説得してもらい。そして幸造さんから屋上の安全性を学校側へ訴えてもらいたいと思っている」

「それで稲村先輩と待ち合わせしていたんですね」

先輩が頷く。

「とにかく今は屋上への扉を完全に封鎖されていて上がることができなくて、展望台がどんな状態なのかもまったくわからない」

私は一つの疑問を先輩にぶつける。

「それはわかりましたけど、どうして私達にこんな話をしたんですか？」

稲村先輩と知り合いでもなんでもない私達が、なにか協力できるとも思えない。

「申し訳ない。君達に展望台のことをどうこうできるとは思っていない。ただ」

「ただ？」

「どうしたんだろう？ なにかためらっているようだ。ここにきてまだ話せないことがあるんだろうか？」

「ただ、昨日カラオケで真下さんと話していると、何故だかわからないけど彼女の話を聞いて欲しいと思ってしまったんだ」

「どうということだろうか？」

「真下さんの瞳がとても綺麗に見えたんだ」

「え？何を言い出すの？」

「喜びも悲しみも憂いも、何もかもを超越したような澄んだ瞳を見

ていると、吸い込まれそうになる。そして何故か安心させられる。君になら何を話しても大丈夫。何もかもを包容できる心をもつてると感じたんだ。だから話したくなつたんだ」

「は、はあ」

私はそんな瞳をしているんだろうか？それよりも包容力なんて欠片も持ち合わせていない。

さっきの話だって桜の方が泣くほど感情移入していたし、私の心の中なんて醜いだけなのに……

「先輩ゆきちゃんの事好きなんですか？」

「ば、ばか。桜、何言い出すのよ。」

「わからない」

わからないって？どういう意味にとればいいの？

「とにかく真下さんの人間性がすばらしいと感じたんだ」

桜が『へー』と言いながらにやにやした顔をこちらに向ける。

「そうだ、せっかくの料理を全然食べてないじゃない。お腹空いたし食べようよ」

私は乱暴に一本の串焼きを取って口に運ぶ。

昨日の博美先輩といい、桜といいなんでそんな風に話をもっていくんだろうか。

「そうだね、ちょっと話が長くなって冷めちゃったけど食べようか。何か追加するなら遠慮なく頼んでね」

「はい」

私達はすっかり冷めてしまった料理を、いろんな思いの中食べたのだった。

第66話 名探偵・優希1

先輩の話にいくつかの疑問点があったけど、それも質問させてもらってだいぶ全貌が見えてきた。

家に帰ってきた私は、今日の話进行い出しながらメモに要点をまとめるとめる。

？先輩は事故によって使用不可となった、展望台の使用許可を得たいと願っている。

？展望台は稲村先輩の父、稲村幸造からの寄付によるもの。

？4年前に中野静香の事故&事件発生。

？事件は裸の写真をネタに強姦する。

？事故は一人の先輩が足をすべらせ屋上から転落。

？事件の犯人は二人。うち一人は死亡、もう一人は普通に卒業して就職をしている。

？両親がいない中野静香は当時弟と二人暮らし、事件後は叔母夫婦と共にオーストラリアへ。

宮川先輩の話を元に補足を入れると、事件に関しては学校側が徹底的に隠蔽した^{いんぺい}ことによって脅迫、強姦の事実はなかったことになっているとのこと。

よって事故のことは知っていても、事件があったことは当時の在学生でもほとんどの人が知らないらしい。

今日の話で私がつとも疑問に思う点は、宮川先輩が事件に詳しくすぎるといふ点だった。

それに中野静香の話をしてた時の話し方にも違和感を感じた。後半で中野静香の境遇を話していたときの話し方は、まるで当事者かもしれないその目で見てきたような断定的な話し方をしていた。

それとあの感情を露にした態度も気になる。

きつと宮川先輩と中野静香には何か繋がりがあるはずだ。

先輩は否定していたけど、きつと先輩は中野静香を何らかの形で知っているんだと思う。

今回の一連の話で、この出来事に興味を持ったというよりも、何もかも釈然としない不思議な感じが気になって仕方ない。

居酒屋で話を聞くまでは、先輩の話を聞かなければならないということが面倒で嫌だったけど、今はいくつかの疑問をすべて解き明かしたいという気持ちだ。

まず中野静香という人物をもう少し掘り下げて調べてみよう。そうすることで宮川先輩との繋がりが見えてくるかもしれない。

当時の天文サークルメンバーがわかればいいのだけど、サークル自体が廃部となっているためどうすればいいのかわからない。

学生課に問い合わせれば何かわかるのかな？

その前にとりあえず部長に聞いてみようか。それとも稲村先輩に聞いてみるのがいいだろうか？稲村先輩ならお父さんから何かを聞いて知ってるかもしれないし。

とりあえず明日、部長と稲村先輩の二人に話をきいてみることにしよう。

木曜日の朝、玄関を出たところで思いつきり体を伸ばす。

いつもと変わらない穏やかな日差しが、昨日中野静香さんについて話した事自体がまるでなかったことだったような感覚にさせる。

しかしあの居酒屋で先輩と話をしたのは紛れもない事実で、あの事件も事故も過去のこととはいえ間違いないことなんだ。

昨日の話はまだ鮮明に記憶されていて、思い出すたび中野さんがかわいそうで気持ちが沈んでしまう。

心の中は話を聞く前までと全く違っているけど、表面的にはいつ

もともと変わらない爽やかな朝の風景だ。

私は気を取り直し、自転車にまたがり駅へ向かってペダルを踏みだす。

駅へ向かう道を走っていると、途中にお寺がある。

そのお寺には綺麗な藤の花が咲いていたが、その藤もそろそろ終わりになりそうだ。

「そういえば、来週からゴールデンウィークが始まるんだった」

なんとなく独り言をもらしながら、強い日差しを恨めしく睨みつける。日傘をさすようなタイプではないけど、紫外線が気にならないわけではない。

早く駅に着いて日陰に入りたいけど、自転車を速くこぐと汗が吹き出てくるのでゆっくりとこぎながら駅へ向かう。

駅の駐輪場ではめずらしく大輔が既に待っていた。

「大輔が一番つてめずらしいこともあるもんね」

「俺だつてたまには早起きすることもあるんだよ」

「それより桜はどうしたの？一緒に来なかったの？」

「それが寝坊して、まだ支度ができてないから先に行つてつて言われた」

「あはは、めずらしいことするからそんな目に遭うんだよ」

「うるさい」

大輔の間の悪さに本気で笑つてしまう。

「それより、昨日桜から聞いたよ。展望台事件のこと」

昨日帰ってから電話したのかな？それとも夜に二人で会つてたんだろうか？

「桜、中野静香つて人がかわいそうつて言つて泣いてたよ」

「そうだね、先輩の話を聞いているときも泣いてた」

「優希は泣かなかつたのか？冷たいやつだな」

一瞬むっとしてしまう。

大輔は私のことを、気がおけない友達と思つての何気ない一言の

つもりか知れないけど、そんな風に言われると腹が立つ。

「悪かったわね、血も涙もない冷血人間で」

「げっ、怒ったのか？ごめん。冗談だよ」

冗談なのはわかってるけどちょっと傷ついた。でもすぐに謝ってくれたし、いつまでも怒るようなことじゃないってことはわかってる。

「怒ってないよ」と言いながらいたずらっぽく少し舌をだす。

「うわっ、気持ち悪っ」

な、なんだとー。

今度こそ本当に怒ったぞ。

「気持ち悪いってなによ！」

私は右手を振り上げて、殴りかかるような格好をする。

「わっ、よせよ。冗談だって」

うるさい、問答無用！と言おうとした寸前だった。

「ごめん。お待たせ」

桜の声だ。

背後から聞こえてきた桜の声に、私は右手を上げたまま固まってしまっ。

「ゆきちゃん、どうしたの？」

別に何もやましいことはない。でも何故か体を硬直させたまま振り向くことができない。

「桜、聞いてくれ。優希のやつ俺を殴って調教しようとするんだ」

は？調教って、なんてこと言うのよ。

私は慌てて振り向き、言いわけをする。

「ち、違うのよ桜。大輔が私のことを血も涙もない冷血人間って言うから、懲らしめてやろうと思って」

「そう、そう思って俺を殴ろうとしたんだ」

桜になんてこと言うのよ。

「もう、大輔くんが悪いんですよ。ゆきちゃんに意地悪しないでよ」
ほっ、よかった。桜はちゃんと理解してくれてる。

「そうなんだよ。大輔が悪いんだ。桜助けて」

私は桜の腕に抱きつく。

「なんだよ、お前ら女同士で抱き合って。気持ち悪いな」

「うるさい」

「早くしないと電車来るよ。急ぎましょ」

桜は相手にしてられないといった様子で自転車をとめ、皆を急かせる。

三人で昼食をとっていたときに、今日は昨日の話の気になる点を調べたいので講義が終わった後一人で行動したいと言っておいた。そういうわけで、桜は大輔のバイトが休みだったので一緒に帰って行った。

一人になった私は天文同好会の部室へ向かう。

部室はミーティングをする教室とは違って、望遠鏡などの機材が置いてある教室で、ミーティングのない日などは暇なメンバーがたむろしている。

「おはようございます」

ドアをかけると同時に挨拶をする。

「おはよう」

声の主は副部長の坂上先輩だ。

「優希ちゃん一人？めずらしいね」

私は「はい」と返事をしながら他にメンバーはいないのかときよるきよるさがしてしまう。

「どうしたの？誰かお捜しかな？」

「捜すってほどでもないですけど、部長はいるのかな？と思って」

「芳郎ならもう帰ったよ」

そうなんだ。帰っちゃったんだ。でもよく考えたら天然の部長よりも、ちゃんと話を通じる副部長に聞くほうがいいかもしれない。

「どうしたの？芳郎に用事だったの？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど、部長の姿が見えないの

で珍しいな、と思っただけです。それより副部長に少し聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

「どうしたんだい、改まって。答えられることならいいんだけど」

「はい、実は副部長に」

と、そこまで言ったところで副部長からストップがかかる。

「ちよつとまった」

「なんででしょう？」

「その副部長つてのやめない？別に偉いわけでもないし、副部長つて微妙だから名前と呼んでもらったほうがありがたい」

「そうですね、わかりました。では坂上先輩って呼ばせてもらいますね」

「OK」

「お聞きしたかったのは、天文台事件についてなんです」

「天文台事件か。どうしてそれを？」

「宮川先輩からチラツと聞いたんです。それでもつといろいろ知りたいと思ったので、先輩なら何か知ってるんじゃないかと思ひまして」

同じ天文の部だから詳しく知ってるかもしれないと思つて、あえて事故ではなく事件と言つたけど、先輩の反応からすると、先輩も事件のことを知っているようだ。

「なるほど、でも僕も事件のことはあまり知らないよ」

「どんなことでもいいんです。知ってることを教えていただけないでしょうか」

「そうだな、例えばどんなことを知りたいんだい？」

「中野静香という女性のことを何か知ってますか？」

「期待に込えられるほど知ってるとは思えないけど、知ってることを言つと……」

坂上先輩に聞いた中野静香という人物は昨日宮川先輩に聞いたことよりも情報が少なかった。

やっぱり宮川先輩の方がいろいろと詳しいみたいだ。

「僕が知ってるのはこの程度だけど、律子ならもっと詳しく知ってるかもしれない」

「律子さんて稲村先輩ですか？」

「うん。あいつに聞いてみるともっと詳しいことが聞けるんじゃないかな」

「そうですか、ありがとうございます」

席を立とう腰を浮かせたけど、もう一度座りなおす。

稲村先輩に会いに行こうにも、どこに居るのか見当もつかない。

「坂上先輩、稲村先輩ってどこにいるんでしょう？そもそも稲村先輩って何部なんですか？」

「律子は軽音部だよ。今日は芳郎が帰るときにストーカーのようについていったから、きっともう家に帰ってると思う」

「そうですか」

もう帰っちゃってるのか、残念。話を聞くとしたら明日以降か。明日は金曜日でミーティングがあるし、土日は休みだから結局は月曜日までお預けかあ。

傍から見たら、そうとうしょんぼりしていたんだろうか？先輩が気を使つて声をかけてくれた。

「時間あるなら今から律子の家に行ってみる？」

「え？家に？」

「この時間になっても新之助も博美も来ないし、今日はもう誰も来ないだろう。暇だし律子の家で美味しいおやつでもいただこう」

「いいんですか？突然だとか迷惑じゃないでしょうか？」

「大丈夫、大丈夫。そんなの気にすることないよ。ただ、芳郎のストーカーを終わらせて家に帰ってるかどうかは微妙だけどね」

私はなんと返答していいのかわからず、苦笑いをするしかなかった。

「とりあえず行ってみて、居なかったら諦める感じで良いなら一緒に行つてあげるよ」

「ありがとうございます」

「お礼を言われるほどのことじゃない。どうせ暇だったしちょうどよかった」

もう一度「ありがとうございます」とお礼を行って部室を出た。

そうして私は先輩の言葉に甘え、一緒に稲村先輩の家へと向かったのだった。

第66話 名探偵・優希1（後書き）

今週はなんとか2回目の投稿ができました。
来週も頑張って2回くらいは投稿したいと思います。

第67話 名探偵・優希2

稲村先輩の家は、私の家とは逆方向で準急電車一本で30分。乗り継ぎなしで行ける鶴見駅だった。

駅から歩いて7分、稲村先輩の家に着いた頃には6時を回っていたがまだ明るい。

このあたりのことはよく知らないけど、高級住宅街なんだろう。庭付きの大きな家がたくさん並んでいる。

その中でも一際大きな敷地を有している屋敷のような家があり、それが稲村先輩の家らしい。

世界的に有名な建築家というから、もつと近代的な建物を想像していたけど、門越しに見える家はまさしく屋敷といえる様なものだ。門構えも時代劇に出てきそうな大屋敷のそれとよく似ている。

坂上先輩が玄関のチャイムを鳴らす。

インターホンから声が聞こえ、先輩が二言三言話すと自動で大きな木の門が観音開きのように開く。

門を抜けると敷石が玄関に向かって綺麗に並べられている。左右には純日本風の庭園が広がり、池も見える。

ぱつと見ただけで相当なお金がかかっているのがわかる。

金額は想像もつかないけど、高いだろうということだけはわかる。

玄関までいくと稲村先輩がすでに待っていた。

「悠一が家まで来るなんめずらしいわね。いつ以来かしら？」
「いつか忘れたけど久しぶりだな」

坂上先輩は靴を脱ぎながら稲村先輩と話している。

「それより、今日はお客を連れてきたんだ」

「ええ、見ればわかるわ」

私は慌てて挨拶をする。

「こんにちは」

「こんにちは、今日はどういったご用件でしょう？」

「なんだよいきなり、立ち話もなんだし、とりあえず律子の部屋へ行こうぜ」

「そうね、じゃあなたも上がってちょうだい」

「はい。おじゃまします」

こんな立派な家は見たことがないのでそれだけで圧倒される。

玄関から左右に廊下がのびていて、先輩は右の廊下を進む。私はきよろきよろしながらついていく。

そして2度ほど角を曲がったところで屋敷と屋敷を繋ぐ渡り廊下へ出てる。

渡り廊下の下には小川が流れていて、その先が池になっている。

次の屋敷へ移り、そのまま廊下の突き当りまできると2階へ上がる階段に着く。

こんなすごいお屋敷が本当にあるんだと関心してしまう。

階段は一本道の突き当たりだから迷うことはないけど、途中の部屋ならどこかわからなくなってしまいそうだ。

階段をあがってすぐの部屋に通される。

部屋は10畳以上ありそうな広さで、木目を基調としたお洒落な和風のたたずまいだ。

中心に楕円形をした切り株を模した座卓があり、いかにも座り心地のよさそうな座椅子が6脚備えられている。

壁には桐だと思われるテレビ台や箆笥、小物置きなどが並べられている。

テレビは見たこともないくらい大きい。一体何インチあるんだろう？

しかしよく見ると女の子の部屋としては少し殺風景だし、生活感も感じられない。

ここは稲村先輩の部屋ではなく客間なのかな？

「優希ちゃん、この窓の外を見てご覧」

窓の脇に立っていた坂上先輩が手招きをする。

先輩に言われるまま窓まで移動して外を見ると。

「わっ、すごい」

野球が出来るほど、というのは大げさだけど、小学校のグラウンドくらいはありそうな敷地の中心に大きな桜の木が3本植えられているのが目を引く。そして小さ目の梅の木が3本、さらに金木犀の木が1、2、3……5本植えられている。

綺麗に刈られた芝生が一面に敷かれていて、春には花見やバーベキューなども出来そうだ。

まるで公園のようだ。

「そうでもないわ、ただの広場ですもの」

「そんなことないです。綺麗に手入れされていて、すごいです」

「それよりも話って何？」

突然来ちゃったから怒ってるのかな。稲村先輩がぶっきらぼうなので、少し心配になって坂上先輩を見る。

「大丈夫、怒ってるわけじゃないよ。優希ちゃんがあまりにも素直に褒めてくれるから照れてるんだよ」

坂上先輩は小声だけど、しっかりと稲村先輩に聞こえるように私に話す。

稲村先輩が坂上先輩を睨み付けるが、それだけで何も言わない。

坂上先輩はこつちを向いてにつこり微笑む。

「とりあえず座ろう」

稲村先輩の家なのに、何故か坂上先輩が仕切っている。

座卓を中心に三人が座ると坂上先輩が今日来た理由を言ってくれる。

「今日は優希ちゃんが律子に聞きたいことがあるって言うんで連れてきたんだ」

稲村先輩が無表情というか気持ちを読み取れないポーカーフエイスで私を見つめてくる。

私はたじろいでしまいそうになるのを我慢して口を開く。

「はい、実は……」

話に入ろうとしたところでドアをノックする音が聞こえる。
話を止めてドアの方を見る。

稲村先輩には誰が来たかわかっていたようで、誰なのか確認もせずにノックをした人物を招き入れる。

入ってきたのはお手伝いさんのようで、飲み物とケーキを持って来てくれた。

どうぞ、と目の前に置かれたのはオレンジジュースとフルーツがたっぷり乗ったショートケーキだ。

とてもつやつやしたフルーツがケーキを美味しそうに演出している。

先輩達も同じケーキだけど飲み物が違う。稲村先輩はホットの紅茶みたいで、坂上先輩はコーヒーっぽい。

私が不思議そうに自分の飲み物を見ていると。

「真下さんはオレンジジュースが好きだったわよね？」

「はい、好きですけど……」

どうして知ってるんだろう？

「先日、食事の時もカラオケボックスでもオレンジジュースを飲んでらっしゃったので、今日もオレンジジュースを用意させてもらいましたけど、よろしかったかしら」

「はい、ありがとうございます」

稲村先輩って天然かと思ったらしっかり見てるんだ。すごいなあ。
「どうぞ、召し上がって」

坂上先輩が既にケーキに手をつけていたので、私も少し小腹が空いていたので、話を始める前にケーキをいただいた。

「律子のところで出るおやつは相変わらずうまいな」

「ほんと美味しいですね」

「ありがとう。私が作ったわけじゃないけどそう言ってもらえたらうれしいわ」

半分くらい食べたところで、話を始めやすいように坂上先輩が配

慮してくれる。

「優希ちゃん、律子に聞きたいところあったら遠慮しないで聞きなよな、律子」

律子さんとは余程仲がいいのだろう、坂上先輩は律子先輩にまったく遠慮をしない。

「ええ、どうぞ」

「はい、ありがとうございます。では遠慮なく」

そう言って居住まいを正す。

「実は、天文台事故のことについてなんですけど。稲村先輩なら何かご存知じゃないかと思ひまして。もしご存知ならお話を聞かせていただけないかと思つて来たんです」

「天文台事故のことは少しは知つていますが、どうしてそんなことを聞きたいの？」

「宮川先輩に少し話を聞いたことで、興味を持ったのでもっと詳しく知りたいと思つたんです」

「宮川君から聞いたのね」

「はい」

稲村先輩はしばらく思索してから応える。

「宮川君は天文台を使えるようにしたいと思つてゐるみたいだけど、なかなか簡単にいかないのよ」

「どうしてですか？」

「お父さんから学校側に働きかけてもらおうと思つて話をしたんだけど、取り合つてくれないのよ」

どうして取り合つてくれないのかわからないけど、それよりも稲村先輩が宮川先輩の頼みを聞いて行動していたという事実には驚いた。「そうですか」

「芳郎のためにもなんとか使えるようにしてあげたいのだけど、お父さんがあの事件には首を突っ込むなど言つて話を聞いてくれないのよ」

そうか、稲村先輩が動いたのは部長のためか。

「では、中野静香という人物はご存知でしょうか？」

「事故のあった時に、お父さんが学校の人と話してたのを聞いたので知ってるわ」

「その中野さんって人はどこの人なんでしょう？」

「どこって？」

「たとえば家とか、どの辺りから通っていたとか、高校はどこだったとか」

「家は知らないけど、確かつつじヶ丘の方から通ってるって言ってたような気がするわ。あの事故はワイドショーでも取り上げられたり、新聞にも載ったのである程度覚えてるわ。お父さんが作った天文台での事故ということで取材の人が家まで来たりしたものだから」

「つつじヶ丘というと、名木高なぎか高槻たかつき高校あたりかな？」

「つつじヶ丘という地名は知っているけど、私の生活圏内からは大きく外れているので行った事がない。

なのでどういうところかもほとんど知らない。

「そうだわ、高槻高校だと言ってたはずよ」

「高槻高校なら宮川と同じだな」

「え？宮川先輩も高槻高校なんですか？」

私は思わず身震いがして鳥肌が立つ。同じ高校ということはやっぱり何か関係があったに違いない。

「以前に聞いたことがあるから間違いない」

私は何度も頷く。

4年前に2年生だった中野さんの同級生は、もう卒業してしまっているけど、宮川先輩と同じ高校出身の同級生ならきっといるはずだ。

「坂上先輩、誰か高槻高校出身の人知りませんか？」

「高槻高校かあ。知らないなあ。律子は？」

「そうね、親しい人となら高校がどこかという話もすることはあるけど、そうでなければそんな話は出ないので知らないわ。もしよかつたら捜しておくけど」

お、驚いた。いつもすました顔をして何事にも関心をもっていないようなイメージだったのに、こんなに協力してくれるなんて。

「ありがとうございます。もし見つかりましたら是非教えてくださ
い」

「いいわよ。真下さんががんばってくれたら展望台がまた使えるよ
うになるかもしれませんからね」

「はい、がんばります」

そう言った瞬間『しまった』と思ってしまう。軽はずみにがんば
りますなんて言って、私なんかが今後天文台が使えるようになって
出来るはずがない。

稲村先輩を期待させるようなことを言ってしまったことを後悔す
るけど、もう手遅れだ。

「他にも聞きたいことがあったら全部聞いておくといいよ」

もう突っ走るしかない。がんばるといった以上がんばってみよう。

「ありがとうございます。事件に関わっていた男性2名についてで
すが、ご存知ですか？」

「そうね、一人は転落死したわよね。それが原因で展望台が使えるな
くなっただからよく覚えてるわ。名前は前川俊和、一人っ子でこ
両親に甘やかされて育てられたようですわ。そのせいか中学の頃か
らあまり素行はよくなかったらしいですわね。父親は大手銀行の支
店長を勤めていたらしいですけど、あの事件後銀行を依願退職して
どこかに引越したそよ」

なるほど、あの事件によって家庭崩壊となってしまったのね。

「ではもう一人いた男性のこともご存知ですか？」

「ごめんなさい、実を言うともう一人のことはあまり覚えてないの。
新聞にも載らなかったし、とにかくなくなった男性のことを連日報
道されていたのでそちらの印象が強すぎて忘れちゃったのよ。ごめ
んなさいね」

「いえ、もう4年も前のことですしね」

「そうね、ただ、その男性も亡くなった男性と同じ高校出身だとい

うことは覚えているわ。家も近所で幼馴染だったそうよ」

「そうなんですか」

次は何を話そうかと思案しているとドアをノックする音が聞こえてきた。

「はい、どうぞ」

稲村先輩がそういうと50過ぎの女性が入ってきた。姿からしてお手伝いさんのようだ。

「律子さん、そろそろお食事の用意ができます」

「あら、もうそんな時間？」

私は慌てて腕時計を見る。

7時45分になっていた。ここに来たのが6時過ぎだったのでもう1時間半も話し込んでいたことになる。

「す、すいません。突然訪問してこんな遅くまで…… 私達はそろそろお暇^{いとま}させていただきます」

先輩にそろそろ帰りましょうと目で訴える。

「なんだ、もう帰るのか？聞きたいことは全部聞いた？」

まだ聞きたいことはあるけど、もう夕食の時間のようにだし、これ以上の長居は申し訳ない。

「はい、ですからそろそろ帰りましょう」

「律子さん、幸造さんがもしよろしければお友達も一緒にどうかとおっしゃってますけど」

友達って私達のことかな？

「そうね」

「そうだな、よしせっかくだからよばれていこう」

え？ちよつと待って。勝手に話が進んじゃってる。

「先輩、そんな突然やってきてご迷惑ですよ」

「迷惑なもんか、おっちゃんが一緒にって言ってるんだから」

おっちゃんって稲村先輩のお父さんのことよね？

「真下さん、遠慮なさらなくていいですよ。帰りは悠一が責任を持って送って行ってくれるでしょうし気兼ねなく」

「は、はい。ありがとうございます」

「なんだか成り行きで返事しちゃったけど、本当にいいのかな？」

「では、私は準備をしてまいります」

「ありがとうございます、１０分後に食堂へ行くわ」

「はい、お待ちしております」

お手伝いのおばさんはそくさと帰っていった。

「突然こんなことになって本当にご迷惑じゃないんでしょうか？」

「私はやっぱり心配で、もう一度稲村先輩に確認してしまう。」

「大丈夫ですわ。きっと父も真下さんのことが気に入ったのよ」

「え？私お会いしたことないですけど？」

「ふふ、さっきからそのカメラで一部始終を見てたのよ」

そう言って天井の中心に備え付けられた物体を指差す。

「え？あれですか？」

「そうよ」

こんなところに隠しカメラがあつたなんて予想もしていなかった。何もおかしいな行動はしていないからいいけど、でもこれってプライバシーの侵害じゃないの？

「火災報知機みたいな形をしてるので、カメラだとは全然気付きませんでした」

「あら、勘が いい のね。そうよ。あれは火災報知機よ」

え？稲村先輩何を言ってるの？

意味がわからないんだけど。

「ちよつと驚かそうと思っただけよ、隠しカメラなんてないわよ」

「ちよ！なんなの。やっぱり稲村先輩って変わってる。」

「さて、そろそろ行こうか」

「そうですね、そろそろまいりましょう」

「いや、まだ３分も経ってませんけど？」

「まだ１０分経ってないですけど大丈夫ですか？」

「優希ちゃん、そんな細かいことを気にしちゃだめだ」

「そうよ、もっとリラックスして」

なんなんだろうこの二人は……　もしかして私が変なんだろうか？
部屋を出た私達は階段を降り、廊下を歩く。

渡り廊下に差し掛かったところで、坂上先輩の後ろを歩いてる私を振り返って話しかけてきた。

「優希ちゃん、すごいだろ。この建物自体が律子の部屋なんだよ」
「え？」

今まで私達がいた部屋がある建物を指してそういう。

「これ全部がですか？」

「そうだよ。すごいだろ」

「はい、すごいです」

「別にすごくはないわ。こんなに大きくても使ってる部屋は3→4
つだけですもの」

「そりやそうだな、一人じゃ大きすぎて使い道ないもんな。『離れ』
といえるレベルじゃないよな」

「大きいですね、いったいどれくらいあるんだろ？」

「約100平米、30坪ほどよ。家としては小さいけど、部屋としては大きすぎるのよ」

家でも別に小さくはないと思います。と心の中だけで突っ込む。

渡り廊下を抜けて母屋に入った私達をさっきのお手伝いさんがお出迎えしてくれていた。

既に待っていたということ、10分もしないうちにやってくる
ってわかってたのかな。

お手伝いさんについて廊下を歩いていると食堂に着いた。

「あら」

一番はじめに部屋に入った稲村先輩が小さな驚きの声をあげる。
どうしたんだろう？

稲村先輩に続いて坂上先輩、そして私の順で部屋に入る。

部屋の中を見回すと、普通の和風のお部屋だ。部屋を中心にフロ
ーリングの敷物が敷かれ、10人は掛けられそうな長方形のテーブ
ルがあり、一番上座にあたる場所に稲村先輩のお父さんと思われる

人が座っている。そしてその隣には稲村先輩のお母さんらしき人が座っている。

部屋をもう一度見回したけど、違和感を感じるようなものは何もない。

「お父さん、今日はテーブルなのですわね」

「ああ、今日はお嬢さんがいると聞いたのでテーブルにしてみましたんだ」

稲村先輩のお父さんはなにかのスポーツ選手かと思ってしまっただが、つちりとした体格をしている。

スポーツ選手というより、格闘家と言ったほうがいいかもしれない。

声も大きくとても豪快な印象だ。

「そうだったんですか。いつも座卓なので驚いてしまいましたわ」

「すまん、掘りごたつにすればよかったんだが突然だったので、とても間に合いそうもなかったからな」

私を招待したということだけでいきなり掘りごたつにしようだなって、いったい何を考えてるだろうか。

「まあ冗談だけだな」

え？お父さんも天然？

「さ、そんなところにいつまでも立ってないでこちらに来てお座りになって頂戴」

先輩のお母さんらしき人に促される。

テーブルの向かい側の奥から、お父さんとお母さんが座っている。

こちら側は奥から坂上先輩が座り、次に稲村先輩、そして最後に私が座る。

私は座つてすぐに挨拶をする。

「今日は夕食にさそって頂いてありがとうございます」

「いやいや、今日は律子と悠一の友達で可愛い女の子が遊びに来てるときいたのな。せっかくだから一緒に食事でも思ったただけだ。それより名前を覚えてくれるとうれしいんだが」

「あ、すいません。自己紹介が遅れました、真下優希といいます」
頭をフル回転させて、普段なら絶対に使わないような言葉を脳の奥から引つ張り出して使うので、かなり疲れる。

「優希ちゃんか、いい名前だ」

「ありがとうございます」

先輩達は黙って聞いているだけなので、さつきからずっとお父さんと二人の会話になってしまっている。

一対一で言葉を交わしていると、何か変なことを言ってしまったのかと気を使うので、すごく緊張する。

「わしは律子の父で幸造、そしてこっちが母の早苗だ」

私は立ち上がり「よろしくお願ひします」と言って頭を下げる。

「堅苦しい挨拶はいいから、どうぞ召し上がって頂戴。お口に合うといいのだけれど」

目の前には既に、先付けに八寸、そしてお刺身が並んでいて、まるで旅館にでも来たような感覚にさせる。

「わぁ、美味しそう」

「優希ちゃん、遠慮しなくていいよ」

「はい」

と、思わず返事したけど、今のって坂上先輩じゃなかった？私が慌てて坂上先輩の方を見ると、お父さんが豪快に笑う。

「悠一の言うとおりだ、遠慮はいらんよ」

「はい、ありがとうございます」

皆が食べ始めたのを確認してから、私も先付けからいただく。

胡麻豆腐のようだ。

「おいしい」

「そちらはクズの根100%の本葛粉を使った胡麻豆腐です」

お手伝いのおばさんが教えてくれる。

何のことかわからないけど、すごそうだったことは伝わってきた。八寸もいろいろ凝っていて見るだけでも楽しい。桜がいたらきつと喜ぶだろうな。

料理を作るのが好きだから、料理の話で盛り上がってずっとお手伝いさんとしやべってるかもしれないな。

お刺身も豪華で二切れずつだけど５種類も盛り付けてある。

白身のお魚はヒラメかな？それとトロ、あわびに甘エビ、そして……ハマチかな？

わからない魚の種類を聞いてみたい気もするけど、遠慮してしまっ
って聞けない。

お刺身をいただいているとまた料理が運ばれてきた。

お碗形の陶器を目の前に置きながら、お手伝いのおばさんが「こちらは蓮根饅頭のみぞれあんです。器が熱くなってるので気をつけてね」と説明してくれた。

「お刺身のお魚は何かわかりますか？」

おばさんから聞いてきてくれたので、わからないから教えてほしいというと説明してくれた。

白身魚はアマテカレイといってこれから旬をむかえるらしい。そして甘エビと想像していたのはシマ海老だそうだが、確かに頭の部分に縞模様がある。そしてアジか何かわからなかった魚はカンパチという魚らしい。初めて食べたけど身がよく活かっていてとても美味しい魚だった。

刺身を一通り食べて、先ほど運ばれてきた蓮根饅頭の器の蓋をとる。

蓋を開けると中から、湯気と共にゆずの香りがほのかにただよい食欲をそそる。

「これもすごく美味しそう」

「どんどん食べてね」

「はい、ありがとうございます」

あまりにも美味しい料理が次々と出てくるので、私はいつの間にか料理に夢中になっていた。

第68話 名探偵・優希3

「どうだ悠一、天文サークルの方はうまくやってるか」

「おっちゃん、サークルじゃなくて同好会だよ」

「そうだった、同好会だったな。しかし芳郎はよく頑張ったな」

「うん、あいつのお陰で一旦なくなった天文サークルが復活できたんだもんな。あいつはすごい奴だよ」

「そうですわ、お父さん。ですからあの展望台も使えるようにしてあげて下さい」

え？

展望台という言葉に反応したが、食事に夢中で三人の話を聞いてなかった。

「律子の気持ちはわかるけど、それは無理だ」

な、なにに？何の話をしてたの？

もう、私の馬鹿。なに春野菜のてんぷらに夢中で話を聞き漏らしてるのよ。

「どうして？お父さんが口添えして下されば学校も許可をだしてくれるのではないですか？」

展望台の許可を得る話かな？

「そうだな、芳郎もがんばってるし使えるようにしてやりたいとは思ってるんだがな」

「そうでしょ、以前は中野さんの学年が卒業したらまた使えるようにするって言ってたじゃないですか」

「そ、それはそうだが、いろいろ事情があつてだな」

「なんの事情なのですか？今日、真下さんがいらしたのもそのことについてなんです」

「そうなのか？」

お父さんが急にまじめな表情になってこちらを見るので、私は緊張した面持ちで「はい」と返事をする。

「ゆうきちゃんみたいに可愛い子に説得されたら協力しないわけにはいかないな」

まじめな表情を崩して協力すると言ってくれたので、嬉しくなつて即座に聞き返す。

「ほ、本当ですか」

「ああ、本当だとも。ゆうきちゃんの可愛さは天下一品だ」

「え？」

そっち？

「なんだ？嘘なんてついてないぞ」

今はそんな話してないんですけど…… 話をはぐらかしてるのかな？

それとも、もしかして天然？稲村先輩のお父さんだし天然の可能性大だなあ。

「あらあなた。妻を目の前にしてよくそんなことが言えるものですね」

「何言ってるんだ、一番はお前に決まってるじゃないか」

お母さん、満足そうに頷いてますけど、お願いですからこれ以上話を脱線させないでください。

「お父さん、学校に話をしてくれるんですわね」

どういうことだろう、稲村先輩が話を元に戻した。奇跡に近いかも……

やっぱり部長のためだからかな？

「それがダメなんだ」

「どうしてですか？」

「学校側からは内密にと言われてるんだが、ゆうきちゃんの可愛さに免じて少しだけ言うと、実はあの事件に関係のある人物が在学してるんだよ。だからまだ使えるように出来ないんだ」

「事件に関係ある人物ってどんな関係ですか？」

「これ以上はいくらゆうきちゃんの頼みでも言えないんだ。すまないね」

「そうなんですか。では他の事をお聞きしてもいいでしょうか？」
「なんだい？」

「事件に関わった人物であと一人名前がわからない人がいるんですけど教えていただいてもよろしいでしょうか」

「誰がわからないんだい？」

「中野静香さんと、亡くなった前川俊和という人はわかっています
が、もう一人の男性がわかりません」

お父さんは腕を組んで少し考えるような態度をとる。

「もう名前は忘れてしまいましたか？」

「名前を言っているのか悩んでる」

「ぜひ教えてください」

「そこまで言うなら教えよう。ただ、あまり難しいことに首を突っ込むんじゃないよ。これはゆっきちゃんのためを思っているんだからね」

その言葉に不安を覚える。もしかしてなにか危ないことが絡んでいるのだろうか？

「おっちゃん、なに真剣になってるんだよ。事件のことをちよっと聞いているだけだよ？もしかしてやくざとか危ない組織とかが関わっているなんてことがあったりするの？」

「いや、そんなことはない。ただゆっきちゃんは心優しい女性だと思っただけからね」

「おっちゃんさつきからゆっきちゃんのことべた褒めだなあ」

どうして私って優しいとかって思われちゃうんだろ？全然優しくないのに。まあお世辞なんだろうけど。

いや、そんなことよりも優しい人柄ということが何か関係あるんだろうか？

にしおけんいち

「西尾憲一」

「西尾？」

考え事している時に、いきなり知ってる名前が出たので驚いて復唱してしまう。

それに反応したのか坂上先輩も名前を復唱する。

「西尾だつて？」

「どうしたんだ二人とも」

一瞬驚いた坂上先輩だつたけど、思い直したように落ち着いて話す。

「たまたま知ってる名前だつたからびつくりしただけです」

坂上先輩は私が驚いたので、思わず反応してしまったというような感じでそう言ったけど、私は事件の西尾憲一という人物と西尾先輩との関係にある確信めいたものを持った。

それはまぎれもない、宮川先輩と西尾先輩が言い争っていた現場を見たからだ。

「そうですね」

しかし私もその場は笑つてごまかした。

あまり関係があると思われると、今後何も話してもらえなくなるかもしれないと感じたからだ。

それよりもはり明日もう一度宮川先輩と話をする必要がありそうだ。

「どうぞ、本日のデザートはフルーツ盛り合わせです」

いちごにメロン、びわ、そしてマンゴーが綺麗に盛り付けられた皿が目の前に出された。

話しながらも順調に食事を進めていたので、いつの間にか最後の料理になっていた。

既にお腹いっぱいだったけど、美味しいものは別腹なのか食欲がわいてきた。

完熟マンゴーは好物だけど、高価なので普段はまず口に入ることがない。

話も一旦落ち着いたので私はフルーツに集中する。

何から手をつけるか迷うところだけど、イチゴから食べることにした。マンゴーは大好きなので最後に食べると決まっている。

お腹がいっぱいなのに美味しいから一気に食べてしまった。

あつという間に平らげてしまったからだろう、お手伝いのおばさんがおかわりもありますよと言ってくれた。

でも、さすがにもう入らない。

今日は食べ過ぎた。明日はダイエットしなきゃ。

それから紅茶を飲みながらしばらく雑談をして稲村先輩の家を出た。

お父さんにはまだいろいろ聞きたいことがあったけど、そういう雰囲気じゃなくなったので聞けなかった。また改めて話を聞く機会が作ればいいんだけど……

帰り際、お抱えの運転手がいるのでその人に車で送らせると言ってもらったけど、電車もまだ間に合う時間だったし、何もかもお世話になるのも申し訳なかったので丁重にお断りさせてもらった。

帰りの電車は古居駅まで坂上先輩と二人だ。

「今日はいろいろとありがとうございました」

「お礼なんていいよ。暇だったから久しぶりにご馳走でもいただこうと、下心を持って律子の家に行っただけだから」

本当はそうじゃないことくらいわかってる。坂上先輩って優しいな。

稲村先輩や部長に対しても世話役って感じだし、きつとこんな人こそ心が広い人っていうんだろうな。

「でも、西尾の名前が出た時は驚いたね」

「そ、そうですね」

私は今また西尾先輩の名前が出たことに驚いた。

「あの西尾が本当に関係してるとは思えないけど、同じ天文絡みだからもしかしたらって一瞬思ったよ」

「そ、そうですね」

宮川先輩と西尾さんのことを話そうか迷う。

話したほうがいいのか、話さないほうがいいのか。それともどち

らを選択しても何も変化はないのか。

「ゆうきちゃん」

「は、はい」

「なんかいろいろ考えてるみたいだけど、一つ聞きたい」

「はい」

「どうしてこの事件を調べようなんて思ったんだい？」

先輩に言われ、改めて自分でも疑問に思う。

もともとは宮川先輩のなにか隠してるような態度に疑問を感じて、それを解き明かしたいと思ったのだっだ。

でも坂上先輩に協力してもらって、こんなところまで来て解き明かさないといけないようなものでもない。と思う。

さらに稲村先輩にまで、展望台が再度使えるように『がんばります』なんて言ってしまった。

「言えない理由があるのかな？」

「いえ、そんな言えない理由なんてありません。ただ、どうしてもんなに必死に調べようとしてるのが自分でもよくわからないんです。だから質問に答えられないんです」

「なるほど、成り行きでこうなってしまったってことかな？」

「そうかもしれません」

「おっちゃんが言ってた言葉覚えてる？」

「なんだろう？ 今日話したことはだいたい覚えてるけど、何のことを言ってるんだろう。」

「おっちゃんが、『ゆうきちゃんは心の優しい人だからあまりこの事件に深く関わらないほうがいい』というようにことを言ってたよね」

私は頷く。確かにそういったニュアンスのことを言ってたのを覚えてる。

「おっちゃんはちょっと変わった人だ。だけど意味もなくあんなことを言う人じゃない。あの言葉の裏にはきつと何かあるんだよ。だから今日も話せないことがあったんだろうし、展望台の再開も延期

「なってるんだよ」

「そうなんですか」

「うん、何かあるのは間違いない。きっと何か知ってるんだよ。誰にも言えない真実を」

「何があるんだろう？もう首を突っ込むのはよしたほうがいいのか？」

「私、もうこの事件のことは忘れたほうがいいんでしょうか？」

「それはゆっきちゃんが決めることだよ。このまま忘れられるならそうすればいいし、もしもつと調べたいならとことん調べるといい。どうすればいいんだろう。ここまできたからにはもう少し調べたい。それに何か真相があるというならなおさら知りたい。」

「でも危険なことなんだろうか？私が優しいというのは怪しいけど、調べていくうちに何か大変なことになってしまふようなことがあるんだろうか？」

「迷ってるようだね」

「どうすればいいのかわからなくなってきました」

「ゆっきちゃんは隠された真実があるとしたらそれを知りたいと思わない？」

「知りたいです。でも稲村先輩のお父さんも、坂上先輩も止めたほうがいいみたいに言うので、やっぱりこのままにしておいた方がいいのかな？と思ったりして悩んでしまいます」

「ゆっきちゃんが知りたいなら、調べればいいよ。俺が協力するよ」「え？先輩が？」

「どんな真相が隠されてるかにはわからないけど、もしゆっきちゃんがもつと知りたいと思うなら俺がしっかりサポートしてあげる」

「そ、そんな。私の勝手にやってることなのに悪いです」

「何も悪いことなんてないよ。俺も真相が知りたくなったから、一緒に調べようって言うてるだけだよ」

「本当ですか？」

「本当だよ、俺も知りたい」

「ありがとうございます」

「お礼なんていいって言ってるだろ」

「はい」

先輩って本当に優しい。これなら西尾先輩のことを話してもいいかもしれない。いや、話さないといけない。

そう決断した時、電車が止まった。

「じゃ俺ここだから、また明日」

え？先輩が突然席を立ったので慌てて看板を見ると古居駅だった。そして私がお礼を言うまもなく、先輩は逃げるように走り去っていった。

もう、いきなり帰っていくなんて…… 西尾先輩のことは明日でもいいけど、ちゃんとお礼を言う暇もなかったじゃない。

先輩の後姿を見送るうにも慌てて走っていった先輩は、既に改札を出て見えなくなっていた。

動き始めた電車の中を見ると、この車両に乗ってるのは私だけだった。私は体を少し横に向け、窓の外を見る。

どうして逃げるように帰っちゃったんだろう……

真っ暗な町並みの中にところどころ光るネオンを見つめながら、先輩の『俺がしっかりサポートしてあげる』という言葉は何度も思い返していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2741q/>

あなたと永遠の時を

2011年6月17日08時11分発行